

丙子雜俎

八

昭和十一年七月
中浣起筆

特別
14
1919
479



兩子雜想八

昭和十一年七月中浣起筆

○ふか根原の雷入りのを幸ひと東台の地底を潜つて
 又北いと多しと思ひ立ち光を伴ひの上空へ飛来の前か
 東成電車に乗るに雪車の起點停車場七地底
 である。此の地底工事ハ當り電車は堀敷をやりまは
 く又北はその電車に乗るに始りてある。動物園地
 方終とてその停車場と竟永坂野とが其の地底にある
 といふ。四十位を好む堀切草兩國有らるる(此
 國ハ江戸時代)といふ人の訪ふに家地が本年限り海
 國とちるといふ報をいひてある。此の(此)の(此)の(此)の



Maruzen Co., Ltd.

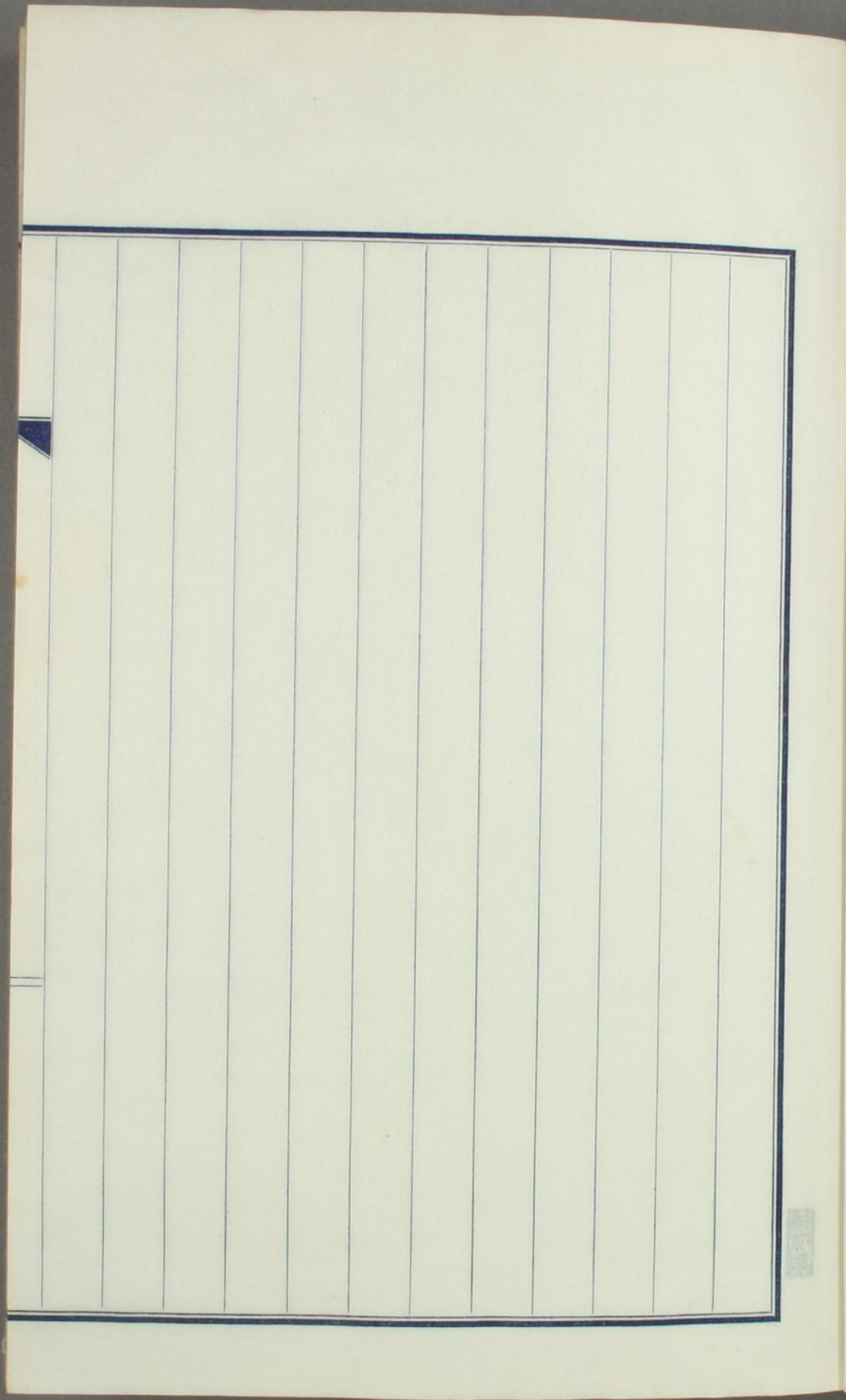
欠丁

天のふかき海に記す左の如くあり

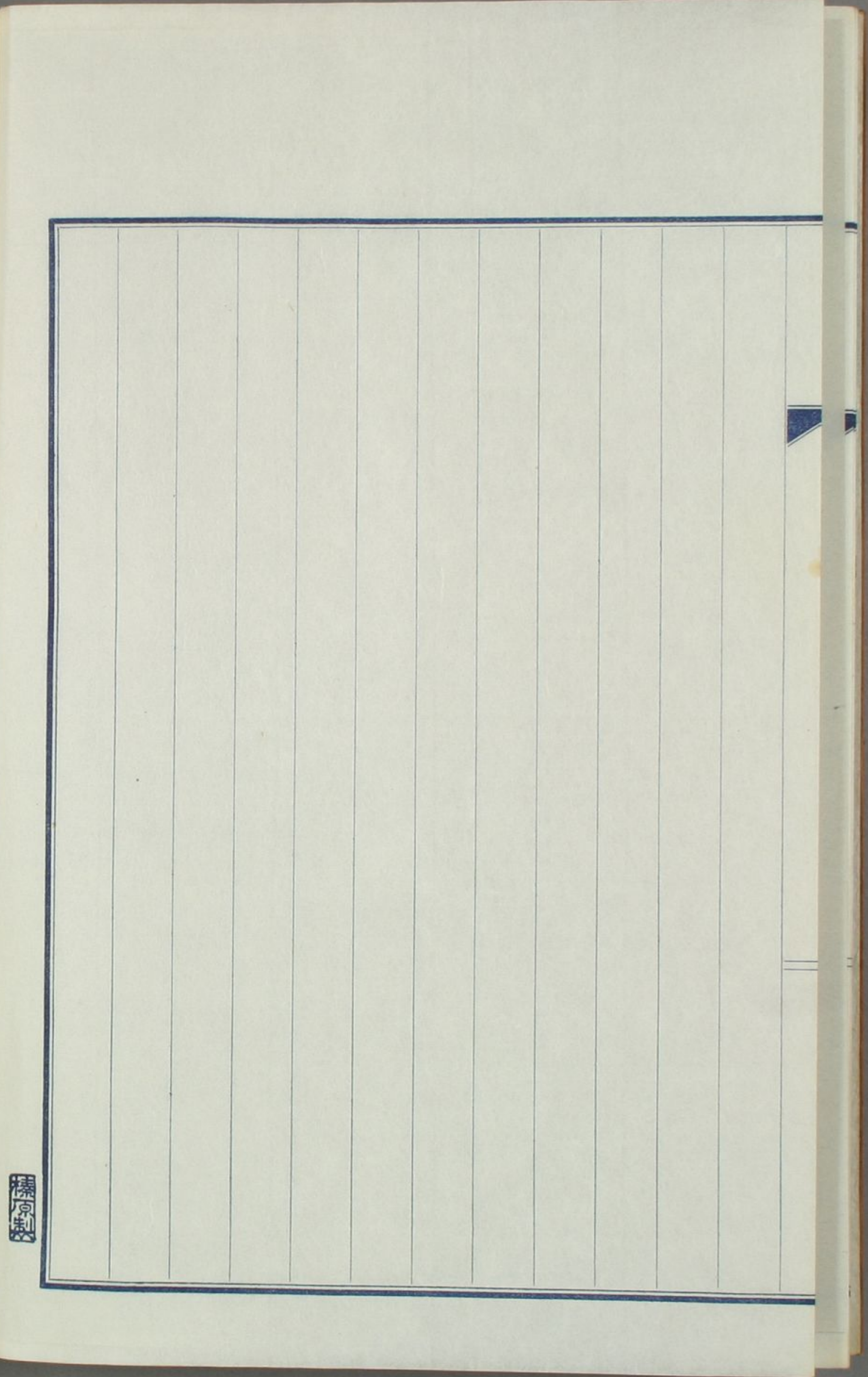
宗法以上の外思い出さるる往年一天皇為之等と講習合ふ
臨入の時長官大出外かありて今浦まを海濱より聴
者も舟に揮りて行かぬらんことありて去るに
の本居る何等の関係もさうだが、廣井が東京の支店
長かあるの時、文の協力を任ぜられたり、文の書院が借
支店から借りた金が三萬圓の多きと上り、大空
失後支店の故に任かせ、自分個人保証を以て関係は長
い煩ふと受け、毎月利子を拂ふにせむと容易に

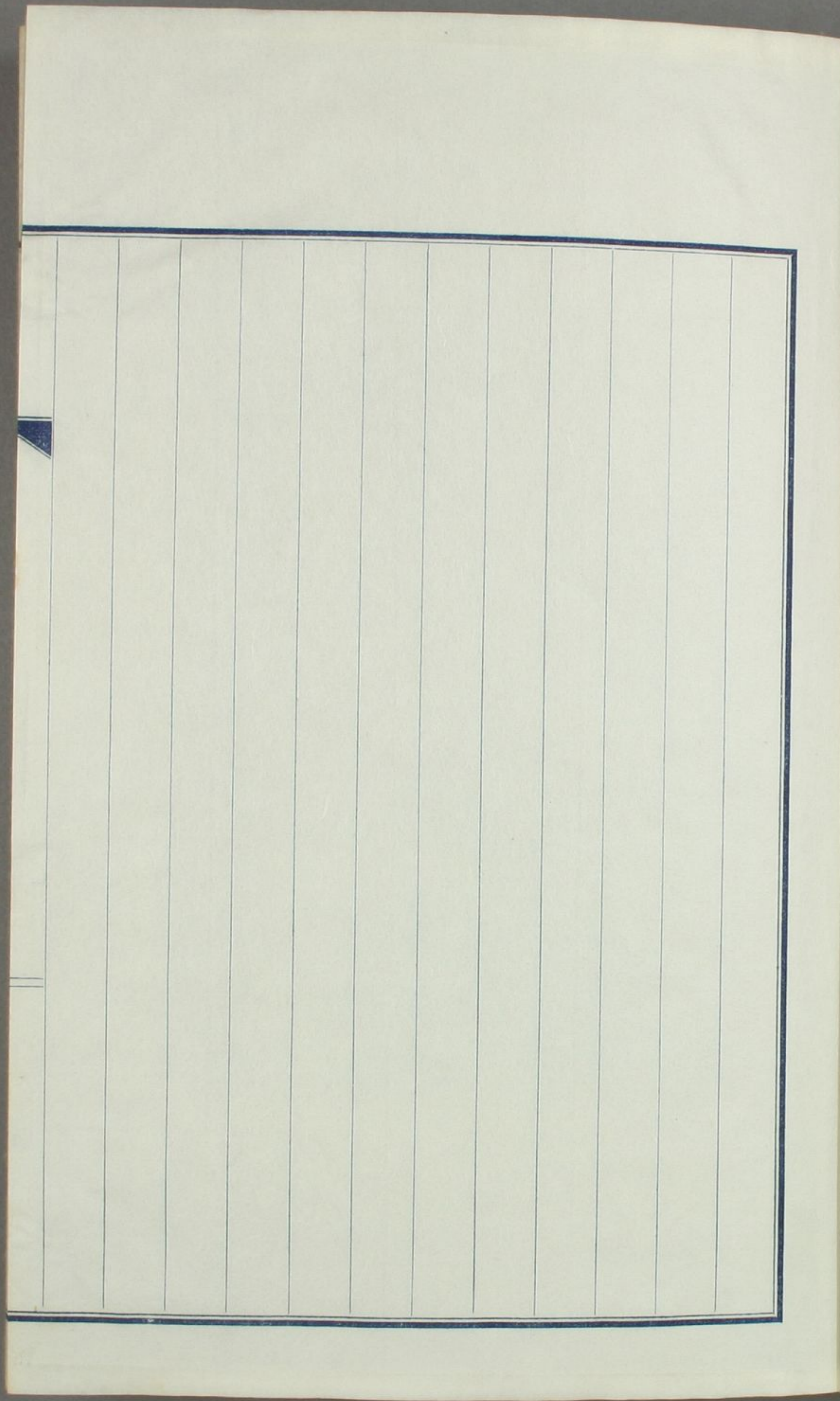
東京製

まゝに、廣井支店長の原長が、船の便を得たとい
ふく、**原長**が官界の流とあるに、長い間困難
を以て、**利店**忘れ難いことある。



源
興





興隆



六市島春城先生書

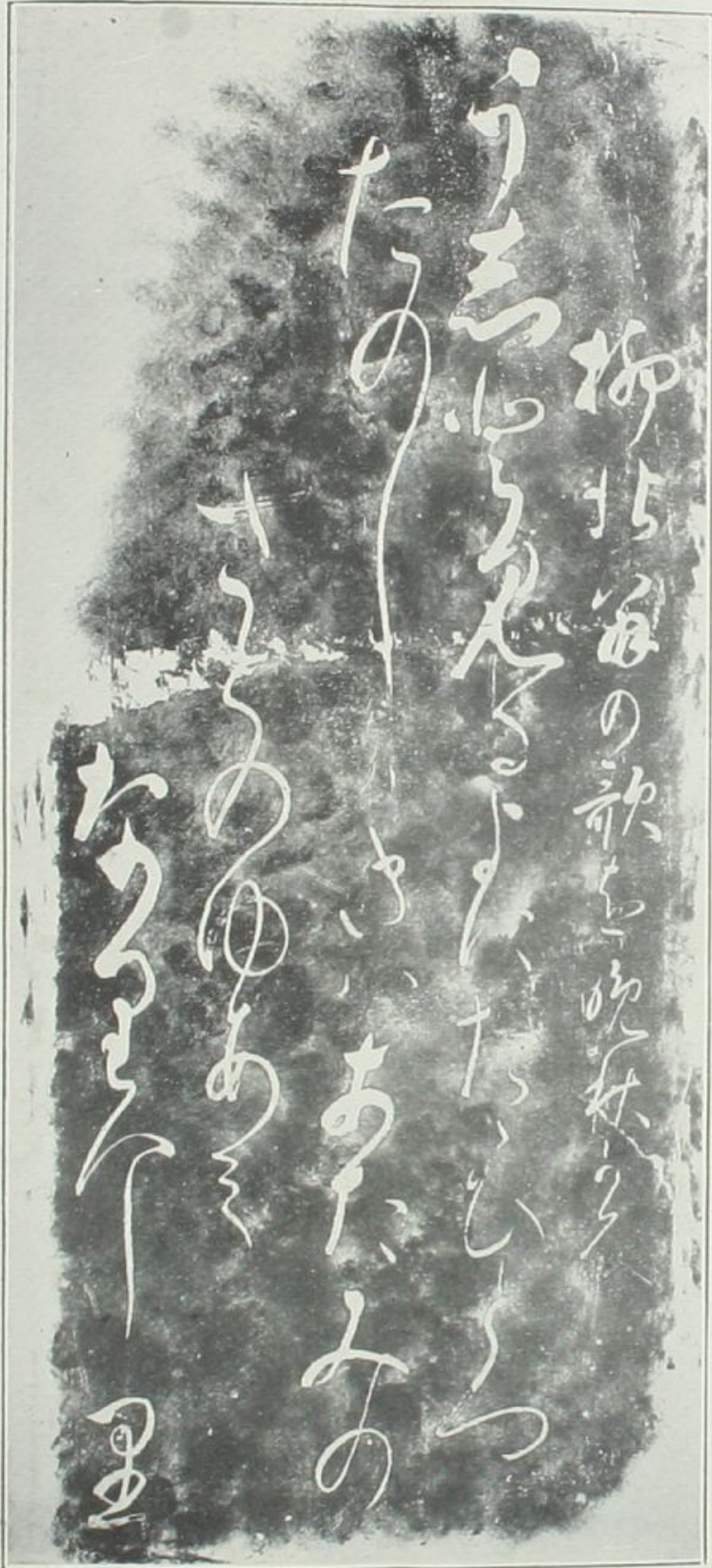


昭和十年乙亥十一月春成島春城翁書

神郡晩秋の旆迄至るべし所歎

橋原製

七 成島柳北翁歌碑 (會長筆)



○小野拜表の書幅を持ち来り、鑑定を請ふよありし心
書日のき匠に題ありしや、其詩の左の如し

並船電機宿地球、花旗沙橋旭光、
似彷彿去、離おの混杯不痒愁

留列の詩也

○小御門神社に小御門書むと出版し、一帙三冊と書
せり、此の神社の南朝の忠臣花山院師賢卿を祀り
別格を社社する、師賢卿傳といふ文貞公と云ふ、此書
ぬる所、公の歌集一冊、若翰集一冊、洋傳并其跋
一冊、依の同考案、用掛橋徳信男の跋する事、此公
の遺蹟、往來洋を無く、此書冊に由り漸やく得る事
得る、



○大酒と名は東湖の福長時、此詞に人の話と云ふ事、
東湖の竹とに李白集と銘し、本は打かありし、東湖は
々身、身定かありし、本は細く、内容が、
か、中まを、抄か入んて、酒の大徳利が、下の
抽子か、杯が、出たといふ。

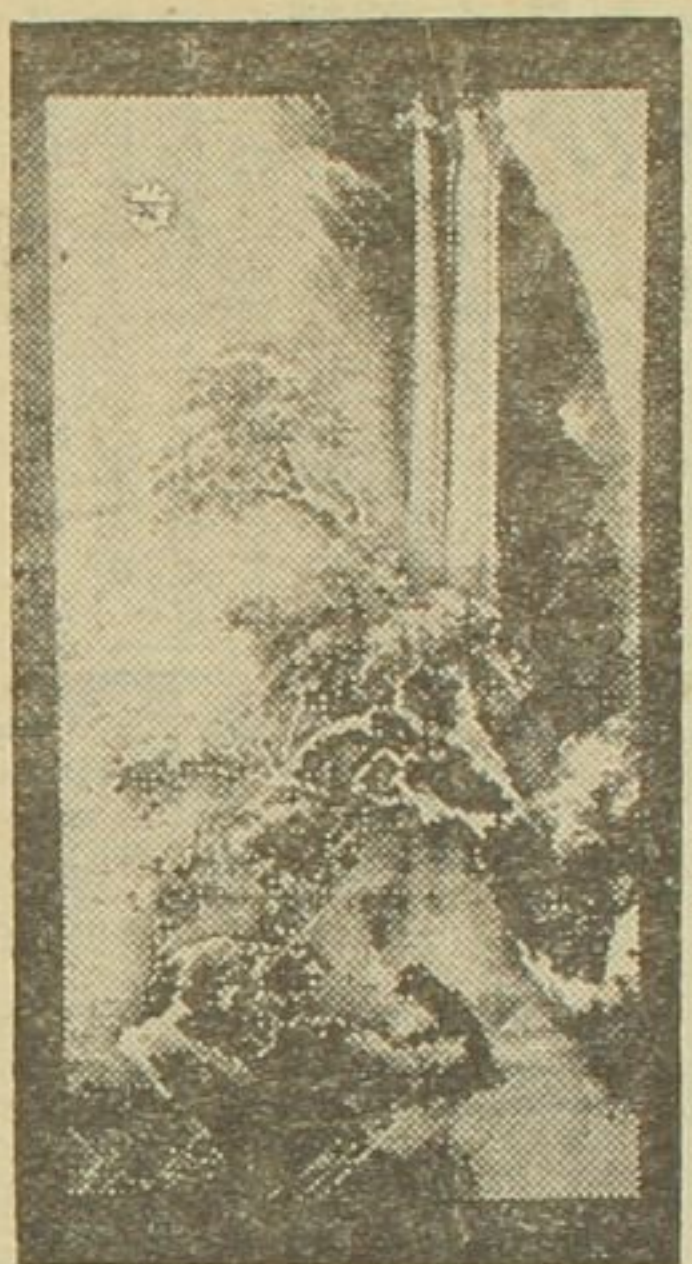
○割傷、打つ柏子木、此は、
の材、櫻か、は、思ふ、此は、
尤も、言を、ある、と、云ふ、を、知、め、て、
也

○今朝、是れ、新、乃、の、新、乃、左、の、記、す、か、あ、る、新、乃、
か、る、乃、の、流、の、傍、に、名、あり、ま、り、曾、つ、て、乃、井、の、跡、
か、る、乃、の、今、宿、乃、の、物、し、て、あ、る、が、此、同、と、い、故、を、異、
一、言、を、載、し、樹、木、を、缺、い、て、あ、る、が、早、し、名、乃、流、の、双、璧

數奇名畫の流轉

ロシア革命の波にもまれて
再び越後へもどる

應擧の力作



蘇聯の「守から
傳々ロシア帝
國ロマノフ王朝
宮殿の寶物とな
り、革命後に

上海に渡り、隠れ家にも
重中將の應當時上海
長谷川晋氏に殺され再び故國日
本に渡り、十四日新潟市郷土博
館に寄託品として一圓山郷土博
館に寄託品として一圓山郷土博
館に寄託品として一圓山郷土博

中山水之圖」と評する臨牀が陳列
される事となつた
幅は縦十二尺、横七尺五分の
大物で懸掛筆三次名畫京都圓
寺、零平神社のものと共にその
一つと稱されるもの。由本は
安永元年の夏、近江の國三井寺
に茶阿あり、その際越後の國用
浦大村大專寺の僧住も招かれ
たのであるが同會において懸
も列席して居り終つて大專寺僧
正から懸に「飛瀧寺」の寺院
田壁掛を依頼した。爾來二歳を
經てこの大幅を京都で受取り代
々の寶物としてみた所、先代住
職吉澤大安氏が于元不如實の高
めめに留却し其後轉々として東
京よりロマノフ家に留はれ皇室
の寶畫となつてゐたが

〇越後府からわかの地位の官吏かやのときん、先年自令
が前島翁の紀念像として著せし鴻爪痕のゆかり

間もなく革命勃發と同時に萬國に
に引出され上海で銀二十五萬圓の
値がつき昨秋事件や横濱事件等を
惹起するに至つたものである、當
時安永長であつた五井氏はかゝ
る國畫名畫が外國人の手にある
のは國辱であるとしてこれを萬難を
厭して入手し持歸つたものである
郷土博覧會長谷川氏は此の
一懸の難に接して、めてその
筆致の雄大さに打たれたまはした申
請さへすれば如論懸指筆のもの
のでありますが、當りから出た
斯る名畫が再び立歸つて来たといふ
事は何かの因縁でせう、寫
はその作品)

かあしん

東京

便官行が進行も関係ある部分も攝せり一冊刊行
し部内に配布しこれによるべきことを、自分も喜ばせり
之も亦前島翁のやうに喜ばせり、其の郵政創業以
代の苦心をいふの如く、其の由の如く、其の時
を得て存す、鴻爪痕の幾部、早大出版部が預りて
あつたから、その二年中、宿願も、其の時
得て存すれこれいと、其の由も、其の時
〇前島翁から原本の沿革も漫歴的に表はすべく
と頼みん引受けし執筆は、其の時、其の時、其の時
ある原本の表裏を、其の時、其の時、其の時
が可なり難儀であつた、但し川瀬一馬が沿革表の

歴史と言いつても、その印刷するに部分借り
受け七巻考へて受とれば之れより由りて思ひ付いたことが
いろいろあつた。四十頁ばかり文要用紙の者があつた
未だ。此前者と云ひは、その乱雑に役主たる全部
書き直した。校正者が違つた。張込紙、ぬめ
他、日誌等を出して、時の材料の提供して、七
月十九日也

城馬下東向晩涼

○の改の初年の次天皇の北地と瑞雲幸の印跡料の



馬並夜出かお死んたか、森の二ノ戸に埋まされた。その瑞
雲の改、陛下に命を奈の給はせし何集が馬の死を
悲んじ、女墓を守りつゝ、返り女墓を自分領有し
たといふ。四五里を把き、二十年間毎日の運動をし、
か、先角一畝領を得、果ては宮内省へ納領すること
なり。此所宮内省へ初めは納領を遂げれば、結果女墓の
所在地の御料地が、あると云つて、其の執心家も終つて其
御料を棄てた。或る人の語ると、又へんが斯う狂熱
家の性であることだ。

○馬並の花神 一草亭の印、其菩提寺の花神を
、自分領のあつて、吉田守とて、模刻するを、
あつた。三村竹海の花神、模印もあつた。其の真印と

或る人か印刻の紙等七心のは此の模印か後
 或るお紙屋の字を入つて折紙とせしむることを法つれば、其
 時居り合はれず物通しかられず尋ねるゝらんあるは
 枕箱の蓋に印を人の物に蓋むる接してやえれば
 とかやうな私印の類は無いと云ふは、此が性なうし
 枕箱が所花一そうもろい本は、その印の蓋る母か
 のこと云ふは、初は不審に思ふは、自らつじと志んて
 たり前年或る陳列會に貸したことがあつた、其時
 殺猪の香物屋の漢字を押しつけた、いふやうな
 印の減り入陳列會の事、
 〇三村林の字と云ふは、此印のことと云ふは、此は山利の旗



此の字は、
 印影と共



貼込帖
 竹 清
 (三) 己酉首丸印
 古銅印 鈕文己酉首丸

是筆家所藏之銅印也、古色蒼然、實千年以外之物、但未審己酉首丸者、果爲何人也、偶閱三代實錄曰、陽成天皇元慶三年五月廿三日壬子、伊勢國度會郡大神宮氏人神主姓荒木田三三、大神宮氏人有三神主、姓荒木田神主根木神主度會神主是也、自進大肆荒木田神主首麻呂以後脫漏荒木田三三、今首麻呂裔孫向官披訴、故因舊加之云々、因按己酉伊勢也、丸此云麻呂、然則此蓋爲伊勢進大肆荒木田神主首麻呂之印矣、其直稱己酉首丸、與所謂脫漏荒木田亦相契、又按國史、文武天皇十四年丁卯、置進大肆爵、歷統天皇至文武天皇大寶元年三月癸巳改之、想其人亦蓋在三朝之際也、唯是筆也、謬陋不敢自是、且梓其圖說、以俟博雅君子之鑒裁爾、讚岐 榎屋寺井肇印

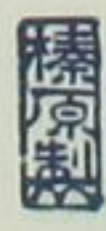
〇おの前の安田邸の合、
 印中丸は、
 何等の、
 〇一の本、
 園が、
 大利の、
 〇七を

物ゆゑ洗装の故かぬれば、其が阿婆であるか、人々の奇に千やりの
子の産を産まうとして此の故の行動のみを凝視してぬれば、
おれの子を産んで阿婆の体から出て行くの心を若も産んで
出れば、産産と産んで産んで産んで、此の産産産産と鮮
若産産といふ、産産産産産産産産と産産産産産産産産と産産
く出だすに飲ぶ家であるか、そのかゝる阿婆を呼ぶ人とし
擬して、阿婆の料理店にいらして来たまへんと云ふれば、何と云
當時の奴才をおもはして、おれは産産産産産産産産産産産産産産
の、新産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産
た。南時の産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産
此か、時々く産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産
礼も受けぬ、阿婆があつた。豊満の肉体がぬち家の

多ぶ、阿婆があつた、洗装の一時お婆に似つて、何と云ふ
く、阿婆に似れば、阿婆の故か、そのく、阿婆に似れば、阿婆
一手も阿婆があつた、阿婆の字を、阿婆に似れば、阿婆に似れば、
く、阿婆があつた。

○浅草の花屋、阿婆に似れば、阿婆の字を、阿婆に似れば、阿婆
書生時代、この阿婆は、阿婆の一名、阿婆の國中、五層園か
た、行りの阿婆や、阿婆の國もあつた。五層園の本不
の材木、阿婆の娘を、阿婆の産産産産産産産産産産産産産産産産
産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産産
く、阿婆に似れば、阿婆に似れば、阿婆に似れば、阿婆に似れば、
阿婆に似れば、阿婆に似れば、阿婆に似れば、阿婆に似れば、
阿婆に似れば、阿婆に似れば、阿婆に似れば、阿婆に似れば、
く、阿婆に似れば、阿婆に似れば、阿婆に似れば、阿婆に似れば、

此頃年元と違へば江戸と東京とを兼ねて居るに極なり
此頃のことと稱王寺宮の庭師であつた植木屋と兵衛
とよふが宮から嘉永元年向ふ拜領したのが初まりか
植木の老後の楽しみと多くの花木を植へて、安らげ
ちいさなものであつたと云つてゐる。進んで入坊料を取ら
人の故郷に供するやうな事から、花屋と云つた
ハ、いやらしい、是れ新設の公園であつたか或
夏に遊んで持主は是れよく愛するに於て、此の
の沿革とよふもの興味があるから、江戸と東京と
此頃の切敷きと此母子の終り、おめのこと
〇天平頃と云ふに當る者も七ありて、文献も勿論乏しい



が此頃の史談の興味のあることが少くともいふ。此頃或
人が遺書船の巻に、日本の快即や日本の学生が、春に
海へ出立を志し、書いたのを讀んで感ずるべき事と難
い。此頃には、阿部仲磨の遺書に、
と當時の洋行の事がある。留學生の洋行と云ふは、恐ら
く、この頃が文初と云ふ。仲磨は、年の俸、十七日、日
本に歸る秀才と云ふに、何があつたか、曰く、派手さ
のたまたまと同意である。下道、真徳の、四才の年、未だ
あつた。此頃、時の洋行、も、あつた。此頃、留學生の
性格、後、行往の、果、つ、よ、を、見、此、の、是、磨、の
二人の、坊、に、於、て、仲、磨、は、人、的、の、言、ふ、人、の、性、格、と
あつた。此頃、真徳の、政治家、性格、を、有、する、もの、あつた。

此の二麻布時の留置生々玄防が其の目此の二麻布から紫
 衣と物此程の智識のあり山氣が其の目此の二麻布と一
 通して其の目此の二麻布と一
 此所へ才の四の遣唐使多治比廣成の一行が去る
 入京して其の目此の二麻布と一
 して帰朝して其の目此の二麻布と一
 唐に去る其の目此の二麻布と一
 航海を恐るる其の目此の二麻布と一
 信濃上流に得魚の目此の二麻布と一
 仲廣と死して其の目此の二麻布と一
 して朝廷から勅使を其の目此の二麻布と一
 盛人の活躍其の目此の二麻布と一

漢書

此の二麻布や在朝者の眼此の二麻布と一
 が幸運の直傷の脱せる目此の二麻布と一
 奉けられ其の目此の二麻布と一
 の間、魂の兵法を用いて救る目此の二麻布と一
 を勢を得其の目此の二麻布と一
 其の目此の二麻布と一
 又使節を其の目此の二麻布と一
 入京して其の目此の二麻布と一
 唐に去る其の目此の二麻布と一
 航海を恐るる其の目此の二麻布と一
 信濃上流に得魚の目此の二麻布と一
 仲廣と死して其の目此の二麻布と一
 して朝廷から勅使を其の目此の二麻布と一
 盛人の活躍其の目此の二麻布と一

亦支那、戻り、仲摩の事もさながらの遂に日本へ帰るなり
又其後彼等二致しんが幸運と其備の物柄として亦大い
なる為に所があつた、而して時大勢力があつた。此道鏡の盛
を摩きんとするもかゝる自身、自身を念ふこと高き壽を
死人に。○いつもあること、此の高き生の幸不幸は仲摩と
其備の如き例がある。此の幸運と思ふのは、天正時代と云ふ
古の時代興味ある内容の、禮と云ふこと、恐らく此の
道鏡法に傳へるものあり、~~其の~~ 海航が支
又冒険の決死的にあつた。○又古の国際関係は支
那の東洋を往ぬる盛衰をいふなり、其の天分も盛衰は
最も居るとも云ふ、又その事、東白杜牧王位をいふが如
り、仲摩が終る本國の物に得たる、~~其の~~ 悔いなきあり、



又、其備の幸運と其備の如き大活躍をいふこと
の對照もあつたり、玄明道鏡の性情が當時の舞
台の人であつたこと、その事、その命の所をいふと好
材料の揃つてゐること、實にお詫いと云ふことを得
ぬ。

○此頃の旅行のしるし、遊、其の或る体系を利用
して番生を了る、其の地をいふ、旅を了る、人が徳とあるを
果敢に説く、旅に就て行ふ、漢代に注し、其の未だ
目今、其の頃、山河談海が得たる、其の如き、今、其の取
味を有らざる、其の脚力を有らざる、其の如き、其の
の旅の思い出を語つて自ら慰める、其の如き。

山年七十名以内の、四人と申合ひせて、其の復一日の追跡

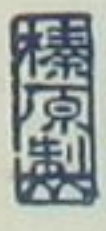
非^ニ旅を^ルことか^ハ幾回かある。概^{シテ}汽^車や自^動車^の旅
 だか、傍^リ切^りの自^動車^は車^中勝^手る熱^を吐^いて互^ひ其^の
 する^{こと}が、旅^を終^るの^いま^まが[●]向^白い。實^に今^日の如^く交
 通^が四^通八^達で鐵^道の便^利が開^けて又^も、俗^に便^利か
 らきて、昔^の如^き旅^の無^味無^い。昔^の京^都迄^行く日
 七^五海^馬五^十三^驛と一^日支^那の歩^く程^を十^数日^を要^し
 流^る者^も七^五海^馬の如^く今^日の一日^に往^復も出^来る^程の便^利
 道^の便^利は[●]林^林の如^き注^意の暇^もな^い位^にか^ら、趣^味
 的^な旅^もな^く甚^に然^然たる^{こと}の[●]●[●]ある。勿^論現
 代^の便^利的^な利^便の^或る^{目的}も急^速に達^{する}べ^い
 都^合の^よい^{こと}もあ^らず^い、[●]●[●]務^務的^な旅^の趣^味
 其^の旅^が趣^味の^旅い^ない。



自^今今^とも昔^の旅^がな^らず^い、[●]●[●]の
 無^いに^似て^の旅[、]旅^全全^とも^の行^程の^あら^ない^旅の^志
 一^くも^ない。昔^の旅^へ不^便な^らず^も相^違い^ない^か
 危^険な^らず^も、便^利な^らず^も、[●]●[●]便^利
 だ^らず^も、其^の味^がい^い。家^の中^や村^を歩^く
 くの^と違^いな^い。勝^栗栗^も、歩^ける^こと、大^地に^接
 する^山と^河ん、村^と石^の大^自然^の提^える^者
 こそ、[●]●[●]一日^流す^所の[●]汗^一汗[、]其^の
 所^獲も^亦甚^に大^きい^から^ず。大^自然^の汗^{する}者^も
 其^の美^とを^あら^わい[、]其^の秘^境を^あら^わい[、]其^の美^と
 美^が汗^と芳^香●[●]對^{する}御^寝美^心ある。昔^の如^き
 其^の美^がい^い、其^の美^がい^い。旅^の芳^香●[●]

楽を味ふよがある。

私「昔」の旅が恋しいのは、常つて「ワザ」と箱根の舊い道と
 駿興を極し、噴を能くする、興丁と昇かせし例の「若
 根」の古謡を唄へし興へたことがある。此頃七或る人
 が「八」の旅を欲するのを、そくかく、私へ敢て人を勸めるの
 じらのが、昔「の」旅がやつて見たいと答へた。多少難儀もあ
 り、金が老いたるとも老ひやうもいやくも是部のでし旅
 をして見たい。華美整潔の此部の旅と反對の「成
 質」ある旅をして見たいと云ふた。多分鐵道沿線の
 今「の」私の旅ちやくも旅は青山登山の外の「ある」
 まいとも思ふ。登山するが、其がどう危険かどう免れようかと
 野望の甚う七ある。赤裸の大自に接觸せんとする



考「わ」登山だが、今七昔「の」旅行と考
 考と考「の」旅行と考

「この」田々といふは、山が美し人案と離れたるは、
 人間臭い雲より山が美し。川柳子の頃ふたこと
 金のつたこと七出来ぬこと。此の「山」日本「の」こ
 る隠れた所が「山」である。此「山」斗方電氣
 の為め人々の行くところ。神秘境が大い又開けたら云
 へ、さういふ「山」を「山」所があるか知らぬ。凡「山」も
 さういふ「山」を「山」大自「の」神秘境「は」あ
 る。「山」自「ら」開けたら、ことごとく、兎角無「い」人
 跡なし。追かえさうい。昔「の」修験僧が、苦難
 と闘つて山を「登」いた。今「の」電氣の為め、巨力を投じ

「多子」を旅させるといふ事やうに、旅の若い時と尤も効果
がある。旅のつらみを感じたのは一種の教育である。毎朝くまの
此境遇、身を置き、我儘を制すること、由義をきく、汚穢
の道具の跡を引く、此の経験がある、自分の境遇がどうあるまいと
人々を苦しむことがあつても、旅を思ふ、思ふ、思ふといふこと、いと諱ら
ぬ、得る、七苦の一得である。

私の友人が旅後から九枚の無銭の半歳旅のしるしよが
あつた、まゝの交遊不便の時であつた。多くもつた、いかに
を尋ねて宿泊し、僅むうの功力と共つた、これと、これと、
やつたよ、帰つて来た時、一夜を徹して其の行程を、
此のころ七苦の七が、私とかが、旅の、旅の、旅の、旅の、旅の、旅の、



「多子」の旅する人、一千五百円あり、東京の電流、旅と、
あつた、冊子と、旅の、旅の、旅の、旅の、旅の、旅の、
と、旅行の、旅行の、旅行の、旅行の、旅行の、旅行の、
誰ん、誰ん、誰ん、誰ん、誰ん、誰ん、
と、何、何、何、何、何、何、
せめて、せめて、せめて、せめて、せめて、せめて、
の、旅、旅、旅、旅、旅、旅、
旅、旅、旅、旅、旅、旅、
その、その、その、その、その、その、
しか、しか、しか、しか、しか、しか、

「多子」の、多子の、多子の、多子の、多子の、多子の、
いと、いと、いと、いと、いと、いと、

日幼を眺めて、詠文の強果亦不道を生じ、色りある田つ比と
かある比、身軽ふい吐き何時び七出まの出来のやうな事、ことが
流行の最々大切なる事件である。

経験からすると早く詠余を思ひ、早く知らぬ方、
夏まとい日の出まの前、出まのまゝ、
爽快のまゝ、一時、
と云いぬ、
こゝろ、
るに、
の男、
早く、
不便、



及き、
口亦、
この、
一、
き、
か、
感、
い、
あ、
暴、
日、

こそういへん、削けおしの道と失、先陣は険区域
 南のほうへ、かくまひまゝ内着と黻へまきいある。大由
 大守等不時の天候の變に遇て、滞在すべからざるにつ
 くへ、かゝる。斯う天候に旅するは動と人か、是の危険に
 思ひぬことあり、陣も不仕、南のほうへある。どう不仕
 福と思ひ、かゝる滞在し、天候の定まらざるを待つ、其の
 暇もぬいある。長旅は滞在も疲れと休めざるあり、又、
 この中、陣も、旅行記を整理し、手帳も、
 録帳か、
 全銭の仕拂の切を要す。一日二日の旅程も、茶代や下宿
 を張りこんだ一時の快を取るの、
 旅の記、
 の数と



兵部省の用意が、此意味が、
 昭和三十二年七月廿三日

株屋根生かぬはず、とら社長を評する、其為と云ふ多
 の株を一株七塊と云ふのとき、其を白七継承に就て株
 の引交に困難し、いかに、今社の留結連七吉田の就
 任、全部賛成し、と云ふ、其に最早、若いより、やのへき時
 未だ別系の人、と云ふ、と置て、吉田の自合が社長
 たりし、印創社と、八年前印印印印が社長と
 の時、老社から引き抜、行つた、と云ふ、八年のあす
 一七短う、と云ふ、が、その一躍社長と云ふ、その通、痛快
 である、此月七吉田の、と云ふ、を期し、迄、彼人も私
 り、奔へ、と云ふ、~~中~~、之見がある、と云ふ、が、七知ん
 とい。

の大物である、吉田祥三、と云ふ、但、又、外、龍、軒、の、遺、書、を、刻



一七其部、が、振つて、と云ふ、此、後、七、一、冊、を、刻、し、て、その、中、に
 清の清朱印と、伴、り、持、持、し、て、江、に、し、り、し、り、夜、が、ある、其、人、の
 九、物、の、印、行、の、清、は、九、物、が、江、に、し、り、し、り、の、里、程、の
 清朱印、清朱印、と、乗、船、を、行、つ、た、親、定、を、あ、る、の、ひ、ら、の
 一、つ、り、日、数、を、行、つ、た、の、物、に、清朱印、の、清、の、運、命、と、云、ふ、其、人、
 持、つ、た、大、切、な、もの、を、將軍、の、代、が、い、り、改、め、つ、た、こと、が、あ、る、
 その、改、め、は、後、果、と、し、改、め、る、の、事、も、あ、つ、た、の、ひ、ら、の、言、の
 清、朱、印、の、四、つ、り、く、し、り、の、美、を、通、送、つ、た、行、列、の、最、中、
 と、云、ふ、其、人、の、將軍、に、献、上、し、た、お、茶、を、臺、と、名、渡、送、つ、
 こと、同、じ、極、め、あ、る、こと、を、自、合、の、始、り、文、書、に、就、し、た、
 こと、を、得、た、

〇是のの紙後、つら、早大教授、島、の、著、一、七、回、は

であつた。比人の島田三郎の長子で早大……の比早大から澤
 行を命じるといふ文通の科目と事休……の比早大が自分
 初めを合……三郎先生の思ひ出と語つた。比人七親衛
 の遺書に……の語りの……の思ひ出……三
 郎先生が……や者曲が大好む……の家庭……の
 と……比人七親衛……の長次……の
 ……自分の家の八郎の……の……の
 ……三郎……の……の……の
 ……の……の……の……の……の……の
 ……の……の……の……の……の……の
 ……の……の……の……の……の……の……の
 ……の……の……の……の……の……の……の



近所の新橋古志
 う二と切り振りしぬめ

▲海府のチャコシメシ
 佐渡でも古い言葉は多く海府に遺つて居るのである、然う
 して人情が純朴で儀式事を簡單に行はれて居る、他郷ならば
 客を招いて振舞(馳走)をして相當費用を掛ける場合にも此
 處ではこれを茶に招んで儀式振舞を濟すのである、即ち孫の
 紐直しだから茶に來て下さい、牛が女牛を産んだから茶に(女
 牛は金になるから)新艘(新に漁船を造る)を合せたから茶
 に、亡祖母の忌日だから茶にと云ふ様に吉事にも凶事にもち
 よい／＼と茶に招ぶのである、其茶には如何なる響應をする
 かといふに實に簡單のもので、爐に掛けてある茶釜の番茶を汲
 んで出し茶菓子には大抵有合せの澤庵漬又は茄子漬であるが
 炒豆を出す處もあれば南瓜煮を出すもある、豆腐煮でも

出さうものなら太郎平さんでは豆腐のゴツッウがあつた。大
 評判である、此茶に招はれて集るは近所の婆さん娘さんたち
 で八人も十人も寄る位のもので一時間餘り世間話をして茶を
 呑んでさアゴツッウになりなしたと云ふてさつさ歸つて了
 るのであるが、此茶に呼び方が問題で味のある珍とすところ
 である、今は茶に來てくだしんと子供が呼んで廻はるが
 以前は只た人家の前をチャコシメシと呼はつて通つた、尙
 ほ夫よりも以前は高い岩頭に登りて大きな聲でチャコシメシ
 と二度はかり呼ばつたものである(海府は山が高く海岸に迫
 つて居る處)然うすると婆さんたちはさア茶にイカンケヤと
 誘ひ合ひていつたものである、夫では其チャコシメシとは何
 んと云ふことであるかと云ふに是は京都邊の遊ばせ言葉時代
 の遺物で御茶を聞かせの古語がチャコシメシに略訛されて遺
 つて居るのであるといふ。(佐渡郡西三川村松田與吉氏報)

▼糸魚川のドンザ茶

婆さん達の茶で招び合ふ風は前項松田氏の報告を初め何處
 にもあることだが糸魚川のドンザ茶は番茶を茶釜で煮て抹茶
 風に立てるので泡立すには茶の花の干したのを四五入れる
 そして適當な茶碗に土瓶で沸かした番茶を注いで巻頭の茶釜
 で掻き廻はし勤めるのである、馴れると一種の手前が出来て
 婆さん達實に閑雅に膝の上で立てる、相馬御風氏の談による
 と之は元來出雲地方の習俗で同地と上越の昔時交通のあつた
 名残を知るものである、但し出雲では茶の花を碎いて粉に
 して入れるがその儘では入れないといふ別聞いた、味付けには
 食鹽をシイナ栗の匙で掬つて入れるのである(小林生)

○油屋肩衝とあるは、昔の人は、持たず、文殊と九の名人界と名を
 川名蒸ひある、文殊のより、常つてさへ此ともある、油屋肩
 衝をえと、存け止木の、後つたのを、支く、初めて、油
 屋、常慢、の、俣の高象、の、室、家、か、ある、名人の、ある、量、大
 向の時、常慢、の、茶、席、と、大、向、を、取、い、れ、時、量、量、公、か、此、の
 肩衝を、お、お、さん、代、り、は、此、の、肩衝、と、量、公、の、愛
 心、三、千、貫、を、流、く、と、お、さん、と、さ、う、口、お、か、る、り、り、り、
 の、(裏、裏) ば、あ、り、つ、し、此、の、名、松、下、の、味、公、の、手、と、油、
 七、松、の、お、お、さん、と、ある、は、止、木、の、尺、れ、を、後、と、誰、誰、
 史、載、せ、れ、の、を、信、念、と、さ、う、と、お、さん、と、



みたいな。

相見 笈指。

正木 笈指です、その中に油屋肩衝が入つてゐるので、その油屋肩衝はそれを十重二十重にして入れてゐる。それの一番外は、千兩箱みだいの形になつた、銭の金具を打つた厚い箱で、それを開けると、革の袋に入つた箱がある。その袋を取ると中に黄色の箱がある。黄色の箱を取ると、そこに挽家がある、それを有柄川かなんかで包んである。その中を開けると、御物袋には入つてゐるのです。

肥後 出雲の方に置いてあるのださうですね。
 正木 出雲に置いてある。それを私共は拜見した。拜見した時は、こちらから特命があつて見せるといふ。さうすると、御用達所といふ所がありまして、ね、其處に舊臣がある。私共に見せて呉れたのは、米村信敬と

云ふ方でしたが、昔のお侍型の方で、この方が紋服を着けて、榜の股立を取つて、禪を掛けて藏に入り、藏に入つて背笈をして出て来る。御用達所には紫の幕を引いて、さうして玄關からズツと入つて行く。床の間に据えるのです。さうすると、皆拜觀をする者に口漱ぎを添へて、手を洗ひ口を漱ぎ、さうして覆面をして呉れと云ふ。

西川 大變なものです、ね。
 正木 畏つて拜見してゐると米村さんがボツボツ取出される、その中には澤山のものが入つてゐるので、それはこれだけ入つてゐる——今申した、一番しんのものは肩衝ですが、肩衝のほかには、これを受渡す時の手紙がある、利休の手紙もある、それから土方縫殿助の手紙もある、それが掛軸になつて入つてゐる、それからそれに附いた園悟禪師の墨蹟といふものがある。

る、それもこの中に入つてゐる。それからその肩衝の蓋が六枚ある。

西川 代蓋です、ね。

正木 代蓋が六枚ある。これは皆、紹鴨、利休、織部、遠州石州、ズツとさういふ宗匠が蓋を作つてゐる。蓋を入れ換へて見ると、全く姿が變るやうになる。それから代蓋がこれも六つあります、それが白極もあれば、宗薫緞子とか、いろ／＼非常に貴重な名物です。これが皆一つづつ箱に入つてゐる。それが又二重箱かなんかに入つてゐる、それが高くなつてゐる。さうして肩衝を出すと、その肩衝の据はるお盆がある、名物盆です。

西川 堆朱ですか。
 正木 堆朱ぢやない。若狭盆です、何とか云ふ名物です。又その名物の書付もあります。さういふ風にそれで又二重か三重

西川 大變なものです、ね。

正木 そこでだね、油屋肩衝といふものはイコール隠岐一國といふものになる。

西川 今だに不味さんにあるのですか。

正木 あるのです。大變なものですよ。松平家で油屋肩衝の賞翫といふものは。

西川 どういふ心理状態でさういふことになるのでせうね、どうしてそんなに大切に思ふのですか。

正木 それは松平家の油屋肩衝の容物と來たら、大變なものですよ、相見さん御存じですね、謂はゆる背笈、笈です、ね、厨子

になつてゐるといふの、ある
じはこれくらゐのもの入れれど
も、これがだんく殖えてこん
なにあつてすよ。

西川 それで、出して卒然と
し、御覽になつた時に、何か魅
力はございましたか。

正木 それはチャンと圖が描
いてありましてね、何が一番先
にあつてどうしてかうしてとい
ふのを、その通にやらなければ
入らないのです、それはチャン
とやつてあつて、うまく詰まつ
てゐるのですよ。

西川 盆に載せて御覽になり
ましたか。

正木 見ました。
西川 如何にもいゝなと思
ひになりましたか。

正木 それは非常にいゝもの
です、物はね。唐物の肩衝で、
たつぷりしたもので、肩にいつ
ぱい藥がたまつて、それが黒く
たまつて

なだれがある

西川 武張つたものですか。

正木 武張つたものだが、
わびたやうな所もある

西川 ?

正木 わびたといふものでは
ないが、兎に角、結構なものだ
といふ感じがする、うるはしい。

肥後 二寸七分くらゐのもの
ですか、高さは。

正木 そんなものです。

肥後 これだけ詳しく書くも
のですから、餘程いゝものです
ね。

西川 それは、油屋常悦と云
ふ人が支那貿易なんかやつて
ゐて、それを持つて歸つて自分
が持つてゐたのですかね。

正木 それはさうかも知れま
せんね、堺衆ですから。

室の堂

すす。

而志す、保つめ圓寺が其際大
二露つて焼く、以時女へ極致
此の油屋七不女、其あつた
北の肩衝を千離し、再下
此北の肩衝の量、公の
不費と流く、油屋肩衝

代々の

油屋肩衝といふものは妙
國寺プラス三千貫といふ値打の
あるものだといふことになつ
た。それから、この謂はゆる油
屋肩衝は、その後土方縫殿助か
ら徳川家に召された、さうして
それが徳川家から土井大炊頭
に下されて、それから土井大炊
頭から、芝の天徳寺に肩衝を納
められた。天徳寺は松平不昧公

のお寺なんです、それで不昧公
が天徳寺からそれを取出した。
それを取出した時に、その當座
若干の金を上げて、尙ほ松平家
が續く限り天徳寺に一年に米五
十俵を送る、それだから知行み
たいなものですね、さういふ約
束で取出した。そこで松平の重
寶になつたわけです。ところが、
その當時公儀より時々大名より

松平重寶

重寶の御用を仰せつけられるこ
とがある、さうした時にはどう
しようと思つて相談をして、こ
ればかりは領分の隠岐の國一國
を召されても肩衝は差上げる譯
にいかぬ、とかういふことを申
合せたといふ話が傳つてゐる。

北二郎正木

包社さん

何れか出さる、おれ

相桐油紙、良裁いん、入つてゐる、まをえり出す
月を見ておもしろく、此ともあつてゐる

〇思ひの世の物、修む、其外、四人の甚、集、以、傷、ふ、る、の
所、別、か、あ、る、と、ま、と、自、分、の、此、の、経、験、か、あ、る、の、こ、と、を、い、ふ、と、一、説
し、た、也、公、の、あ、る、の、こ、と、を、い、ふ、と、種、々、の、説、を、い、ふ、と、物、の、形、は、極
め、と、小、さ、く、相、子、大、程、の、よ、り、か、ま、さ、く、氣、根、を、集、め、
と、い、ふ、と、花、の、あ、る、の、こ、と、を、い、ふ、と、人、の、あ、る、の、こ、と、を、い、ふ、と、人

かひりなき、とて又ることも未だこれに西海へ攻味
を尋ね異つてあるのみならず、一概に或る定まつた法
のないものも甚多し。偏してあるものを、おもしろいとい
感と起るものも、壁へ二層の時計の機械を
分解して並べしめりやうするものも、機械の心の
模造するものもあつた。個々の集めしものも、端々海
を渡つてくるものも、機械の模造するものも、無論無くて
さうするものも、セリト貴金のものもあつて、成しりと思ふ
た、貴金のものを、珠をききとるものを、名工の手によ
つたものも、をまゐりてある。日本にあらざらん、認めれば米
銀二千兩をきいたのを、珍しくせざる。眼の鏡を添
へて出でる程度がある。日本に、サリ、搜しを行つたら

海防

ふかしくし思ひながら、趣味眼が低いからうらむ、この千日
入りの心あつた。

七月廿六日

○庄をへ渡り吾河に降り、炎傷者二三人止す、折法の
中、一千人を出す、えやうを、戦争の不用、注
意し、寧ろ七日後の在り、戦干入りの橋板を捨て、
つゝ、れき出し、と評定法をかたり、あるもの、何か異
常らし、推し、致さる、然れ、渡り、一日上り、動物の
の異動、腕極人を、躍り、下あり、時、薬と、遊ひ、つめて、
漸く、捕ら、と、也、其の、騷き、穴から、戦争の、あし
、其事あり、人を、駭か、し、故を、以て、正、道、何を、する、ま、ふ
、此の、橋を、七、五、一、程、の、深、習、也、矢の、あり、お、柘、漆、若、方
、り、也、

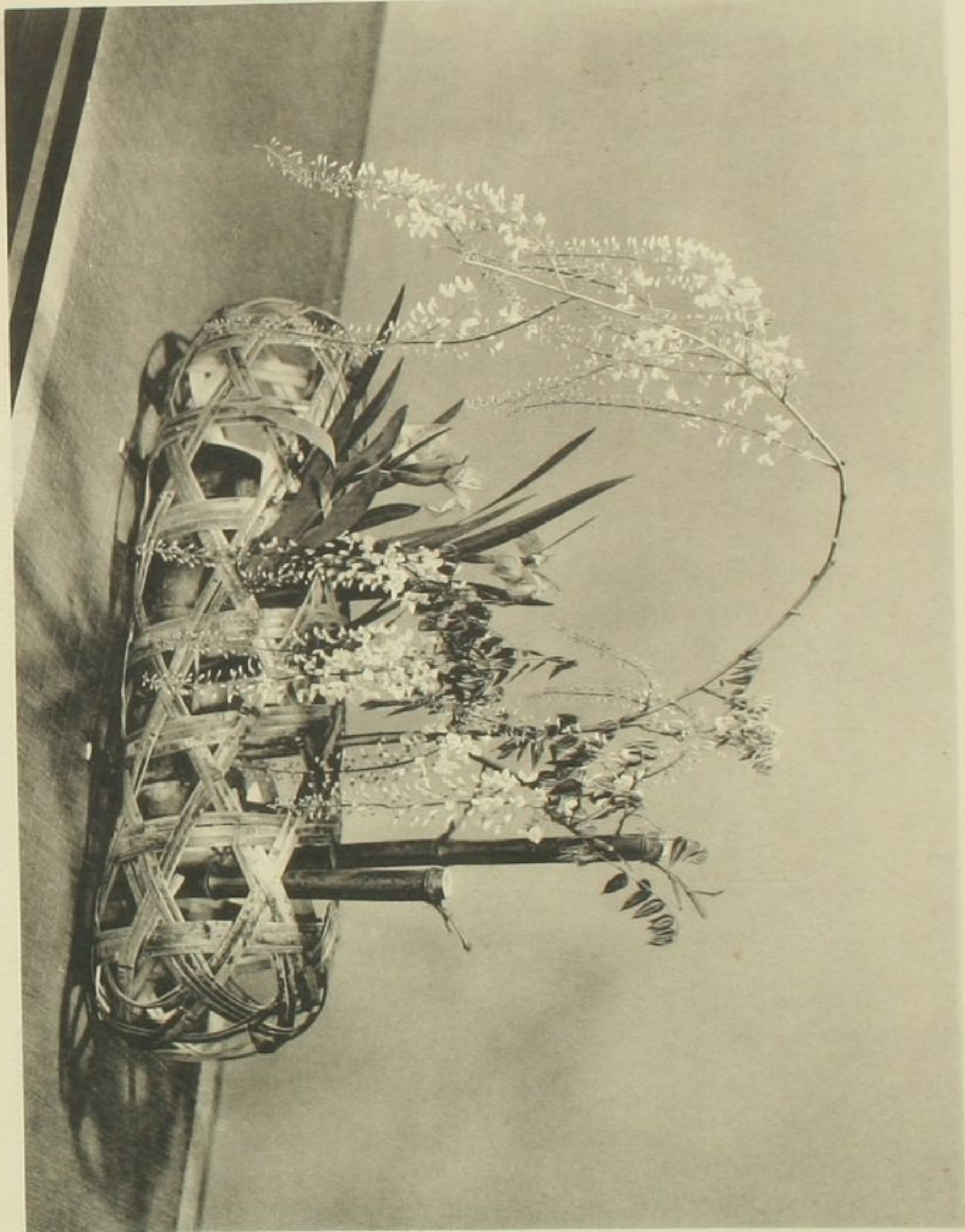
あゝ其の心

○白木をこぼしてある發射機関係刑事の陳列を
 一説に、あまの鼻味をこぼして、舊時代の槍、劍具と
 して坐り石と膝を載せる石があつた、そのほか、
 杖もあつた、こゝにギヤクに七八分深く鑿入つた杖
 がある、衆人を後へする層の杖もあつた、袖が
 ぬか二重り出たもの、人切淺な二刀用の刀もあつた
 おもしろく思つたもの、お下極細の、**舞臺の巻**の筋を
 埋め、目標と氏名を長方形の石に彫つた石
 が出た。或る書画の偽造、家が心つた社名家の
 印を偽造して印影が出たもの、其の多きもの
 がある、昔一地域の許、**地回**、**裁**、**決**
 此のまゝに**孫**と思ふ、**地界**、**運**、**く**、**一**、**縁**

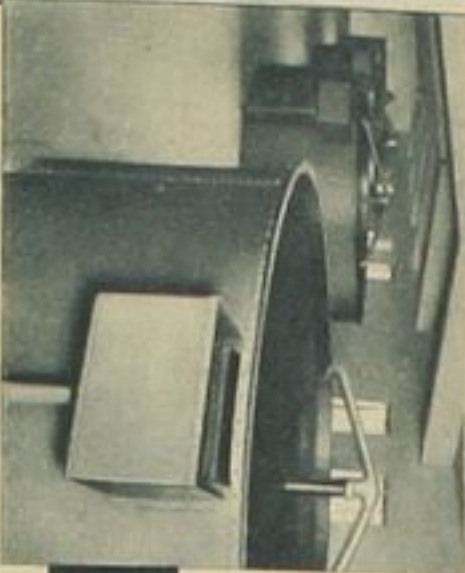


七、**き**、**ま**、**の**、**杖**、**の**、**柄**、**の**、**印**、**が**、**杖**、**と**、**あ**、**つ**、**た**、**刺**
 ちの人間の皮が、**杖**、**か**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**
 刺ちの、**槍**、**も**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**
 一、**杖**、**の**、**世**、**の**、**槍**、**も**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**
 杖の、**杖**、**の**、**世**、**の**、**槍**、**も**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**
 杖を添へて画してあつた、**杖**、**の**、**世**、**の**、**槍**、**も**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**
 杖もあつた、**杖**、**の**、**世**、**の**、**槍**、**も**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**
 の、**杖**、**の**、**世**、**の**、**槍**、**も**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**
 一、**杖**、**の**、**世**、**の**、**槍**、**も**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**
 杖。又白木を、**杖**、**の**、**世**、**の**、**槍**、**も**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**
 杖も、**杖**、**の**、**世**、**の**、**槍**、**も**、**あ**、**つ**、**た**、**あ**、**ま**、**の**、**厚**、**い**、**ま**、**か**

七月廿二日



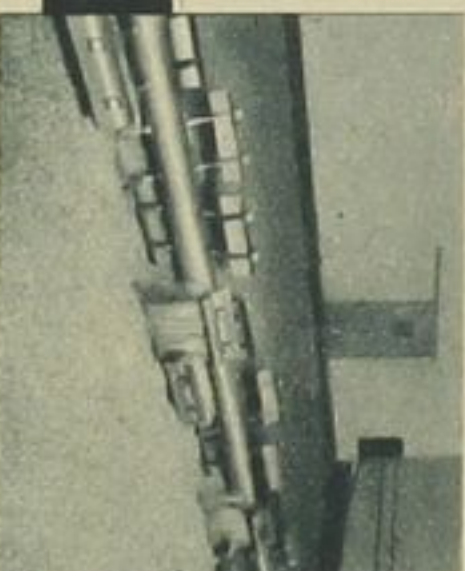
日本酒の歴史



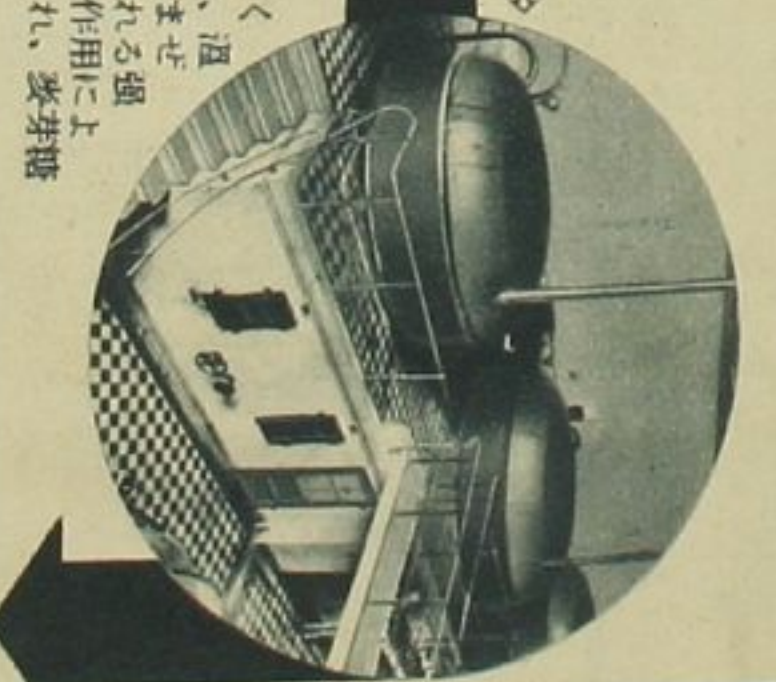
麦 槽
 精選した大麦を浸漬槽に入れ、約三日ほど水に浸して発芽に必要な水分を、充分吸収させます。



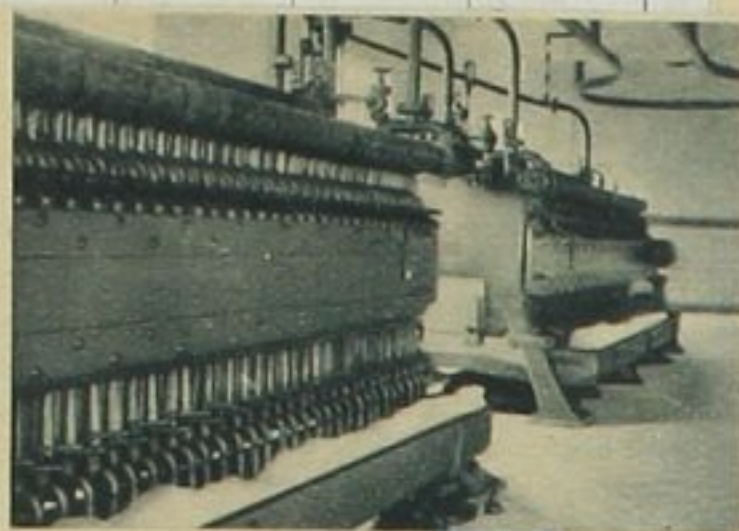
発 芽 槽
 適量に水浸した大麦をこの中へ移し、約八日間ほど所要の温度と湿度とを興へ、芽と根が適量の長さになり、乾燥槽へ送ります。



乾 燥 室
 こゝで約二日間ほど加熱乾燥空気を送つて水分を除いて行状へ送ります。これが原料麦芽です。



糖 化 槽
 麦芽を粉砕機で細かく砕いて仕込室に入れ、温せると、麦芽中に含まれる強力なアスターターゼの作用により、澱粉が分解され、麦芽糖になります。



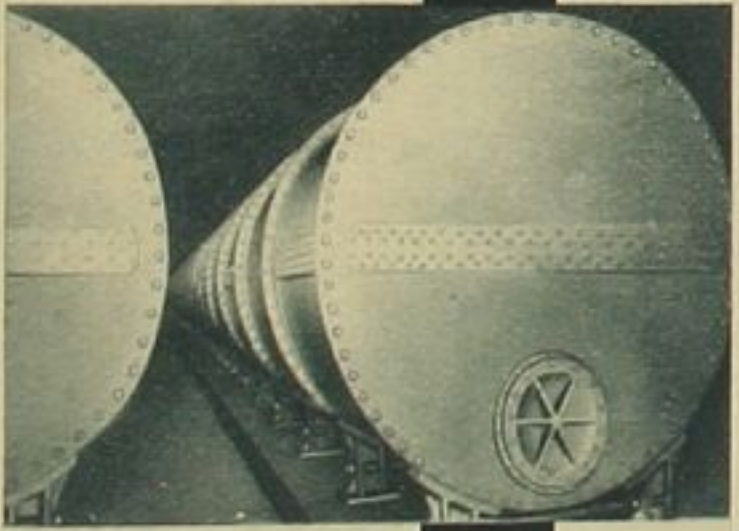
麥汁濾過機
 糖化を終った麥汁を濾過機に通して透明な液にいたします。そしてそれを煮沸釜に入れ、ホップを加へて煮沸し、ビール特有の芳香と苦味をつけます。



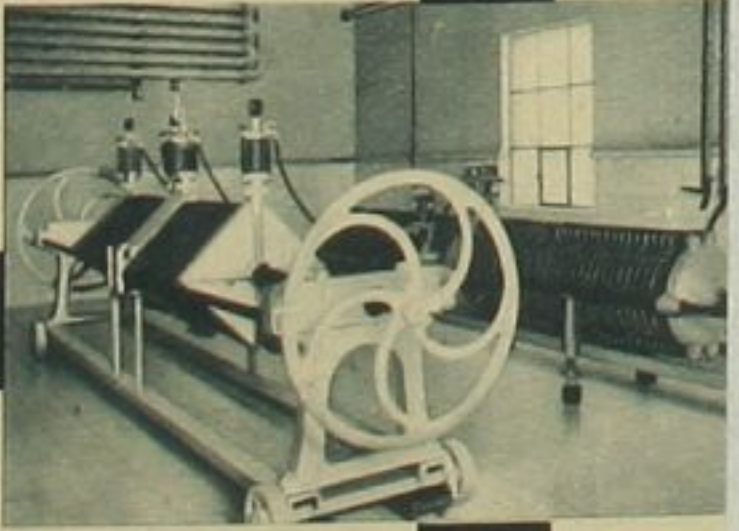
麥汁冷却機
 煮沸した麥汁はホップ分離機でホップ粕を除き冷却機で冷却されます。



醗 酵 槽
 冷却された麥汁を醗酵槽に移し、麥酒酵母を加へると、酵母は速かに又旺んに繁殖し始め、糖分が殆んど酒精と炭酸ガスに變化します。これが即ち麥酒特有の炭酸ガスなのです。



貯 酒 樽
 約十日で醗酵が終ると酵母を分離して貯蔵鐵樽へ移します。こゝで約三ヶ月間冷蔵して熟成させます。



麥酒濾過機
 熟成したビールは、濾過機を通して透明に濾過します。これで僅々芳醇な生ビールが完成されます。

の目黒に工場があるのを本社がある地方を念うれば、
 市内のビール飲の外國の古園が出てゐるが、それ以前
 三千五百年バビロニア人がビール樽から夏にビール
 を吸つてゐる同様が、そんな古代のビールがあるが、
 勿論今のビールとは全然味もつれよめかあるらうと、
 市内別々を巡るうちに、つれづれ柳屋伯の出現
 行程のビール飲が出てる中、ビスマリーの顔
 濃垢りるものがあつて、欲しかつた。日本びつ凱歌
 甲の顔をも刻して止つた。おもしろかと思つた。
 日本びつ多量のエツアを飲め、斯く飲めは、
 しまつ。まあ、そのビールは決闘するやうなこゝ
 起るであらう。自分もさうせ、スボルツ連が獨り

樽詰機
生ビールは完全に洗滌された大小の麥酒樽に詰められ、市場に送り出されます。

樽詰機
完全に洗滌した清浄な樽に生ビールが詰められます。このビールを長期間の保存に堪へ得るやうに蒸通しを行つて殺菌します。

装製室
殺菌を終つた樽詰ビールは、一本づつ厳密な検査を行ひ、自動的に商標が貼られ、これで初めて完全な商品が出来上つた譯です。

酵母
ビールの醸造に使用する酵母は全く特種のもので、その品種の良否によつて、大いに麥酒の味に関係いたします。

ビールの主要原料は
大麥—ホップ—酵母です
× × × × ×

大麥
ビールの醸造に使用する大麥は普通の大麥と違つて、麥殻が薄く、且、粒が肥大です。

ホップ
ビールに爽快な舌味と香氣をつける、蔓性の多年生植物の花です。

の麦酒長談合の日本麦酒
 株式会社合資の宝徳の為めとい
 はんにか、此合資の資本額を
 九千四百萬圓とすからして
 徳田と重んじてゐる、と云

リの事も生々傲らふいと寧ろ不審、思ふをある、麦
 酒ハ日本酒の如く低面のもむき一氣に飲みやると
 其所の痛快味がある。コップもけろふや形のよすがど
 一口味を交ハセントかを減す。固飲の大コップが適
 する所がとる料理屋でもかざるコップを出すのに困
 る。何れも道道のやうなる人ハ麦酒を飲まふといふ
 べからずが、千ナコップを出すのは自公の執事の所を
 扱かし一者大振りのコップを購て何れのもをわい
 ることがある。まんじグレート一氣に飲み不すりを又も
 道道の腸胃がらふいから散果するといふ事ハことある
 る。此れも新酒で注文と飲んた時、麦酒ぬきの一友を
 薦又ハ此のいまもんじ。えの注文も大コップが一氣に飲



此儀ハ氷酒といひやまことを嫌つてゐた。宜々の
 かつめい麦酒の味を極してうすくする。此令社の
 宜例ありまると麦酒の各者ハ大瓶一本が鶴印四個
 半乳三合に正敵するカリオンを有するものと云ふが、酒持
 ちハ日本酒の15%に對し4%といふものと云ふ。外國
 の麦酒に較べると或分酒持ちが多いと云へてゐる。何れ
 七海にあらざるは解ハたかざる。と云ふからハ、モツト酒
 持分を減し、石量が多くなる。今社ハ常飲酒七
 葉蔵也あこし
 ○本年に入り新酒にかき、酒方の新法等ハ扱務し
 たり。その他、酒持ちの總量と云ふ、得るよ、漸や
 く多くなり、たゞ又目を掲げ、他の各者ハ、次々す

七月廿二日

一 雨子巻

元日本国者領地記に一月以来未だ載

のいふところ七回なるが毎回五六

篇の過筆あり (アムム)

二 古名田殿 (雨子巻)

一 出波の今昔 神皇正統記の爲め

一 音の思 故土并文苑 皇正統記

外の思 (アムム)

二 新編及び記名時代田殿 古名田 (雨子巻)

一 丸美音燈近境 (アムム)

一 東条の冬草紙近境記 (アムム)

一 外人の北城道旅の勸告 (アムム)



一 雪の追憶

一 旅の追憶

一 志意と結婚の後記 (一)

一 小笠原全集の序

一 異体古題名の由来

一 後編新巻白

一 下村山大夫

一 久原山

一 城下の茶の造り

一 鬼外編 (後編)

一 中流若出の心と後

一 外人の日光観音

- 二 文澤雅治
- 一 製本術 高田の製本師と申す
- 二 印刷 高田の印刷師と申す
- 二 宗義とメスメリカム
- 二 踏回神北境内を歩く
- 一 川柳のくえり上巻 西子雅雅四
- 一 河内崎士の書翰三誌 日本教員史料
- 二 同者の敵 附巻本 西子雅雅三
- 二 自愛と自批
- 一 桐葉の風味 福 考茶令 おひんぎ
- 二 川折、料理漫話、白樺とへ 柳樵
- 二 趙上流術



- 一 赤田の財源秀國 昇龍文 谷家と三友
- 一 鍛錬 美林古巻 野言 臨海家の流石 遠平
- 一 板干と魁斗 雄弁 美林の飲食
- 一 おひんぎ ライラン等 美林古 ラレ心家
- 白樺 おひん 板干と薙節 若菜 子心
- 趙上流術 趙果利記 料理の考案
- 川柳と上巻 高田の川柳
- 出陣の合書 書札の敵 及津旋風 印刷
- 旅の進法 雪の進法 外人の北極旅行 も
- 柳樵 高田の 踏回境内を歩く

○新刊丸巻「蒙野」の中
里田乙吉の記にえたるの
るに依つて親爺のこ
とにねめしある。

六
レーニンググランドには、私は革命の前年、同地がまだベ
トログランドといつた頃、半年ばかり居たことがある。ベ
トログランドで神田に相当する本屋街は當時の日本大使館
から程遠からぬリテイヌイ街であつた。主として古本だ
が、豊富なるものであつた。

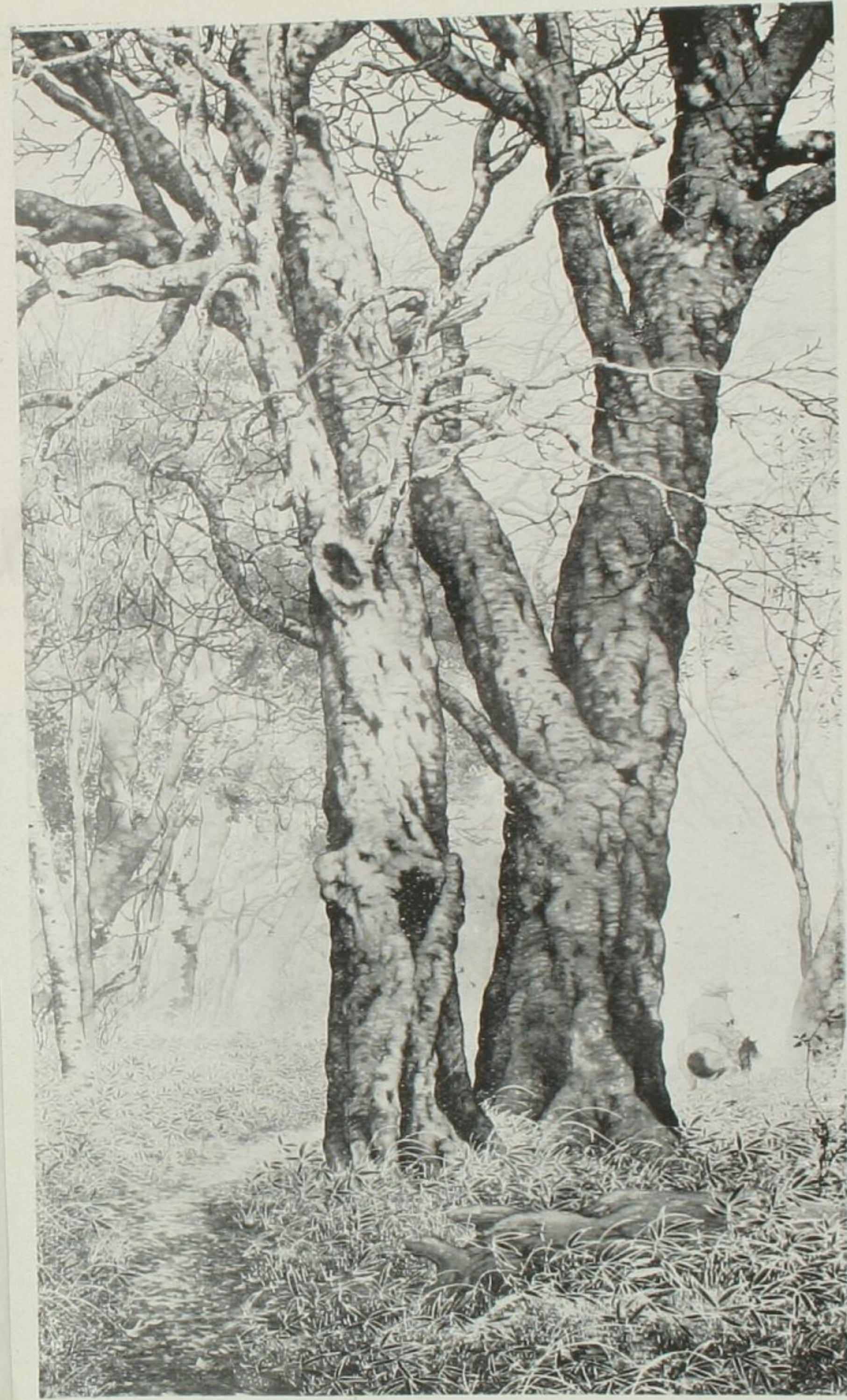
何といふ本屋であつたか、今はよく記憶しない。「蒙古
游牧記」の露譯本か何かを買つたのが縁故で小柄な五十才
位のその店の親爺と懇意になつたが、親爺は私が日本人で
あることを知ると、その古本屋は日露戦争前廣瀬少佐に可
愛がられたこと、後には長谷川さん(二葉亭)がよく本を買
つて下さつたことを話すのであつた。親爺のいふところ
によると廣瀬少佐も長谷川さんも共に極めてまじめな方で、
お二人共よく本を買はれた。ことに廣瀬さんには大變御世

話になつて、御注文の本をもつてよくその下宿先にお届け
した。旅順で勇壯な戦死をされたことも當時すぐわかつ
た。こちらでも知人がお寺に行つて祈禱式をあげた。親爺
は自分もお寺にお参りしたといつた。
親爺は「さうく、思ひ出したことがありますよ」と眼
を輝かしながら
「日本で魚を乾したのを小刀で削つて食べるのは何と云
ひましたかね」
ときくので
「鯉節だらう」
といふと
「かつを、さうでした——と彼は廣瀬少佐の思出の一鎖
を話してきかせた——いよく戦争になりさうで廣瀬さん
が歸國される時、不用の本を整理するから来いといはれ、
お宿に伺ひました。そして金はいらないからもつて行けと
澤山の本をいたゞきました。その時、廣瀬さんは、そのか
つを二本、棚のところから持つて来られ、僕は日本に歸
るからお前に上げやう。かつをば、ナイフで削つて、湯を
かけて、どうかして喰ふのだと教へて下さつた。何より
の記念品、粗末にはいけないと思つて、この本棚の上

廣瀬

に乗つけて置きました。それが悪かつたのです。十日後だ
つたか、一ヶ月後だつたかはつきり記憶しません。ひよつ
と廣瀬さんのかつを思ひ出して、棚の上を探すけれども
無いのです。女中を呼んで聞いて見ると、『乾魚なんか知
らないが、古卓の脚の折れたやうな奴なら二つばかりこ
の棚に乗つかつて居りましたよ、斧で割つてサモワールの
焚付にしました』つて、きよとんとして居るぢやありませんか。
畜生！ と怒鳴つたが追ひつきません。すまねえこ
としましたよへへ、廣瀬さんはいゝ方でした」

一九二六年と二七年に各一度づゝ私はレーニンググランド
に行つた。その都度リテイヌイの古本屋を素見したが、す
つかり淋れて、本もすつと減つて居た。廣瀬少佐の本屋も
どこであつたか見當がつかなかつた。たゞ一九二七年には
北氷洋岸ムルマンスク方面への旅行の途で、「北方」に關
する本を少し漁る目的でリテイヌイに行つたのだが、モス
クワにない數種のいゝ文献があつたことを今もよく憶へて
居る。



門多内山 台平大光日

標高製

○料理と一種の藝術と云ふことゝ云ふことである。もろこし
 術は流派を生ずるに至つた。麩を割くは客前、組を
 振、或割烹手ハ式服を着付け、まふ箸で魚を押
 へ、**●** 庖丁は肉を断ち切る作法があつて、一丝亂んず
 美事、身おろしをやリ、**●** 肉体の手指を魚肉の觸
 れぬよういさむハ、**●** 練熟を任さんか来るハことゝいふ
 を祖上流術とす、**●** の不當いさむハ、彼等の庖丁の泳ハ、清
 こいふを陳磨と云ふハ、柿や梨の皮を剥（剥）グルク（剥）といふ
 核心の達するまで、**●** 此ハ一七断絶せず、幾十尺の繩状の
 紐も見まふ、よきを作る、**●** 誰んか知る所いあらう。干瓢
 といふ別、此の法、**●** ろろと環裁せよ、**●** 此ハある。彼等ハ
 野菜、大根 （大根） **●** 花を生じ、人卷の心作

つは花辨を敷いて花の色彩を添くこと。海印の最も断
りよくひきとるのん、まんと堅く断つて木揚枝大の千本
を揃へてつらとせらるるく、出来さの葉を高くある。彼等一本
の口疤丁を以て植木の葉を作つて刺身の座として、細
い軟らかな筍予び、丸いへや桶のやつと、木を削りて作つた山
葵の口の容をええとせらるる。葉の葉を削りて小さく龍
を作つて置くを盛るの容をええとせらるる。彼等の取
扱のよる魚鳥等の食物を造つて、人々をよこすこととまじり及ん
てゐる。彼等の刀の画家の筆の如く、才ある料理人、或
と何人が作り得る、勿論大なる板香の限ることあるが、粘
土料理の魚鳥と見まかすよる作り添へて人を驚
かすやうな悪戯もせらる。よるまじりて、色彩美の料理

膳亭製

の一日條件は、眼の食にせらるることある。昔も銘菓と云ふことある
銘のまじり客を出すよる、ほんの種々の雑多の材料の組合せを
あつて、色の配合も、苦心を拂ふよる、究つて余をええとせらるる趣を
呈する。尚、は大皿の容をええとせらるる、或、味、其殊に
色彩美に注意が拂はる。例へば、海老の刺身は、赤色の甲を
割へて、紅白が映發して一種の風致をええとせらるる。或、まじり野菜
を添へて、一層其色彩美を、加へることある。色彩美の
を助けるよる、大切なるよる、器具である、膳板は、木皿は、鉢
は、猪口の七、金瓶の色彩、と換ふことある。或、まじり、
うがき、油、和、料理の色彩を、替、換、するよる、魚、肉、心、を
ぬ、金瓶、手、の器、紅色の、魚、肉、を、盛、る、よる、
料理の色彩美を、全く減却するよる、沙汰の限らる。

西洋人の一概をきらひやうな金襴手の皿を甚くおけんとて日本
 の茶人の工夫が金襴に殊に満面をこらると言ひし外人のよ
 を供養のこらとて排するの料記人々茶人の造法を踏襲し
 してゐるため、金襴の造り方が要を得て居る。こゝろ多く
 の器物が金襴を並ぶとおのづから色彩の調和を保つ
 やうにして申す。あう、坐敷の青磁や床の檜や四角物も、
 庭の緑や手板とみれば、自然に料記の色彩美と調和するや
 う工夫せん、云々、庭園も坐席も襦袢も、具の割重
 せられがナイツせん、一体とすうため、所以に藝術的である
 とも云ふ。

○田中克勤の古今事蹟を説く、勤皇事蹟伝次人々何う
 出たてよと、西村文則が訪い来たつたのを、格別珍らしいよ



こゝろが左の教諭の云ふを流しん

- 一 烈公録書宛銘板本 数種
 - 一 五原香平利永清伝人名印譜一冊
 - 一 入江支那守山侯遠印三顆
 - 一 香月烈公夫人遺物隆泥沓形研硯山延文
 - 一 契沖造墨一巻
 - 一 真洲守の長歌一冊
 - 一 関八郎浪士の古瀬の巻に遺墨筆の印
- 外に高田典作自筆の古製思日記
 権書指日記若干冊、平大田の印を
 修りあひ介

(八月四日)

○早稲田の純粋な身代信の家白鳥君が早稲田大光堂
八家の遺著集八冊を出版せしむる一冊の撰者
は、山名と河合の各著の遺著集とを、予稿として
予が客観的に遺著集を、斯る著者集とするの趣
味を著せしむ。白鳥君は、出版東光堂の全圖の致
目録と、予稿と著者の二字を冠せしむ。予の自
由地集を欲する、其の意のなるを、新編集に
予の主要著の改刊の著者集と云ふ。望持集と
予の著集と、予の著集を交へて撰集八冊撰集八冊の
外、予の著集、山岸光堂、中村光堂、西村
其次、休あ印、本阿久作の七人と其十月末迄



暇を得て約す、夏約四百

(八月五日)

○毎年一冊の遺著集を刊行することの例とすつてあるが、
ことごとく何れか出さるるやと書き溜められ、新編集の目録
を心のつらさ、六先き、前項の如き、依頼を受けし
び、その来ることす。既刊の遺著集から若干採選
するが、市にあり、容易であるが、成るべく、一切既刊書
に編み出し出して見たいと思ふのである。右の如き此冊子
の数頁前日編み出し目次を検討するに、同書館館法
と連載八回、及んば遺著集が六十年分はあつて
百頁是すの、予の著集、他の新編集、折々投稿し、予
が約百頁に達する、予の著集、予の著集と名つけ
り、執筆する、新編集中から選集し、予の著集と名つけ

か、多分二百頁程あろうと思ふが、こんの巻進とあつても
百五十頁あつたとすると、後の五十頁を十月五日新装
装束したんは、思つてゐる。斯く打集つても既刊書の編
んずとも成の勘定がある

○相馬海分の逸事、全集の中、現代逸事家の文
集を採りて私のいふ及んびりか、私が尾崎紅葉
の廿七回忌に歸んびの追憶文と引して左の如く採り
てゐる

市川春樹氏の逸事、もまた文章の多し、ゆゑ
卒直を致膳する譯り、たゞ、却て人を惹
きつけ、終つてゐる。吉村の真つ實をせしめ、
かゝる底の、著者の所する心を鮮かに動



いこの

抄録文思

このおまゝの二十七回忌の一節であるが、無論
城氏自ら後此の著者のかくれかゝる。
さうして、かういふ卒直の語の、
とんが躍動し、且つ後、人も躍動し、
ことも、逸事であるの、
うゝに卒直である

自分の文の、
卒直なる、
すゝとして、
つゝあつて思ふ

○伯林のオリムピックは今戦国ハリスポーツに改味の
多い自分も七巻選手も紫冠を戴かせる位とい
片唾を吞んでゐる。いふ七尺法を足さず、日本選手は
アートの受け方から、体力に一着を輸してゐるやうに思
長駆の競走を中ころまむ好油のあつたから、終つて
その体力を消耗して敗を取らやうに。体力の強
弱のちがひをとり難いやうなものが、体力に満ち注意を
拂ひまゐることも敗つて一原因としてゐる。兎角初め脱
兎の如きものは終つてかまゝな。始めの力が弱るゝあつた
ら、観衆の前で脱兎の如く壯観快やうに思
人柄もある。我選手の敗因は寧ろこゝに在るのび中
頃も他をリードをするが、まが為の肝腎の場に入ら



つて力が抜ける。是れ力の行濁を感するといふことであらう。
何れ同じことだが、如神の法流家の初めの内大敵可疾呼し
て其快もやうにこゝに到る長流説が出来ず、及び蓋
の、名人の儀を大流り、初め急かす躁も、至極平
調であるが、中流から終つてぬ油とさうして、凡手の漸やう
疲れもあつた時、蓋々聲もさく、俾々々餘秘
を弄して、聴者の感興が絶頂を達して後已む、如斯く七
と聲の行濁をこきまいて、初めの特に聲を保護する
の故に終つて神不のひある。旅うらやまといふことか、初めは足
力の早きと衝かゝる疲れの早いといふある。是れ選手の
体力が地帯の強弱に依りて過色があることであるが、力の行濁

いを補ふこと肝要あり古語に疾走は善走なり
と云ふが脚力宙を飛人の如く徒らに体力を消耗して佳白
善走は無い、こゝ因らば較^て走^る就^{して}こゝろのむかひ
なり。

八月六日誌

○自今、真夏の午睡をやらず、烈寒に入るとの敷
と濟りともさし多しの如く長い習性、此迄のやま日の永
い時日中炎熱の激しい時、午睡も強うござらざるべし
思ふを、是れが出来ない、然るに此今時、午後概ね
この枕を引き寄るをも、二十分許まどろむことあり
か、永い習性、夫れを破れしと思ふべし、まづ
へると、是れ酒の故があることか、知んぬ。酔ふを断るべし
今初のうきうき、若い頃もあつた。自今、之れを断るべし



午睡とハ云はるゝ酒氣を離へて相変るゝ睡れを
いへ、自今、午睡の縁が無いのか切らるゝ。まづ
夜が来る時、えを念する、午睡は已まらざるべし
のれ、要らば自今、日中、午睡をやらず七十の齡と起り、此が
此迄、漸やく、やらず、やらず、此の病、是れあり
身体も自今も弱いらるゝ、自今、七、八、九、を、是れを、勸め
あり。

○予の逸事、各、漢本、二、挿入する、この、毎年十
数件、及び、本年、ハ、左記の如し

左義長

(逸事、又、各、漢本)、二、挿入

林子平

大日本聯合会、五年、國の、五年、各、技
金、予、元、は、海、外、の、回、診、漢、本

馬場の地蔵おぼ

(北沢病院女子用女子園文誌)

日活の海決 (同上)

の日のちのちの船の辰波分をものまきつてあふ
一説す。歴史のこまぐり模利するごし出たぬし。研究家
ハ大切と思ふんが、自分ごの感興を生一したよの、元寇
が用ひた石鎧とあつれ長々四人程ある長方形の
が傳へ湾から取上せられたるもの、えんがえ寇の記念
物ごあつてとて、実る珠物だ、三個あつて、つれと後物と
あつた。高は此の島のまぐり、舟を二番、初見は逆入の
て、おんが、バルキリ、船隊を二番、初見は逆入の
乗船が、あつて、おんが、バルキリ、船隊を二番、初見は逆入の



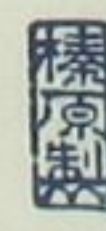
舌代

北畫の巨匠秋月の畫名は古くから天下に洽り知られて其の
名は日本美術史に輝いて居りますが、その人物に就ては單に
藤原の出身で雪舟に師事したといふこと位の外詳かなことは
未だ全く世に知られて居りません。
幸ひ私は秋月の出身地に生れて、幼少の頃からその名を聞
いて敬慕して居ましたので、東京に出て醫業に従ふやうにな
つてから、全く私の専門外の事ではありましたが、廿數年間に
亘つて餘暇をさいては、秋月の畫幅をあさつたり、又はそ
の事績を調べたりいたしました。
然るに昨秋三州で特別陸軍大演習が行はれました際
大元帥陛下の行在所に於て秋月の畫幅が、天覽を仰ぐ光榮に
浴しましたので、秋月の人物を世に紹介するのは此の機會に
あると感しまして、かねて拾ひ集めて置いた秋月の事績をま
とめて今度「畫僧高城秋月」を出版いたしました。
郷里に於ては又、公爵島津忠重閣下の御揮毫を戴いた「畫
聖高城秋月出生之地」の記念碑を建てました。
拙著「畫僧高城秋月」は全く私の専門外の歴史と美術に關
するために誠に杜撰粗漏の上に肩苦しい書き振りで、誠に失
禮ではありますが、一部御高覽に供し奉ります。
斯様なことは、その道の方にお願ひすべきが道であります
が、我が郷里の大先輩を世に紹介するのは後輩の責任かと考
へまして、潜趣ながら此の擧に出ましたことをお許し頂きま
して、何卒充分の御叱正御指導を仰ぎ度いと存じます。

昭和十一年八月

東京市芝區明舟町二十六番地
醫學博士 佐多芳久

○畫傳秋月の宮舟と共に孫を以て高僧のありて、其人の生
まると前記のことも無ければ、依多氏の送本と得て、漸
やく大略を知り得比。秋月の元末武家出身の薩州
高城郡高城郷領主高城氏第十一代細中守重頼の
二男として生れ、下総守高城権頼の重直と稱し、比外時彦
の或する所たるを認めたり。宮舟の父入り丹古を宗
比邊り、宮舟と共に入唐三子に及び、帰朝後内膳山に
寓し、比外薩摩島津忠男の召入となり、辰の後遇する
所とあり、席は四老の末の重直と比。比外薩摩桂原頼
のあり、秋月と入唐の際相違し、中七、薩摩の秋月
と比し、比の桂原の進言を據ると傳くべしとある。
秋月の薩摩の画の師範のあり、又その師範のあり、比薩



の桂原の由り、朱子等の解け比と云ふが、秋月七世の
これと推測せらる。秋月の姓は高城と云ふが、名門高城氏
の血縁は、比一族甲東郷大山乃木に如き、大武人が生
れ、このことを比傳の由り、知ることを得也。
秋月の仲の入りたるは、頼の可なり義記のあり、市
来氏と稱する跡らるるも、無常を感し、秋傳ら
る。又、比と云ふは、比外大内氏が外回變り
て、比入のありたるを、宮舟の比外頼と云
舟桂原と入唐するも、比の比大内氏の質石能
る頼の役利のありたる也。秋月の宮舟と共に三
年目、比細中比外桂原の四年後、比細中比宮
舟桂原と共に秋月の十或、比元年のありたる、比

二ハ三四等字のちる画の所人があるが特々名を録す
及心多い。雪舟と秋月の画はよく似てもあり秋月
の画は花款を欠くよすがあるのみ。雪舟とそれ
のよすがが多い。此冊のまじ秋月の名畫の所在
か志々他んて載つてゐる。
(八月十日記)

○自合の印なるもの少の趣味をせら。こんまの印が旅の
者の泣をせき成り記のを流る或作の習次をみる
しめす移り記がとんてん未だ中一の(通)記を流る。
層印のすか解つた。中一の海濱に頼まんを流る
よる海濱をいれ序を流るく述つて、いろいろ考い
わつた。自合のんまは流るんま。内老も志々い
じある。柳うたなノートをおきつておく。



秋印の長を表すといふくの式があるが花輪を
鏡面から用いた下ける。是から鏡面は如きよか
まじ。高は款上を印を押す。こんの白檀のけい
うし。こま比とまが。中一の字といふまを印し
と思ひん。中一はねのま。高は又流る。七款
の一方式は。い。

印のうの街土の半の横いつと。花や扇のめし
りく。うの。偏し人の室を照つて。ここのまといと云
ふが。北等家高と共同生活をし。みる。親うま。珠
の。高が。浮山。め。こ。ん。ま。高。め。ま。家。屋。の。室。を。め。け
て。置。す。く。評。ま。め。こ。め。ま。の。北。等。の。高。め。室。の。入
つ。て。考。ね。を。汚。し。た。う。ま。考。ね。を。散。ら。し。た。う。或。ハ。美。印

筆を介挿の如くすると言ふ。

印が人心を籠と握りてゐる給が、あるが、あつた真
鍮が、不潔を何んと思へ、い民族う、こん
けいよく磨いてゐると言ふ、此器の役等、取つて尤
も大切なることを、今も、入ん、狀、入ん、入ん
合、黒、葉、司、金、庫、と、言、は、れ、一、刻、七、身、を、か
う、離、し、難、い、よ、う、と、ある

佛像を金と塗ること、其等、熟、知、り、て、あるが、金と
塗ること、が、佛、像、の、教、の、大、切、な、こ、と、と、考、へ、て、冬、に、か
う、入、り、こ、ま、信、者、の、皆、を、金、の、油、と、換、等、し、て、へ、た、く、粘
り、つ、け、る、の、は、其、の、價、格、の、高、く、大、き、い、よ、う、と、あると、言
ふ、或、は、英、國、が、此、の、習、慣、を、破、り、て、官、家、も、時、々、大

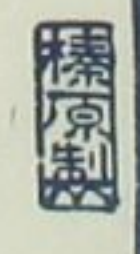


刷りて、あると、言ふ、皮、肉、説、の、あ、る、大、き、い、を、金、定、ま、す
一、法、の、か、ら、

印が、三、億、の、民、族、の、七、八、分、の、一、下、字、の、ま、り、文、言、の
流、車、や、家、屋、の、婦、人、と、限、り、入、る、べ、き、所、を、標
示、し、て、文、字、の、後、進、に、い、い、る、く、の、給、が、貼
り、つ、け、ら、れ、る、と、言、ふ、標、示、す、と、云、ひ、ら、れ、る、

印が、何、れ、の、家、と、公、群、の、ま、り、て、満、日、汚、穢、と、云
ふ、風、中、京、に、食、民、の、唯、れ、汚、れ、る、一、布、を、腰、に、纏、ふ、の
み、は、其、の、ま、り、と、い、ひ、目、七、布、と、い、ふ、心、の、速、憶
ル、若、し、懐、念、の、神、に、け、り、て、メ、テ、取、り、換、へ、る、習、慣、
か、あ、ら、ば、日、本、の、木、綿、の、輸、出、が、出、る、液、増、す、と、い、ふ、
く、と、利、産、下、層、社、合、と、い、ふ、美、し、い、こ、と、を、認、め

北と考へてみるに、彼人の黄毛の乱抗装束をみれば、眼鏡
 の一、二、微笑みれば、この口のこゝろ、笑つて顔の柔らかなれ
 ろう、うららかに、彼は、三、四、の、西洋装束の、あまの、眼
 鏡を、め、め、め、顔の形、くりくりと、して、小、さ、い、眼鏡の、悪
 徳、お、備、の、少年時代が、思ひ、い、を、き、ま、る、この、女、死、殺、せ
 る、い、や、う、柔、和、な、鬼、人、が、かつ、て、イ、ギ、リス、の、陸、軍、中、尉
 か、う、い、は、れ、の、か、と、福、妻、の、や、う、の、感、せ、し、め、れ、と、ま、あ、ら、み、み
 が、こ、じ、い、が、ま、あ、り、レ、キ、ヤ、ル、カ、と、ま、あ、り、日、本、の、貴、族、の、娘、等
 々、似、た、い、ま、あ、ら、み、移、り、て、あ、の、後、の、万、日、を、あ、ら、み、み、が、こ、じ、い、
 し、の、ま、あ、ら、み、形、氏、を、救、へ、ん、と、し、て、あ、ら、み、み、の、ま、あ、ら、み、宣、傳
 の、利、己、の、説、め、ん、現、こ、の、機、械、が、障、害、の、心、を、い、れ、ん、
 か、二、十、萬、ヤ、ー、ロ、と、及、ん、か、ら、あ、ら、み、み、即、ち、の、現、狀、に、北



彼、又、産、業、が、元、十、六、年、と、い、う、の、ま、あ、ら、み、み、の、ウ、ト、考、へ、る、と
 と、い、ふ、お、世、を、脱、け、る、ま、あ、ら、み、み、大、い、な、ま、あ、ら、み、と、云、ひ、み、ま、あ、ら、み、
 野、田、か、が、こ、じ、い、の、病、妹、を、治、す、の、時、待、つ、木、橋、の、何、う
 と、い、ふ、ま、あ、ら、み、を、愛、し、て、救、へ、ん、と、い、ふ、ま、あ、ら、み、何、う、と、い、ふ、
 と、い、ふ、ま、あ、ら、み、の、と、い、ふ、ま、あ、ら、み、私、の、印、の、地、中、か
 ら、出、た、ま、あ、ら、み、を、泥、の、冠、を、戴、い、て、あ、ら、み、と、い、ふ、
 ま、あ、ら、み、の、心、を、い、れ、ん、と、い、ふ、ま、あ、ら、み、の、心、を、い、れ、ん、と、い、ふ、
 神、と、い、ふ、の、心、を、い、れ、ん、と、い、ふ、の、心、を、い、れ、ん、と、い、ふ、

○八月十日安田邸に襲をうけ、同日人合し、山の如く旋
後、時を移す、此の安田邸に、赤とんぼ、雲の如く、噴
具、形も大きき、まゝ、柳子の山を中心とし、尺五
寸程の木の如く、噴口あり、更に、泥土、赤土の火皿
を、噴く、まゝ、鼓の三尺の煙、及び、柳子の山、まゝ、
やう、まゝ、あり、火皿、何れ、赤土、赤土、まゝ、
あり、親、まゝ、あり、此の伊原、柳子の山、まゝ、七代目
圓十、午の月、あり、不印、あり、まゝ、面、印、一、万
二、口の代、深、世、伝、の、ま、か、柳、まゝ、あり、
深、も、解、く、まゝ、あり、伊、まゝ、あり、まゝ、あり、
あり、大、柳、まゝ、あり、まゝ、あり、伊、まゝ、あり、
まゝ、あり、まゝ、あり、まゝ、あり、まゝ、あり、



深秀園記

深秀園、在東京隅田河東橋、深秀二坊、為安田氏別
墅、山門面水、入則三倍、石閣、巍然、高、程、耳、曰、成務、彼、構
造、唯、洋、法、館、左、有、門、門、徑、一、曲、右、古、園、有、書、院、有、水
榭、有、茶、室、整、然、廣、廈、曰、懷、德、館、館、前、水、深、榭、秀、是、
成、島、柳、北、所、以、命、此、園、也、園、本、三、侯、乙、第、南、北、通、一、百、三
十、餘、步、東、西、半、之、中、央、為、高、崎、侯、邸、元、祿、中、所、築、
春、木、碧、石、古、趣、露、然、明、治、之、初、田、安、二、任、公、居、焉、南
則、松、浦、侯、邸、係、鎮、侯、公、深、橋、世、傳、未、後、遺、匠、之、藝、仇
家、也、公、時、在、白、梅、庵、手、製、茶、茶、七、深、夜、聞、鼓、琴、鼓、之、聲、
心、知、良、雅、等、義、茶、竟、名、其、七、夜、擊、此、地、是、也、北、則、加、納
侯、邸、侯、先、為、有、法、大、君、親、臣、蓋、尊、保、中、賜、弟、無、有、稱

車茶座者，車輪為窓格，而設石悉用石印，亦取艾輾轉也。今主人合三郎一之，在明治戊寅以降，仍不改舊貫，但有疏而池為一水等耳。

書院階下，銅製巨燈，筑波山寺舊物，銘有寬永年大樹公等文字，設石數十，間存古石印。池畔北轉楓林，小丘曰紅葉山，即車茶座煙也。楓外小舍，方不滿丈，曰閑林亭，尾塔一位，公看書處，舊在河西，往年公別墅主人，因移焉。今則可以看池蓮。丘北石佛，為青兒地，為尊，秋元侯邸舊置，傳云一里塚上物，其後隴有葉師寺，亦毛利侯邸所安置，邸俱在濱街，今皆歸矣。故移焉，堂側一碑，刻芭蕉翁所咏池蛙水音句，碑陰有記，按為座當時在深川六間堀，後為尾崎侯邸。

又中，有故鐵只郎鐵砲，再時所遺，主人近獲之，亦移焉。其南福徳福為祠，曰安部遺構也。

林下路窮，忽通短橋，蒼石橫臥，古燈照一人，步至池南，老柳萌檜，下有花架，此地為白鳥屋故址，稍甞方丈室，扁曰又隱，在昔茶座室，既致仕，而且築此屋，以謝世紛，所以名又隱，傳在西京，今家裏園，曰安公深通茶儀，進慕之餘，遣工就其家模之，尚孫某以為名卷，併屋及茶座，又隱，又隱，以獻，其是也。前庭安一鐵燈，扁而卑，狀甚奇，銘曰河童，天心中若工，其次，中陽心，林影扶疎，其苦，紺碧，自是洞中天地，使人有遺世脫塵之想，而中潛尺，待合，斯道，諸君，忠具，此有春，清庵，半高，等，亦公所造，俱在懷。

徳鉢内、今不具述、鎮信公妻部靈陸、其陸橋趾而没、
此又隱、由公不儀、香老可味、曲徑西繞、有門常開、門
外年蓋教百步、乃成終鉢、後庭也、其治外垣、處有古
柏樹、龍蟠席踞、不知歷幾百年、世有椎木、杉、酒之稱、
者、環以短扉、神而祀之、此樹隔河、其音尾松、蒼翠
相望、古來稱為東都一名勝矣。

嗚呼、名園、得名士、抑亦心無謂也、主人孫松霞、甲越八年、
十九、未江戸、後古活、敗數年、元治甲子、始聞、足銀、鋪、尔
未三十有五年、其業極隆、近十數年、未、通邑、大都、無不
置支鋪、所謂、安、回、銀、の、是、也、語云、秀而不實、以、其、之
基、不、深、也、主人、執業、甚、實、其、本、甚、深、以、致、今、日、之、秀
繁、也、然、則、深、秀、之、稱、何、言、此、園、也、附、今、茲、戊、戌



主人齡六旬有一、以十月之吉、張華甲壽宴、大分、在、同
人、此、園、也、余、見、囑、園、記、宿、流、多、年、今、蓋、此、盛、序、
豈、可、躊躇、不、履、重、約、乃、筆、其、梗、概、以、為、道、此、園、者、
是、指、南、車、云、

大概終如電新稿

(流、俗、さ、る、之、先、の、擬、し)

(素、題、の、録)

電、の、け、さ、る、素、題、と、乃、は、流、か、せ、大、田、と、自、家
の、敷、上、に、ガ、ツ、の、リ、キ、ム、し、と、人、と、あ、つ、か、し、以、法、加、出
た、此、の、あ、る、こ、の、あ、る、ん、だ、此、の、新、の、記、の、如、雪、の、華
の、成、り、一、法、に、植、す、こ、の、あ、る、ん、だ、傷、り、ま、わ、る、
今、字、一、終、の、れ、又、こ、の、あ、る、ん、だ、山、野、形、の、
星、の、形、不、都、を、一、法、に、植、す、こ、の、あ、る、ん、だ、其、者、但、
甘、白、此、の、流、の、未、應、一、聞、す、こ、の、あ、る、ん、だ、存、し、

おの、北の宮を都の漢をいれ、あつちのあつちの
 生は、二合も入らうといふ椀で酒をあふるのだから十
 月十三日記



(能の舞は黒川
 寫眞は黒川)

(能の舞は黒川
 寫眞は黒川)

能とはどんなものか

齋藤香村

源流は催馬樂 — 田樂から猿樂へ — 平安朝期の至寶 — 田樂の

舞臺 — 藝の對象は神様 — 五流の昔を忍ばせる古格 — 三百番

の能と二百番の狂言

ち、兩座大
 かく公演會を
 鎮座の縣社
 謂ふ所の單

この能の源流を想見せしむるものとしては、平安朝
 以前の装束、原始的相貌の翁の面、又は田樂面等の
 國寶的神品佳什が製藏され、貴重古典中には、足利
 期の彩色能畫入の能型付、天文の古寫に成れる聲出
 口傳などの秘藏もある。舞臺も亦この地の能の由來
 てゐる。昔からさうであるが、この村では能役者と
 いつてもそれで衣食するのではなく、他に本業を有
 し能は神に奉仕するものでこれを村民の義務とし、
 藝に對しては全く職業意識を働かせない。
 彼氏等の舞臺は、以上の如き傳統精神の結晶であ

お能の村黒川を訪ふ

一色直文

山列が北に走つて、羽黒山の靈峰
 羽三山を仰いで南北に延びる庄内
 によつて保護され、殊に酒井氏時代には藩の式樂と
 して祝賀の折にはしばしば能師を召し出された。そ
 木椀を持つて待ち構へてゐる人たちに酌をする。一
 杯で二合も入らうといふ椀で酒をあふるのだから十

(能眞は黒川
の難波三)



(眞眞は土師の面)

黒川能とはどんなものか

齋藤香村

源流は催馬樂——田樂から猿樂へ——平安朝期の至寶——田樂の舞臺——藝の對象は神様——五流の昔を忍ばせる古格——三百番の能と二百番の狂言

黒川能上下兩座合せて百二十數氏のうち、兩座大夫以下幹部四十數氏を招聘し、別項の如く公演會を開くことになりました。

黒川能といふは山形縣東田川郡黒川村鎮座の縣社春日神社に奉仕するものであるが、今日謂ふ所の單なる郷土藝術的のものではなく、總べての條件を具備せるが上に、中央の能よりも一層古い風格を傳へ古典と稱せらるゝ立派な藝術であります。先づ源流は、古昔世を逃れた高貴によつて傳へられた朗詠催馬樂に發し、その後國主地頭などの移入した田樂や猿樂と合流し、足利中期には早くも一はしの黒川能を形成したものであります。その後今日まで四百數十年、殆ど一村を擧げ累世この藝を傳承し來つたもので現在では能三百餘番、狂言二百餘番、皆古文と古い舞型のまゝに傳へて居ます。この夥しい曲中には五流に絶えた幾多古名曲が無論含まれてゐます。只それだけでもわれ／＼學徒には大へん有難いことであるが、黒川能の特色はこれで盡くるものではありませぬ。これら古曲を傳ふるに最もふさはしく、又

この能の源流を想見せしむるものとしては、平安朝以前の裝束、原始的相貌の翁の面、又は田樂面等の國寶的神品佳什が製藏され、貴重古典中には、足利期の彩色能畫入の能型付、天文の古寫に成れる聲出口傳などの秘藏もある。舞臺も亦この地の能の由來の遠さを物語るので、足利の初期に田樂の新座本座の勸進能に用ゐたものと同じ構造で、橋掛りが左右兩方についたものがある。此の如く如何なる方面から觀察しても、この能の古いことは疑ふ餘地がなく、それが東北の一僻邑に儼存することは、實に天下の奇蹟といふべきであります。

この地の能が如何にしてこの久しい傳統を持ちこたへて今日に至つたかといひますと、無論郷土の地頭や藩主の庇護、殊に徳川全盛期を通じての藩主酒井家の俸祿の賜物であるけれども、累代の能役者の藝の對象が「神様」以外に何物もなかつた、この傳統精神に據るものといへよう。能を粗末にしたり糞祖の遺風を紊したりするものは、直ちに神罰を蒙るといふやうな信條は、現今の人々の間にも遵守され

てゐる。昔からさうであるが、この村では能役者といつてもそれで衣食するのではなく、他に本業を有し能は神に奉仕するものでこれを村民の義務とし、藝に對しては全く職業意識を働かせない。

彼氏等の舞臺は、以上の如き傳統精神の結晶であつて、見やうによつては頗る自由なところがあるともいへるが、又少しも融通の利かない絶體古格の尊重であるともいへます。これを現在五流の所演に比べれば、藝の風格・約束・型・拍子から面裝束の着けやう等に至るまで、仔細に検討すればする程、隨所に同異を見出し得るのであります。しかし、現五流を標準として、それに異なるところは「能ではない」とは無論いへませぬ。却つてその中には、曾て何流かの残した大きな足跡のあることを否定し得ないと思ひます。それをたどりたどつて、五流の歩んで來た徑路の一部でも發見し研究することが出來れば、この催しの意義は更に擴大されると思ひます。

お能の村黒川を訪ふ

一色直文

月山、湯殿山の山列が北に走つて、羽黒山の靈峰を抱くあたり、出羽三山を仰いで南北に延びる庄内平野、年七十萬石の庄内米の本場だ。その一角、山形縣東田川郡黒川村に數百年來、相傳されて來た「黒川能」が、觀世、寶生、金剛、金春、喜多の能樂五流の外に立つて、一個の郷土藝術たるに止まらず、この秋には帝都の檜舞臺觀世能樂堂で公演を試み新しい世にその傳統を問ふといふ。

いまその公演を月餘にして、黒川の里人たちは夜毎々々、晝の農耕の疲れも忘れて、熱心な稽古にその日を期してゐる。何しろ村人の熱心さは大したもので、平素でも耕作に汗まみれのお百姓が、野良着のまま、サツと青嵐の田の畔にビタリと座て、風早め、三保のうらわを漕ぐ船の——羽衣の一節を謡つてゐようといふのどかな風景も時に見受けられる仙境である。

黒川能は今を距る五百年後小松天皇第三の皇子小川宮が、戦亂の都を出でて、諸國御巡歴のみぎり、この黒川村へ御移り遊ばされ、供奉まゐらせし劍持某進藤某、なんぞが村民に能樂を傳へたのがその起原だと傳へられ、現に里人に「劍持」「清和」を姓とするものが多いことから、そのつながりが想像される。

その後、藤、上杉、最上、酒井氏らの歴代の領主

によつて保護され、殊に酒井氏時代には藩の式樂として祝賀の折にはしばしば能師を召し出された。その度に拜領した裝束、能面などは今なほ春日神社の寶物として、尊くも由緒深い「光り御狩衣」「蜀江錦の御襲」などと共に残されてゐる。

陸海軍將校婦人會に招かれて九段靖國神社の能樂堂で一度上演されたが、それは二十七年も昔の明治四十三年のこと、今度の東京公演にどんな感想批評を東京人が漏らすかと、土地の人たちは心配顔をしてゐる。

お能の村、黒川の一年中の喜びの日は二月一、二日の縣社春日神社の例祭である。お祭りの一月前ごろから村人は能の太夫、謡方、囃子方の師匠の家に集まつて熱心な稽古である。四、五歳の子供も寄つて、やつてゐる。小學校では五年以上に謡を教へ込む。能の太夫は上座が劍持左近氏、下座が上野丹宮氏、この兩家に分れてそれ、技を競ふ。

その年の當屋になる村の年長者の家は目の廻るほど忙しくなる。お宮の厳かな儀式が済んで、王祇様と稱される木製の鉾に御幣をつけた御神體の副體を當屋になる二軒の家へ移し申し上げる。當屋ではその日朝から夜まで村人に御馳走する。

なにしろ女、子供まで交つて二三百人が集まつての酒盛りだ。大釜で沸かした酒を樽に詰め、大きな

木椀を持つて待ち構へてゐる人たちに酌をする。一杯で二合も入らうといふ椀で酒をあふるのだから十石からの酒を干す。

肴は豆腐だ。その豆腐作りがまた大へん。祭りの數月前から部落の人たちは當屋の稲部屋に集まつて豆を冷やす。白でひく、にがりで固める。出來た豆腐は、年寄や子供たちが大きな爐にカン／＼とおこした熱火で焼く。一間に三、四尺もある爐邊に串で刺した焼豆腐とする。これも夜あかした。

五斗俵十三、四俵の豆がかうして豆腐になる。焼豆腐をする強い爐の火は屋根に燃え移りさうになることがあるので、村の消防組は家の周りを萬一を警戒するといふ始末。

こんな大騒ぎをしての振舞のあとで當屋に設へた二間四方の舞臺では地謡、囃子方が居並んでその脇能がはじまる。お能は夜明けまで續けられる。

現にある能の番敷は約三百。裝束や面なども藏に三つもある豪勢さ。謡本は現在觀世のを使つてゐるが、謡方には獨得さがある。「一つお聞かせしませうか」と小學校の應接間で春日神社の神官氏はたうとうたりとやりだした。總勢約四十人、土と共にあるこの古典的な藝術が、郷里をはなれて、はる／＼東京へ來る日も近い。

(七月二十九・三十日、東京日々新聞)

○鼠へ錢目枝則窮一の後修ハ二休福阿の性々景
一此もあつた。こんど鼠もあつた。鼠もあつた。
家も一休の方便もあつた。某口をト一休念
士僧を例し一休もあつた。此後を例し一休もあつた。
此もあつた。

○今の市原の個人能は美術古か法り其くれ

おくと此の能の都りに演じられたことか、
 出づるに、
 昭和二十九年八月十三日記

村に數百年來、相傳されて來た「黒寶生、金剛、金春、喜多の能樂五一個の郷土藝術たるに止まらず、槍舞臺觀世能樂堂で公演を試み新統を問ふといふ。

月餘にして、黒川の里人たちは夜の疲れも忘れて、熱心な稽古にそ

何しろ村人の熱心さは大したも

作に汗まみれのお百姓が、野良着嵐の田の畔にビタリと座て 風早を漕ぐ船の 羽衣の一節を詠つどかな風景も時に見受けられる仙

る五百年後小松天皇第三の皇子小を出でて、諸國御巡歴のみぎり、り遊ばされ、供奉まゐらせし劔持が村民に能樂を傳へたのがその起現に里人に『劔持』『清和』を姓ととからも、そのつながりが想像さ

寶物として、尊くも由緒深い「光り御狩衣」「蜀江錦の御製」などと共に残されてゐる。

陸海軍將校婦人會に招かれて九段靖國神社の能樂堂で一度上演されたが、それは二十七年も昔の明治

四十三年のこと、今度の東京公演にどんな感想批評を東京人が漏らすかと、土地の人たちは心配顔をしてゐる。

お能の村、黒川の一年中の喜びの日は二月一、二日の縣社春日神社の例祭である。お祭りの一月前

ろから村人は能の太夫、謡方、囃子方の師匠の家に集まつて熱心な稽古である。四、五歳の子供も寄つて、やつてゐる。小學校では五年以上に謡を教へ

込む。能の太夫は上座が劔持左近氏、下座が上野丹宮氏、この兩家に分れてそれ／＼技を競ふ。

その年の當屋になる村の年長者の家は目の廻るほど忙しくなる。お宮の厳かな儀式が濟んで、王祇様と稱される木製の鉾に御幣をつけた御神體の副體を當屋になる二軒の家へ移し申し上げる。當屋ではその日朝から夜まで村人に御馳走する。

なにしろ女、子供まで交つて二三百人が集まつての酒盛りだ。大釜で沸かした酒を樽に詰め、大きな

肴は豆腐だ。その豆腐作りがまた大へん。祭りの數月前から部落の人たちは當屋の稻部屋に集まつて豆を冷やす。白でひく、にがりで固める。出來た豆腐は、年寄や子供たちが大きな爐にカン／＼とおこした熱火で焼く。一間に三、四尺もある爐邊に串で刺した焼豆腐とする。これも夜あかした。

五斗俵十三、四俵の豆がかうして豆腐になる。焼豆腐をする強い爐の火は屋根に燃え移りさうになることがあるので、村の消防組は家の周りを萬一を警戒するといふ始末。

こんな大騒ぎをしての振舞のあとで當屋に設へた二間四方の舞臺では地謡、囃子方が居並んでその脇能がはじまる。お能は夜明けまで続けられる。

現にある能の番數は約三百。装束や面なども蔵に三つもある豪勢さ。謡本は現在觀世のを使つてゐるが、謡方には獨得さがある。『一つお聞かせしませうか』と小學校の應接間で春日神社の神官氏はたうとうたりとやりだした。總勢約四十人、土と共にあるこの古典的な藝術が、郷里をはなれて、はる／＼

東京へ來る日も近い。

(七月二十九・三十日、東京日々新聞)

〇鼠へ錢目技則窮しの後修ハ二休祿阿の性々景
 一此もあつた。この二動も世間のさふ木と様々と、
 家も一休の方信がましくあつた。景口を下して一休
 士權を例として、
 此と云ふ。

〇今の市原の個人能は美依古しが私り書つた能号
 びある因縁から、
 今六朝さき、自今、鑄金の、
 から、
 来れ、
 のことさういふこともうましく、

昔の旅

市島春城

交通の不便であつた五十年前の旅を回顧すると興味もあつた危険もあつた、失敗もあつた。それ等をハガキ一枚に書くやうな文才の無いことを恥るが、今の汽車や自動車の便利な旅に較べると、昔の旅がおもしろく汗を流し足を勞したのでなければ印象が残らない。
私は十数年前ワザと箱根の舊道を籃輿に乗つて、昇夫に例の歌を唄はせて興じたことがあつ

た。今旅をするにしても、なるべく膝栗毛で、一匹藪藪を封じて、特に僻土に旅をしたいと思ふ。但し人に勧めるのではない。

日産の如く何か葉書の小天地の何事か意味のあることを書くの暇もあつた。本旅の如く思ふにやうなことが、二人、深き難題と知らぬ間に、大槻の電とこの月も無遠慮の男が、教人の妻を自室に抱き小宴を催し、夕べの如く、自分から撤去せしめ、夫と一室する、其時に甲乙二の客を名ざし、君等ハハハ止まりと居んまゝ飲めと云ふは、お

深淵

田舎引止めも、他客の如くのことであつた。後、大雪降るや、手押地、杉前塩引の切り身と白菜と共に、夫と一室あり、交へれば、自分も試み、と見よ、と云ふ。

〇石橋の如く、江原山人の如く、自己自人の物、交りのあつた、晩年、おれも、動かし人、を、歌、こと、予、こ、が、あ、り、は、志、か、し、本、人、の、え、を、忽、ち、忘、れ、他、日、被、害、の、人、の、日、席、し、て、亦、亦、氣、の、あ、ら、は、と、伊、南、の、如、く、語、る、あ、の、男、の、破、格、の、大、き、な、歌、の、持、主、の、清、子、の、過、す、る、こ、ろ、の、ま、の、横、濱、の、外、人、用、の、ま、の、内、か、ら、あ、る、も、し、は、亦、時、報、を、夜、歸、し、こ、ん、と、云、ふ、指、か、あ、つ、た、を、思、つ、て、見、よ、と、云、ふ、自、分、の、認、印、が、捺、し

とあるのを、七、八と考へて見ると、雪つて舞臺を去つたものが、終演を待てた時、現はんにあつたことか、その友人の笑談と云ふことである。
○八月十号、雑誌塔影のあの杉友の洋香園の記を登載せんとし、原文の大略を叙す、偶々権柄公より其雑誌にエモリスの感徳も書かんことを求め、其雑誌に「梅干と鯉」の巻下「一文を乞ふ」にてやる、尚ほ助力を賜ふ、おいらん草子のお文も此の「ん草子」雑誌の切板をねんと期し、其文を略す。
○江見水蔭の門下と云ふ活東と云ふのがあつた、元が死んだ時の話、これを「江見水蔭」として雑誌に載せしめた。

標原製

水蔭先生門下の遺骨
にお女郎を手向る事

谷活東……と云つても、今時の若い人は知るまいね。江見水蔭の門下で、俳句なんか一寸巧い男だが、少し認められた處で、ぼつくり若死して了つた。

信州の新聞社に勤めてゐる内に肺病

細君が七ツ屋へ駆けつける——これが今池上に豪奢な邸宅を構へ左團扇で納まつてゐる栗島澄子のお母さんだ——といふやうな大世話場だったが、夫妻はよくこの病友を勞はり、無理な算段しながらも茶餅を續けて面倒を見てやつた。だが、活東はこの夫妻の手厚い介抱にもかゝらず、二十幾歳の若い身空を、願巷の奥に死んで逝つた。さて、死んで見れば、今度は葬式といふ順序だが、これが落語の『駱駝』宜しくて、棺桶は元より枕團子一つ買へないのだ。二三の友人とも相談もして見たが、いづれもしがらみ原稿稼ぎの貧乏ぞろいと來てゐるから、仔細らしく首は捻つても、肝腎のモノは纏一

文捻り出せず、萬計盡きて遂にこれを品川の師匠（水蔭）のところへ持ち込んだ。

處が、水蔭がまた折悪しくお勝手元御逼迫とあつて「よし、引受けた」と景氣のいい返辭の出來かねる状態だったが、他ならぬ門生の野邊送りとあつて見れば、放つて置く譯にも行かず、百方奔走して漸く若干金を調へ、どうやら佛を火葬場へ運んで行くまでの段取になつた。

だが、坊主を呼んだり、人夫を雇つたりでは大變だからといふので、師匠水蔭が施主に廻つて位牌持、サゴともう一人——誰れだつたか名を逸したが——とが、差し荷ひで棺桶擔ぎ、友人二三が棺桶に附添つて、落合の火葬場へ運搬した。

この珍な葬列の途中で、施主水蔭が音頭取になつて、活東生前作る所の都々逸を合唱して、その幽魂を慰めたらしい珍談もあるが、それよりもっと愉快なのは、その翌日火葬場へ骨

揚に行つた歸途だ。水蔭が途中で一同を顧みていふことには、

「どうだ、諸君。活東もたうとう斯うして骨になつて了つたが、生前彼奴ほど女郎買の好きな奴はなかつた。そこで今夜は一つ彼れの爲めに、最後のお通夜を新宿でやるといふ動議は何うだ？友情枯骨に及ぶ、活東又以て瞑すべしぢやないか？」そんな動議なら大賛成の連中ばかりだから、一同大はしやぎで新宿の何とか屋といふ女郎屋へ上つた。さて、めい／＼の敵娼もきまり、いざ、お退けといふ段になつて、どうした間違ひか女郎が一人餘分に刺つた。「おや、私のお客さんは……？」と女郎は怪訝さうに一同の顔を見廻す。「それ、其處にゐるよ」と、水蔭が顎をしゃくる。

「どれ何處に……？」
「其處だよ。床の間だよ」と云はれてひよいと床の間を見ると、薄暗い洋燈の火影に、白木綿包みの骨壺がぼんやり……。

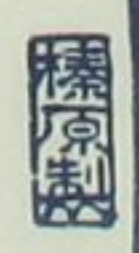
の人間の思想の往來の年輩や境過や其の修養を以て
區別せしめるといふは、先哲の言を以て通り、三轉するといふ
のが其を得てある。初めは意親を以て外部を造る行
く、自後生不替といひける。すなはち他を以て成
すの首途に自家がまじい擧頭するの然るる途々を自
我の意思が降ろくる。意の赴く所を従ふことと
ある即ち揚主と執するやいふ事。そのひ換へんは主親の
あるが、が中二歩ある。其の意の終極は其の
主意起の時代の事なり。田舎の域を以てするの
此が此の境に入れば難い。その心は凡人がさういふ。獨り
二一十し此の三轉心を教へて初期の黙然中期
ハ獅子終期ハ童子と云ふのであるが、此の譬論は其の切



である。黙然ハ唯此命のまじりて我を張るるの妙
とうると自我が自勝空の勝手なり。併し進の轉
化ハ結果ハ未事と自化を以て意心は氣の
天真の途に在る。兒童を以て無邪氣のまじりて
自化を以て此境に入る人法も容易なる。よく
老境に入る子供も及ぶ。その法が流力が衰耗する
ことを云ふのひ。こゝに童子と云ふのといふか
から進歩のひある。此の三轉の音問もいふ。藝術
もあり、技も其の域に在る。自化を以て没印
しての事。宗教の偶像崇拜の初歩なり。心即
ち伴の思想も愛し、その先覺者たる。此が容易
い。法念の起る。大なる心。唯此一心を以て

佛の頼めと云ふ事ある。其の域に在りて人可とて
美と不可能と云ふ事ある。其の域に在りて人可とて
聖人がある佛があるから。

○近年性慾変態を以て研究する人が少から
ずある。又か説き及ぶ之を材料として唱来を構へ
ぬことのある。外國の書に例がある。信せえ
るやいふことが出物を見る。日本は追々
變態性慾と稱せらるべき実例がボツク現れて
来り。こんの一程の文化病があるかどうか、何故にこ
んが昔より無く、此の病があるか、道徳の衰へが常
つてそのれ。わうも日本の神史、變態性慾
いふと七のしんじのうい。自今もそんな風に出



ふてのれが果ありてさういふ事あるか、今いふ人の疑ひ出
してゐる。變態性慾と云ふは、愛人を刺
して其血を飲む事、ふやうな残虐の事、やうな
ハルマシヤ、ふやうな事、の差がある。昔の
その人の目も七つ口端も上るが、女の後ろの
こと、常態と違つて、程が、この事もある。何
れ、その事、蘭房の事、居る事、いふ、その人が考へて、
そのことが、山あるか、いふ、大いなる野を以つて
性慾の病と心得る位、か、變態の病性もある。あつて
七、此の病、その人が變態である。考へて、その病、
手も、その病、その病、その病、その病、その病、
その病、その病、その病、その病、その病、その病、

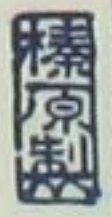
のまがあらぬ相違あり。是等の内、わづら変態と
 認めべきもの無つたが、あるらう。その方面の間に居生
 活の書き現はすことが許せんやうなから知んそのの
 へあるまゝか、恋愛関係が殺傷沙汰のあつた例は少く
 多いが、その内、変態が原因であつたもの無つとも限
 らないやうに思はる。夫婦喧嘩の家庭は、殊に
 くまのが、此等の内にも変態が原因を為すもの
 一とあるが、無いと云ふ得らう。無道が一時盛人に行
 へ、妻を鶏曲の具に供せし例もあつたが、これら
 変態性怒りと見做すべきであらう。一、反屋浄
 益が、主人を殺し死を悲しむ妻、骨を粉末する
 茶、和して喰ふ心と云ふことが、事々かどうかといへ



が、これら変態の表現があるが、知らぬものがある。當
 分の道徳性生とも思はれるものもあつたが、是等を
 変態と云ふ事、が、其も無つたものもあつた。男子上淫
 と云ふものもあつた。これら変態の交渉があるの
 へあるものか、いへば、たゞ、従来知られた
 ものと違つて来たこと、山田の科をむき、変態
 性怒と云ふ物、おかしき考へるし、或は従前のエロウエ
 ンを破つて、変態と銘の打つこと、古来淫心
 のあつたと云ふか、知れぬものと疑はれるものもあつた。西
 陽子の性、両性のことを放膽的に描き、その
 の、妻の性怒と云ふことを知つたら、是れが、面
 子のことを言ふに、いへば、変態性怒研究家

の比。

○支那の三十年前のおて今奉天の日本人令長と云うてある
野に多内心の方振り注がて来れから鳴るのを思ふう
無而を注つれ。此男の自分と白部の別法打のよめ共
夜や自分の思える毎に潤其れといふ。望に竹次と云
らあれ。多内は東京遊をこ出さけて来て洋字法の時
代に三島中洲の二柄前金又入り漢語を修めれ。其
洋字をよむ。彼のる漢語の比にうむあ。後々外交官
れといし。支那公使館に到りかめれ。後々官仕
を罷め。種々の官業に開かり。支那の事柄こ通曉
し且の支那法と操縦し。銀鍊のあつれ。自今か前
年一遊京へ出れ折時奉天から自今に遊歴して



行の幹旋する不あ。殊に自ら愛自分の為め通譯の
考を取り。實際の好まぬ。今も忘れぬ。遊京を注ぐ
時其が早大を得業。支那の才運が多く在朝の
時に自今も其才とあり。今も法論に外に他の諸名
士も今もえし。あの内閣顧問のあつれ人や法務史編纂
の編纂するも。今もいふ。法論に外に
いふ。通譯の術を。予をして書け。其の
めれ。此人の妻は福崎村出身で結婚の時余も
の媒物をして嫁か。其の心、其の心、余の門下
生と稱してある。支那の事柄に多く放浪する。所謂
支那ゴロシ終る。其の事柄が。此男の幸ひを先を免か
んと推さん。日本令長と云うて。祖國人の為め幹旋

有と務しその又或る事業を漸く之と後人が前年
から運子方面に土地を耕す家と違ふ赤田里に於ては
宅を改造し田畝と爲りて帰省の準備を怠らざる年
數の二十一年果してふが此の烟酒共々此に於て
のみ遠くより退隱して由來しといはれし所の
〇入洋進ま倫士から客でゐる近き若松市
をボツク讀んた見ると東北國迄の内に及ぶ中
殺害せんれことが叙せん其際入洋士性論を
既又申さんとするのれことを語り且つ〇其後此不
標示も何物かの停車場にありて此いと云ふれ
取らんて現する標示があると言ふれものを見
今も余の不安内のことといふ、是の何れも



現在東京驛の札堂橋東十一番のボツク又の窓の
真下の床に梅指の爪の又さき〇六角形の白石
が指の石せんれ。らんが大覚寺(外宮の)の
平民宰相の遺難の地點を指し示しよとい
ある

と尚ほ舊南新藩に属する福名河川田中館三郎
氏の出身地なることを言ふに序に相馬大佐の事
及し大佐の姉ハ則ち田中館倫士の祖父田中館彦
左衛門の妻である、即ち梅指、お馬大佐の血縁に
あることと始めの事

(八月十九日記)

尚ほ新江戸福名倫士が下田と云ふれ時何と感
か例のおまの着の、其の投身の淵に此地を尊の

キロンチンで殺されたのは世の衝撃と比してゐる。尚ほ
佛の革命の犠牲の多きと行へるがントシ、ロバ
トヤ、マラーと連絡してゐる。マラーも醫者で、電
や光線と云ふ程の論文があつて、ゲイターといふ人
の才氣も稱揚した程の人物であるが自由を執る
故に革命の犠牲の多き者として、悪魔と云ふ
云ふに、かゝるものゝ冤獄もあるといふが終に
ボロテン、マラーといふ名を以て人殺されしを
ボロテンの再審の刑死を免かぬ。

の世を深き憂ひに陥れし、枕頭に入浴の地を
み、ミエウの大尉(維也)エムデン(後)
一に、エムデン(維也)の艦、獨り北軍艦の方



も荒し、四の五の、誰んも知らぬ甲艦の
艦の乗組員は、花を某處に派し、そこへ
を断裁せんと企て、ミエウの大尉が
測鏡や望遠鏡、他の兵器を推して上陸し、
一に、その島の英領にあり、然るに派を軍が
一に、その島の英領にあり、然るに派を軍が
開かん、派遣の終る本艦は、この島に
九ボロ船に乗つて、百難を冒して漕ぎ出たが、
一に、その島の英領にあり、然るに派を軍が
七ボロ船の難儀を、一に、その島の英領にあり、
一に、その島の英領にあり、然るに派を軍が
一に、その島の英領にあり、然るに派を軍が

終然か沙漠のりをもるし、倚ぐに艱難を嘗め或る
時ハ敵と鏡心と交へ、或る時ハ旅人をも傷り或る
僅くも支へ、途中悪疫と冒さんて死者を生し、或
る時ハ自國の船：乗つたが、まゝか運送船があつたの
ハ敵の拿手捕を恐んて、伊國の旅をも息を止し、敵眼
を胡麻化し、列強本國に帰着し、其の苦心ハ一
トあり、このころも魚書もゆつれと思ひ、
不ど、死か、漂流船の海を渡去り思ひかある
ハ、善色の海海源も、経緯が錯綜するあり、
此の興味がある、エリデニ、小舟の時、
て破壊し、北の大尉ハ其後、其の船隊の司令官と
よ、和克復の年、退官し、其後、
記ある



政治家としての流弊とあること

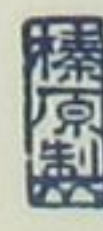
(八月廿日録)

○近き天正記と偽る名を余ハ此書物がある、こ
ハ、華書類後集にあり、
七ありて、自ハ七卷とある、
名、
ある、
多くの武将を、
この、
歴史上、
漢書から天子皇后、
皆此の、

ことい病の忘状や美人に對する送來のさしづか
美しき一も其病を依つておよそ美人が軽き世界に
りする愛の興味である。天子のお脈をお見する
俗説の思勝とまのこともあんなにウソが可
いある名人の玉体は山のくことを許さんとい
て、遠くから御種子と愛みまのあはれ
記とある、天子の病氣を治したをいふ
典がある、お族を許さんといふ記もあつた
天子の御恨に就いて特々愛しくあつた
に記候する。後記の病氣にステリーに
推測せん、治田の力やを病日にと倚つたといふ
論議であつたか、忘れんが強引に愛し
る人



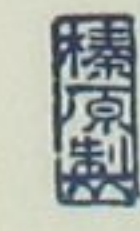
句の病があつた微笑を洩らさるゝあるものさあつた送書
といひまゝ、存一史料が大切な文献である感
し、この往年の事だが、其時を思つたの、送書など
誰んも接しと美人の性格ハ勿論其家庭から美人の
秘事さむいり得るよ、無い、天下第一の医者は
しく、其筆を止めるが、其筆を止めるが、
日あつた、又いふときつけまへば、
か、彼を其時、其時、其時、
あつた、後世に得難い文献を遺すもの、
叶得るもの、こと、感し、其一端を、
書い、こと、あつた、思ふ、送書、
あつた、上人の秘事を言ふ、こと、道徳に

め、斯のことと心掛けまいと云ふべく、惟新以来名士も
少くも、嘗て斯のことを書き残し、此人ありとも
覚くまい。自人の入洋情士といふの如く、其の間の
変り、今でも時々余も、概念があるの如く、いつぞや
以上の所感を入洋と云ふれ、ことかある、入洋の文章の
大なる業、まめむも、詩人の性格も、嘗て、
吾國者の侍従を勤め、経歴も、ゆゑ、著名の人が
病志の爲め、此人の手、かゝる、その如く、所から、定
め、種々の目録に、珍しく、い、ことかある、
き、箇の置、ことか、他の、爲め、必、要、か、ある、
ま、よ、と、入、洋、の、業、も、多、く、自、人、も、又、心、掛、り、折、角、
書き留め、れ、よ、か、あ、つ、れ、か、大、空、は、又、か、鳥、有、り、帰、り、


い、ゆ、へ、も、致、命、か、あ、る、と、後、つ、れ、こ、と、か、あ、る、入、洋、の、地、業、
と、後、ん、か、見、え、る、自、人、に、関、す、る、こ、と、か、あ、る、
人、も、あ、る、の、具、を、使、せ、し、ら、る、こ、と、か、あ、る、
人、に、接、し、て、得、れ、る、思、ひ、は、法、術、も、ボ、ッ、ク、見、て、見、
る、具、味、か、あ、る、
と、相、あ、る、
人の、秘、密、を、や、ら、う、と、思、ひ、
て、も、他、の、者、の、業、も、
物、と、入、洋、の、如、き、
八月廿一日記

○自人の、人形、を、
伊、指、編、を、
大、改、
三、四、を、
文、業、

行き人形の操縦を見た。其時初めは今得し此のく
操縦の節し廻りや勢の押揚や強油を人が人
形の行動にどのシリ持まつてゐることか女のま
言。人形を生を其つこまの、淨瑠璃の節回し
くあつたかこまのと思ふに、淨瑠璃の節をゆる
いあつたかこまのと思ふに、淨瑠璃の節をゆる
七あつたかこまのと思ふに、淨瑠璃の節をゆる
人形を人の技能と就て感したることか、其の相竹反
十中（四四十三）段（か登城しとるに、他の操
は人形を考りてゐる而も感をもつことか、淨瑠璃
又て其意表あり所かおのつかう聲面を現
市の切る所を其の聲をもつてゐることか、



に紋十郎の又の考も目表はつてゐる、全く無感なひあ
つたかこまのと思ふに、淨瑠璃の節をゆる
紋十郎の紋又感心したることか、今、新道は一人
者と云つて、ハ吉田榮三の文楽の座敷にゐるか、先
東京の末代、河井、あはれん、就て行つた、
かまき、まを、山利の中央に於てゐることか、
ことか、人形十郎の又の考も目表はつてゐる、
あつたかこまのと思ふに、淨瑠璃の節をゆる
と許してゐる、今、新道は一人

——人形を遣ふ時の、遣ひ手の體からだですか。それは人形の動
きと同じやうに動きたがるものですが、動かさないやうに氣

をつけるのが原則です。女形が女のやうに動いたらぐにやぐ
にやしていきません。先の紋十郎はんもそれはやかましく言
ひました。がツイ氣がはいつて、人形の動きと一緒になりた
がつていきません。（なるほど、榮三の舞臺に於ける態度は、
他の何人よりも無表情である。遣つてゐる人形がどんなに悲

に言ひ切ることは困難としても、以て榮三の一面を語るものとは言はれよう。

人形遣ひは暑いもの

——まつたく暑うおますな。

水銀柱が三十三
・四度を上下しよ
うといふ七月下旬
の油照りである。
どう扇風機が動い
てゐたつて、ぢり
ぢりと汗がにじむ

——それでも朝
晩風がありますか
ら、大阪よりは凌
ぎようございます。
いやどうも、人形遣ひといふ生業は暑い
筈です。御覽の通り、文楽の人形は三人遣ひでせう。私は左
り手で胸を支へて頭を動かし、右手で人形の右手を遣ふ。別
に「左り」といつて左り手だけを遣ふ者と兩足だけを遣ふ「足
遣ひ」と——かう別に二人がをります。三貫目も五貫目もある



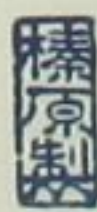
人形を動かしてゐる（側）にビタリとくつついてゐるのですから、その暑さといふものはありません。舞臺を一つ済ます毎にビツンヨリ汗です。併しまだ、歌舞伎座には蚊がをらんから助かります。明治座は川端のせむか蚊が多い。先年明治座の時に『日蓮記』が出まして、庵室の日蓮を遣ひました。二十分ばかりといふものちつとも動けない役、これには弱りました。汗はジト／＼になる。蚊のヤツは足の方と頭へたかる。動いてゐればたかりもしませんが、まつたくあの時には閉口しました。ヤ、こんな事を申して、私共ばかりがさうではない、「役者衆でも同じことでおまつしやるが」と、謙讓な態度である。

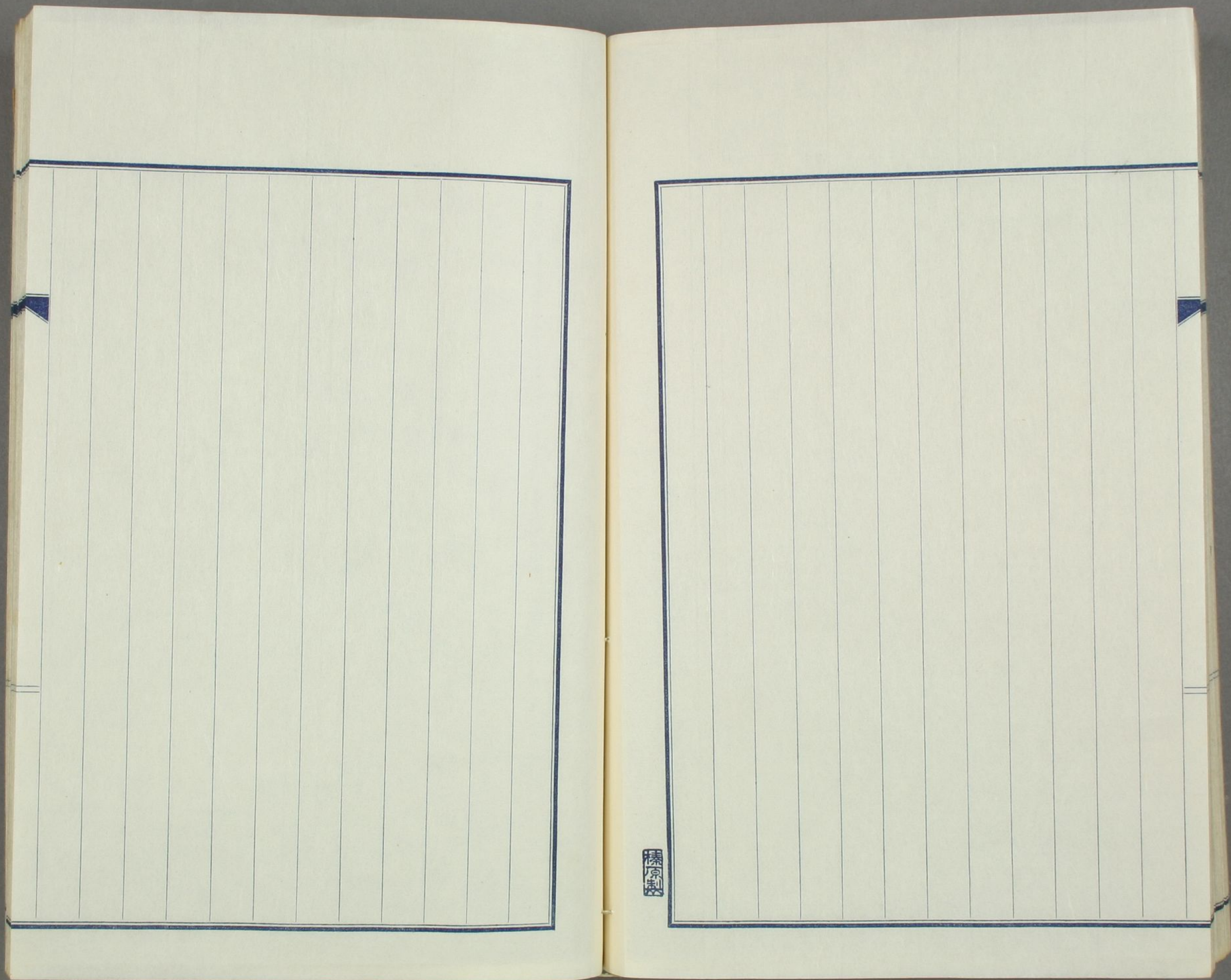
——いつたいに人形遣ひは、太夫さんや三味線に較べると、損な榮えない役廻りです。經濟的にも恵まれてをりません。それに太夫さんと三味線は素人衆に稽古するといふことがありますが、人形には皆目それがありません。樂屋にばかり居て、黙つて舞臺で人形を動かしてをればいゝので、人氣の上でも、まことに榮えないわけでは。その榮えない人形遣ひの中でも、立役（男の役）の人形

業中さあはく下駄、蹴えんと流るゝあゝ、其の舞
台下駄、とまゝの左の妙くもある。

榮三が向う脛を蹴られた舞臺下駄といふのは、主任の人形遣ひの用ふる大きな高い下駄である。高さには六種ほどあつて、二尺、一尺五寸、一尺、五寸といつた風の高さになつてゐる。いつたい主任者が高い下駄を用ふるのは、もと／＼手摺の高さが三尺五寸あるのだから、人形を高く差上げてゐる必要もあり、足遣ひの働けるだけの餘裕を與へなければならぬからである。背丈の高い人形を遣ふ時には大一番といふ二尺五寸もある高いのを穿かなければならない。この重苦しい大きな下駄を引きするのだから、暑さも格別なわけであるが、うつかりすると、舞臺の凸凹や板の喰ひ合せなどにひっかけたり落ちこんだりする。本舞臺（本手）の前方の船底（二の手）へおりて活動するのは、なか／＼の大骨折なのである。

業人があゝとまゝの左の妙くもある。





Small, dark rectangular stamp or mark on the left edge of the right page, near the bottom.

○人間の感懐が物に觸れて老若の年輩が異なる
といふものの當れとてみておろが、或る年輩は
まじりて初めて知ることも、四季を無茶苦茶に洩り
さき、○年輩もある。春夏秋冬、寒と暑と、まじりて、
氣候や風物に對し、吟れみたり、寒く夏は暑く、
まじりて、空を流るるに、まじりて、
春のうぐ、秋の寐し、まじりて、
も終別の感懐もたえず、
あが、漸やく、年輩が、
感をもて、まじりて、
てくる。保し、
境、まじりて、



人間の年輩は、春、
のどか、
林邊、
を感、
のどか、
印者、
のどか、
乾す、
とも切、

母のそよふ乙女の涙のつぼむ天に動かす
改良の道路を真直に歩む一歩、改良せよと曲り
くねる比路の天才の路であった
時とわがれを有らざる人間と一と淋しいもの
まの後の人生の夢をなにいさうあてまわす
あつた比路の天才の人間も道にまよひのど
れの子供を育てるも、まよひを教える。子供は人間と免
か今法はゆるゆると歩んでいく。向る道は見えぬ
切つてあつたのこころ、あつたあつたか。大人の理性
が不可解とせよとこころを、まよひを可解の世界に
り上げよ力があつたか。
ラブレターは法路式、疑の御方きと其の終り

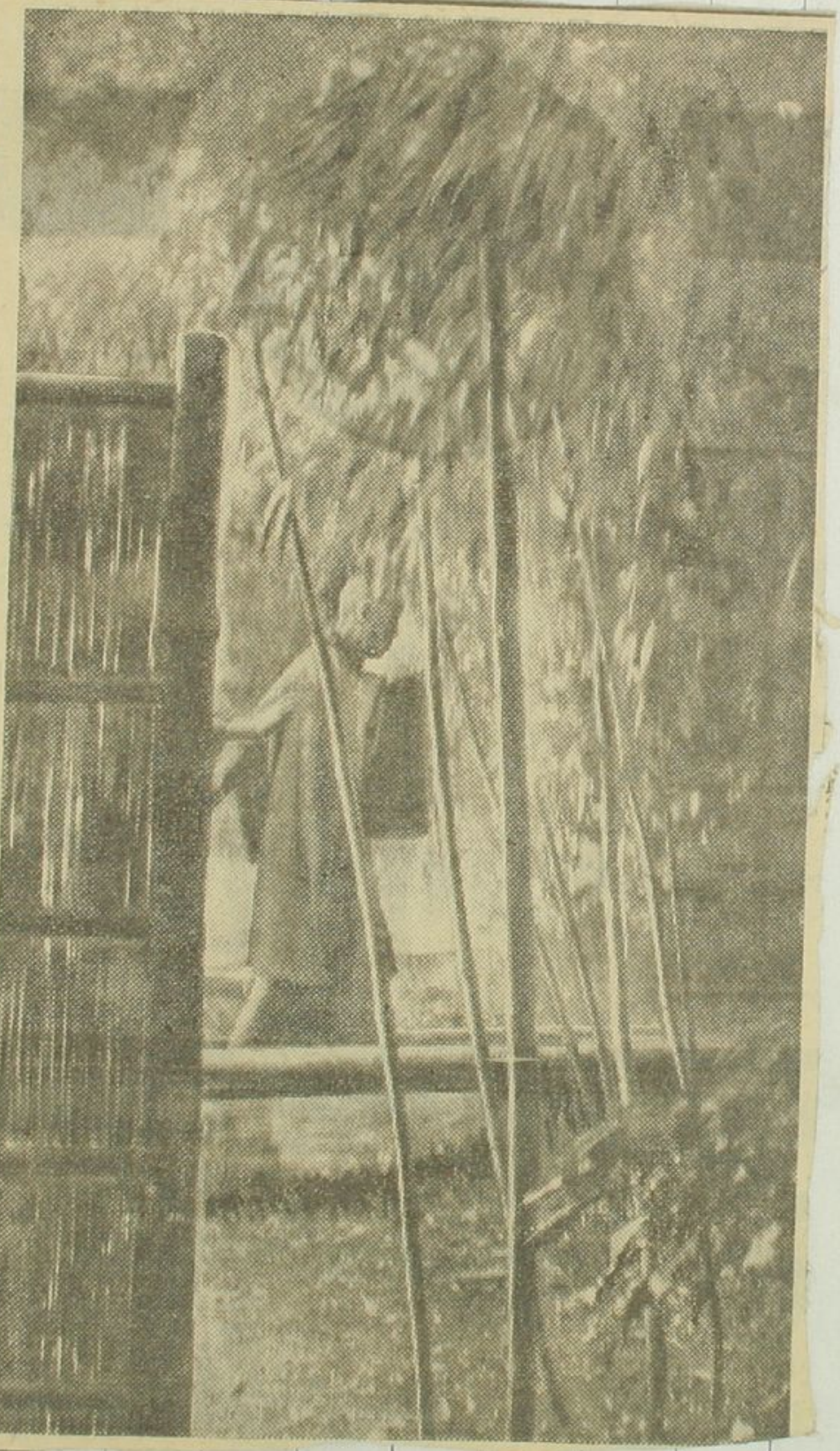
志望の天回す花の法路にて基所が解消する

○今朝(八月廿二日)の東京口より御殿橋のお花を植ける
 西園寺屋の近影が出来る。例の竹印をつき、後ろ
 かくしが織手も扶けて、橋を渡りつゝある。園二二程
 の味がある。

御殿橋が戊辰の戦後、北城後、未だ此時、ま
 る十八年、の時ひあつたが、佛と其處の詩を、入深坊
 士の路も、中へ得たわら、爰も、掲げ、宮土の、お
 照と、よる、も、一、真、の、ま、る。

を、家、の、花、一、葉、の、氷、蛟、一、片、所、次、毛、淫、白、燃、前、開
 匠、着、魘、魘、魘、魘、忽、而、逝、也、盤、根、錯、即、分、利、是、
 男、兒、難、難、卒、回、旋、慷、慨、起、舞、擊、地、歌、如、此、寒、寒、寒、
 々、何、君、不、見、近、口、士、夫、如、婦、也、法、及、其、推、無、一、語、

東京製



元氣な西園寺公

【御殿橋】立秋以來、露には朝、草が色とりどりに咲き、雨に降られて、
 すでに秋の涼の氣が、秋の七、が、御殿橋山荘に、悠々自適の西園

寺公もかくしやくたる、健康さ、の、布、置、な、を、變、工、し、た、ば、か、り、の、新、庭、
 で、廿一日は午前十時、すきお、織、さ、の、庭、づ、くり、に、つ、いて、約、廿、分、間、詰、り、
 ん、を、伴、ひ、佛、の、黒、竹、の、杖、を、つ、き、裏、門、合、ひ、元、氣、な、姿、を、見、せ、た、(寫、眞、は、養、
 子、八、郎、氏、が、攝、影、し、て、お、る、) 嗣、子、郎、を、訪、ね、た、西、園、寺、公、の、元、氣、な、
 外、庭、の、新、庭、を、訪、れ、植、込、み、や、果、石、姿、の、ふ、寫、す、

○昔も湯屋の湯女と云ふかありて、浴室の垢をすり、重
荷を三伝ふを強して浴室の白湯を添くたことあり
ぬ、此の遺風と云ふべきは、田舎に存してあり、自
分の御座敷後や沐浴の料、現屋より浴するに
垢か客の垢をすりて、人の習慣ありて、遠来の客
人もいざいざと之をまきこぶが、自分の垢をすりて、入浴
料の所、此の浴室の料、現屋に泊つた時、入浴
するに、女がタスキ扱ひ、尻をすりて、やうて来た
る客も、湯の膏の膏の手を削り、垢をこすりて、人の手
拭や垢すりを用ひ、いざいざ、肉体が肉体、福の
所、此の味あり、と云ひやうか、これら、いざいざ
湯女の若狭じあるが、瑞典の似客りのことあり。

瑞典

ユア直ぐの人間と藝術のゆゑ、左の如く記してある
瑞典のバスの特徴、風呂のつとあり、若い女が、水
で浴室に入つて、洗ひませうか、と云ふ。瑞典の浴室
を知らざる人、大抵ときまきし、ノーと云ふ
とあるが、此の先生も後、人と強つてひやうせんれと云
ふが、これ、日本も、男子の三枚の女湯、入つて垢
をすり、ことを許せん、と云ふ。同じ習慣からきて
あるのか、湯女のこと、湯をまきの手あり、とい
ひ、わかひある。

○九月、踊の中央に浴し、依り、木行、宿か、此の獲れ、お
美女の目法が、全部出て、ある、拾ひ、後をすり、と
余り、こが、ニヶ所出て、ある、八月廿五日、此の市、此の氏

行乃直以家ヲ略血臥孝の報云々」と記し、十月
吾の條ヨリと「前巻」出ると「跡必市以氏」の門生書意ハ
及色依二枚を有る前々持来りしを早速押渡して
本。道。と。ん。と。ま。ふ。氏。の。病。を。養。ひ。て。鎬。合。三。橋。を。在
り。と。ど。刺。ち。橋。に。定。キ。と。互。ち。押。渡。を。し。が。極。め
て。極。也。と。も。う。此。の。余。の。記。睡。を。在。る。こ。と。を。し。此
の。神。意。を。托。し。た。り。三。の。橋。を。こ。の。其。所。也。の。別。在。を
傳。り。し。引。移。り。た。る。後。と。云。ふ。



○トングリッゲ大島の十八のヨレジを控合しもある、其のヨリニ
テ一太のバ尤七名あり且つ極獄の七松福のヨリ科廿五のハ
と、ん、ま、の、容、れ、入、り、得、た、い。此の大島のヘンリー八世
此の王の八人の貴君を換へた名ありの比、其、置、を
ザー、お、手、元、金、を、運、て、た、り、換、じ、只、の、正、門、に、ヘ、ン、リ
ー八世の條が主つてある、四百年前の事、建設あり
全体其の太の僧院の是に長しれども、いふ、いふ、く
宗、教、具、の、こ、と、が、残、り、あ、る、が、ラ、ン、と、い、ふ、の、め、あ、る、僧、院
が、あ、る、が、ど、う、し、と、も、ん、を、着、し、の、け、ん、と、い、ふ、の、め、あ、る、僧、院
あ、る、他、の、寺、院、に、武、所、を、心、す、と、ん、の、飯、ふ、け、ん、と、い、ふ、の、め、あ、る、僧、院
の、後、の、同、族、の、事、の、こ、と、が、あ、る、向、使、此、の、後、を、や、
ま、し、の、ハ、食、を、出、席、し、る、こ、と、が、い、ふ、の、め、あ、る、僧、院、の、後、を、

の名跡で、礼拝を以て礼拝の後、会堂に入るの地が、又とち
がウンを着付けねばならぬこととせらるる。数年前に
出席の簿を口記するもの、会堂の出席と否との
名を記入すること、とうていある。

昔の女子の学校即ち尼の各校は男子の学校と
揃へてゐた。日々男女が礼拝を以て結ぶるもの、思
ひやうが起つた、まゝもふ義をなすとす。学生連が
宗教の名義のゆゑ、突如尼生(の)の校を礼堂
とせしめ、ケンブリッジの校を置くもの、
とすの不便が出来て、尼の校の郊外の二里の四
に故郷へん、まゝの現在がートンとニユーナムと
二校である。今の地(の)世連も大ニの海義を出席



を許してゐるけれども、英國の於ては、寧ろ、叙上の
まことかある。

トリニティーはニエートンヤダーウエンヤ詩人テニス
との出れを扱ひある。ケンブリッジ出身者の特ニトリニ
出身を名乗るとす。

トリニティーは七大学の位階の考へ方、頗る複雑な、四年
から七支出し、其の所有財産も支出し、亦その附金の
方法を固く、固習的の任満法が、地ある、就して得る
ことある。

英西の流石な風紀かや、よく、学生扱か、市街に出
てその生(の)風紀を監視する、腕の、あふ、学生扱
と、伴して、不都合のあるもの、地手は、捕らるる

何れにせよ人を思ふを「ブルドック」と呼ぶのである。
 瑞穂統多なる名もその比が勝利を得た時、何故か
 瑞穂を校庭で焼くことが儀式となるのであると云へ
 る。
 カンブリジの夜不眠の女の成るが古くは遠く東洋七重
 代の茶葉の風味があらういつかや友人がその回考を
 を見て何となく思ふ骨髄を三巻するの黒字のするの
 遠慮あつた、よゝも文句の思想が生まれる。よゝと云
 られが、實の「さく」の「まゆ」としての校のあつたあつたの
 つも、歴史の古くは大方の精神修養や人格美の
 成や史の回考を感化を興へることか主として
 とも日本の由緒あつた古刹が同校の役目をなさす



のと回(一)と思ふは...

○中央公論九月號に「サムエル、ニウソムと日本人の
 日本の庭園と藝術」と題する...の長江...
 ぬれをあるの...一石...後人に見れば、よゝも日本庭園
 を理解しとおう性...耳を傾く...是の...
 ある、進...外人の理解をゆるぐことを...
 思ふ...此人の...此...未...日本庭園の研
 究...心...甘...心...認め...日本庭園の文
 化...研究...補助を...
 同人...

二十一日記

(昭和十一年八月)

△(前新維)附番店食飲戸江大◁ るよに附番の間年政安				
西		行司	東	
同	同	行司 深川藝妓、吉原藝妓、堀の藝妓、柳橋藝妓、酌取御免	同	横綱
同	同		同	八百善(山谷堀)
同	同	年寄吉原遊廓 品川遊廓 根津遊廓 新宿遊廓	同	大關
同	同		同	信樂茶屋(新橋)
同	同	前頭	同	關脇
同	同		同	八百松(枕橋)
同	同	同	同	小結
同	同		同	魚十(河島)
同	同	同	同	前頭
同	同		同	笹の雪(根岸)
同	同	同	同	同
同	同		同	川榊(駒形)
同	同	同	同	同
同	同		同	喜多川(尾張町)
同	同	同	同	同
同	同		同	藪そば(團子坂)
同	同	同	同	前頭
同	同		同	魚文(雁新道)
同	同	同	同	同
同	同		同	大黒屋しやも(大根河岸)
同	同	同	同	同
同	同		同	萬屋そば(淺草)
同	同	同	同	同
同	同		同	萬久(淺草茅町)
同	同	同	同	同
同	同		同	がん鍋(上野山下)
同	同	同	同	同
同	同		同	丸屋そば(赤羽)
同	同	同	同	同
同	同		同	五色揚(兩國)
同	同	同	同	同
同	同		同	狸そば(廣尾)
同	同	同	同	前頭
同	同		同	深川亭(兩國)
同	同	同	同	同
同	同		同	氷月(池ノ端)
同	同	同	同	同
同	同		同	はまぐり(馬道)
同	同	同	同	同
同	同		同	川半(下町)
同	同	同	同	同
同	同		同	柳川どぜう(横山町)
同	同	同	同	同
同	同		同	辨當吉(魚河岸)
同	同	同	同	同
同	同		同	田樂花や(廣小路)
同	同	同	同	同
同	同		同	玉の井茶浩(京橋)
同	同	同	同	前頭
同	同		同	海老屋料理(王子)
同	同	同	同	同
同	同		同	稻毛やあなご(高輪)
同	同	同	同	同
同	同		同	田舎そば(東兩國)
同	同	同	同	同
同	同		同	千登勢(馬喰町)
同	同	同	同	同
同	同		同	岡村天ぶら(上野山下)
同	同	同	同	同
同	同		同	川崎や(ば多川)
同	同	同	同	同
同	同		同	伊豆惣(京橋)
同	同	同	同	前頭
同	同		同	平清亭(深川)
同	同	同	同	同
同	同		同	大金蒲燒(浮世小路)
同	同	同	同	同
同	同		同	八百巽(芝大門)
同	同	同	同	同
同	同		同	長門ずし(芝神明前)
同	同	同	同	同
同	同		同	大松酒なし井茶漬(山形町)
同	同	同	同	同
同	同		同	のだ平(魚河岸)
同	同	同	同	同
同	同		同	丸屋しやも(東兩國)
同	同	同	同	同
同	同		同	明ぼの茶漬(北新堀)

▽勸進元文献考證家△

江戸と東京の歌

人はまた一句切ると云ふやうにして、一座の人が代る／＼歌ふ、歌ふ終ると一座の人達が、さも圓滿さうな笑をたくへながら「いや、大さに御苦勞さんでござんした」とお互同志が御禮を云ひあふ事になつてゐます。その情景は實になごやかなものであります。

中魚沼地方ではこの唄を別に田打謡として用ひてゐます。唯その歌詞には相違があるのみで、中には同じものを見出す事もあります。これが田打唄として用ひられるやうになつたのは怎ふ云ふ關係から明でありませぬ。田打について其年の豊作を豫祝する爲に豫はれるものが、或はその唄の調律が田打の勞作に合体する抑揚があるところから、又天神囃子が鹽澤の天神社の田打唄として用ひられて來たといふやうの關係か何かある爲か、之等の事は後日の研究で明にしたいと思ひます。

八幡の森に、宿れば、宵にや、鐘がなる、夜明にや、森のすがらす、(之は六日町八幡の八幡宮を祀つたもの云はれてゐます)

表の御門に、鶯が、これの丹那様、知行や増ますと、さやづる、

方言の歌
神田喜代太郎

北蒲原郡水原町の言葉は極端にシ、ス、の區別がなく、變な鼻音を伴つて、さう譽めても、よい言葉とは申されなない。随つてその方言にも特異なものがある。今該地方の方言を詠み込んだ長歌一首を見つけたから、左に掲げて見る。

越の國のこと葉遣ひ、あるは水原の名きころによせて讀る長歌
長者園

●●●●●●●●
して見ろう、用もなければ、筆とりて、ならべて見たる、
ことこの葉は、雲まをこんだ、雁(がん)の聲、耳には遠き、

きんかなら、さても大きな音(おこ)出して、おらが在所
のお祭りに、ごんだしやべりが、出来秋の、奉加踊りの
念佛に、婆やむすめも、連だちて、七字の名號、先きにな
て、題目をさり、かねたいこ、たくき大工の、婿までも、
春の目永の、たのしみや、あるは時齋のよばれ客、べとふ
たてたる、娘子も、ボ、ッコなんこ、まいなんこ、たち小
便の、手際こそ、外へもらさぬ、夕しぐれ、雪のあしたの
濁り酒、すいといはれて、手を引かれ、めつと市とて、め
こい同土、たれに塔婆の、あぶらげも、鹽のからきを、水
原の、はなれぬ中の、中島や、テンボ言うたら、姥さまに
もはやあれで、御座ります。すこごんごんこ、おんさつ
こ、あにやさんたちも、さくら花、花の巻屋と、いふもあ
り、大山酒に、神さんも、太夫舞をや、舞ひ遊ぶ、姉さま
たちの、はな唄は、もんごくごきや、オ、イ、親父も
うかれ、出放題、てうしてゐるは、千代農が、いたどく桶
の、底たき、水もたまらず、うたひ出し、あげくの果は
屁をふつた、ここからおこり、はちまきに、こぞ勝負を
して呉れん、永代までも、ひたすがと、あたまへさはる、
だしの風、下條山口、おしなべて、咲いた櫻に、駒林、春
のながめは、千金と、ふさしにしか、タンべいも、つく
みはたこそ、賑ひにけれ。

言とさうして水原附近の地名とである。
して見ろは、して見よう。きんかは讀者先刻御承知の聲
(つんば)のことで、散へて水原地方に退つた言葉でない。聲
(こゑ)を音(おこ)といふのは津川あたりにもある。しやべり
はさべり、今はいふやうだ。持上がつた一騷動、又は一談判
といふ意か。よばれ客は招待客のこと。べとふはべつごとも
いうた。髪のかざりだ。東蒲原郡のあるところでは蝶、斯う
いふ。めつと市は分らない。めこい同土は愛い友達である。
テンボは嘘のこと、そもはやは今そんまにやといふ。其れは
最早の意であらうか。「一寸屋根替へをしたら、そんまはや
百圓もかゝつた」なごご使ふ。おんさつこは弟さんの意。自
分の母は水原もんであるが、幼少の時はしよろりと背が高く
色が黒かつたので、おんさこ〜と言はれたさうだ。あにや
さんは中流以下に使はれたが、市島家でも和泉屋(舊下條佐
藤伊左衛門氏)さんのやうな富豪でも、其嫁御寮は皆姉さま
と呼ばれたものだ。(今でもさうであるらしい。)もんごくご
きは自分の母なきの若盛り(明治十五年ごろ)は大流行であ
つたらしい。母のかき寫したくごき本が今残つてゐる。鈴木
主水や安珍清姫、馬方さこ平のくごきは、現今の流行唄もさ

(37)
△(前新維)附番店食飲戸江大
るよに附番の間年政安
東
西
行
司
同同同前小關大辨
同同同前小關大辨
同同同前小關大辨

玉川あたりまでも 古畳の買出しに

墨師 金子岩吉さんの話

おこ



舞台の上に敷かれるあの太くかかれたゴザ、観客席から見ると何の変りもない、どこにも賣つてゐるやうな敷ゴザなのですが、さやう簡單な敷はれないもので御座らぬといふ次第は歌舞伎座の岩吉さんこと墨師金子岩吉氏から一席承ることにいたしました(寫眞は金子さん)

といふのを使ひます、浅草の小かります、これを先代萩の飯炊きなどでは改良ゴザで間に合せて、谷主水閣試合の場などは二百枚かかりますが歌舞伎座等の大劇場で、谷主水閣試合の場などは二百枚か

と廣間となると舞台の正面には十三間、ついで十三枚をつないだのを五本、廻り舞台の中は八間物四本はどうしても敷きつめねばなりません
花道は 十二間半ありますから十一枚半つな
いたものを、隙間なく敷きつめるためには二本必要です、だから上段の間がなく、廻り舞台のあるものでも百枚以上になります、大きは世話物たとへば野崎村とか、鼠平の家とか堀川の猿廻しとか、かういふものは新しいものでは駄目なので玉川邊りの田舎家をさばつて歩いて自然に赤味がついた古畳を買ひ集め、この表をはいで作るのです、この古い琉球もので一畳

り性から来たのかも知れませんが、また例の四千兩の大卒の場、幸名主達が積疊の上で威張つてますが、あれは十五畳積に八畳積だが、實は箱であつて、高いものをこしらへる、その外側から表をはりつけてごまかしたものです、他にあの場合は廿枚の本物がいる、舞台の畳の仕掛けを申しますとあの鼠平の腹切の後、紅と糊をまぜた血汐が一杯に畳につくが、あれをとるのは一度乾かしてその上に乾いた灰をまき、ブラッソでこするとすぐとれます
お岩様 の髪すきの場は、落ちた髪を毛を下

無料診療所を

は慥だ。さればこそこの地方の言葉が可笑しがつて長歌にまで仕組んだのであらう。なほ御本人は何でも才氣に任せてやつてのけたらしいが、學問は深くなかつたやうだ。長歌も五七七と續けただけで、調子は却つて今様風の低調子でおびたくしく假名遣なき間違つてゐるのだ。(尤も訂正してここには掲げたが……)文字などもうまくない。落款を見るに萩雄とある。さういへば萩雄と置いた本歌を水原の親類の家に見たおぼえがある心地がする。(二元)

村のお盆と節約令

天保十二年から三、四年は徳川末期に有名な水野忠邦の改革の實行された期間であるが直接その影響を受けた左記文獻を最近岩船郡酒神納村元庄家平山茂左衛門氏方に発見した
差上候御請書之事
一 盆中十五歳以上四十歳以下の者三人と打寄銘々の宅は勿論野川原にても酒宴不可致事
一 同酒之肴登軒に付壹種百文の品限り夫より高値の品調儀可爲無用事

きに跋扈したものらしい。勝負して呉れるは今でもよく使はれる言葉で、人をやつける意だ。ふんざし以下は伏せ字をしなければならぬ言葉で、あまり大つひらに説明しては新聞道具になる恐れがあるから、「曰く言ひ難し」として置く。然しつゝみばたといふは外城地名の瓢湖の堤のことで、それを〇〇〇〇の掛け言葉にあやなしたのである。中島も下條も山口も、水原舊五ヶ村のうちで、今は水原町に合併されてゐる。駒林は水原より一里西北にあつてゐる村である、姥(うば)さまとは羽黒村のそれで水原地方民の信仰が、この言葉に盛られて居り、花の巻屋といふは維新ころの大きな生薬屋だつた。

作者の長者園は姓を石川名を李之助といひ水原府に元締役として仕へた人。太田蜀山の高弟子して漢學の素養あり趣味で狂歌を能くし其一黨(當時水原には七人衆なごいうた且那様があり、有福の有閑ババが多かつたので、それらの人が集會して狂歌を作り、其點を長者園に乞うたものらしい)の短冊集は額になつて鎮守神明宮の拜殿に納つてゐる。

長者園の履歴はこれ以上のことを自分は知らない。無論、生國や官等なごはさつぱり分らない。但し越後人でないこと

は慥だ。さればこそこの地方の言葉を可笑しがつて長歌にまで仕組んだのであらう。なほ御本人は何でも才氣に任せてやつてのけたらしいが、學問は深くなかつたやうだ。長歌も五七七七と續けただけで、調子は却つて今様風の低調子でおびたくしく假名遣なき間違つてゐるのだ。(尤も訂正してここには掲げたが……)文字なきもうまくない。落款を見ると萩雄とある。さういへば萩雄と置いた本歌を水原の親類の家に見たおぼえがある心地がする。(元)

村のお盆と節約令

天保十二年から三、四年は徳川末期に有名な水野忠邦の改革の實行された期間であるが直接その影響を受けた左記文獻を最近岩船郡神納村元庄家平山茂左衛門氏方に發見した

差上候御請書之事

一 盆中十五歳以上四十歳以下の者三人と打寄銘々の宅は勿論野川原にても酒宴不可致事

一 同酒之肴壹軒に付壹種百文の品限り夫より高値の品調儀可爲無用事

玉川あたりまでも古疊の買出しに

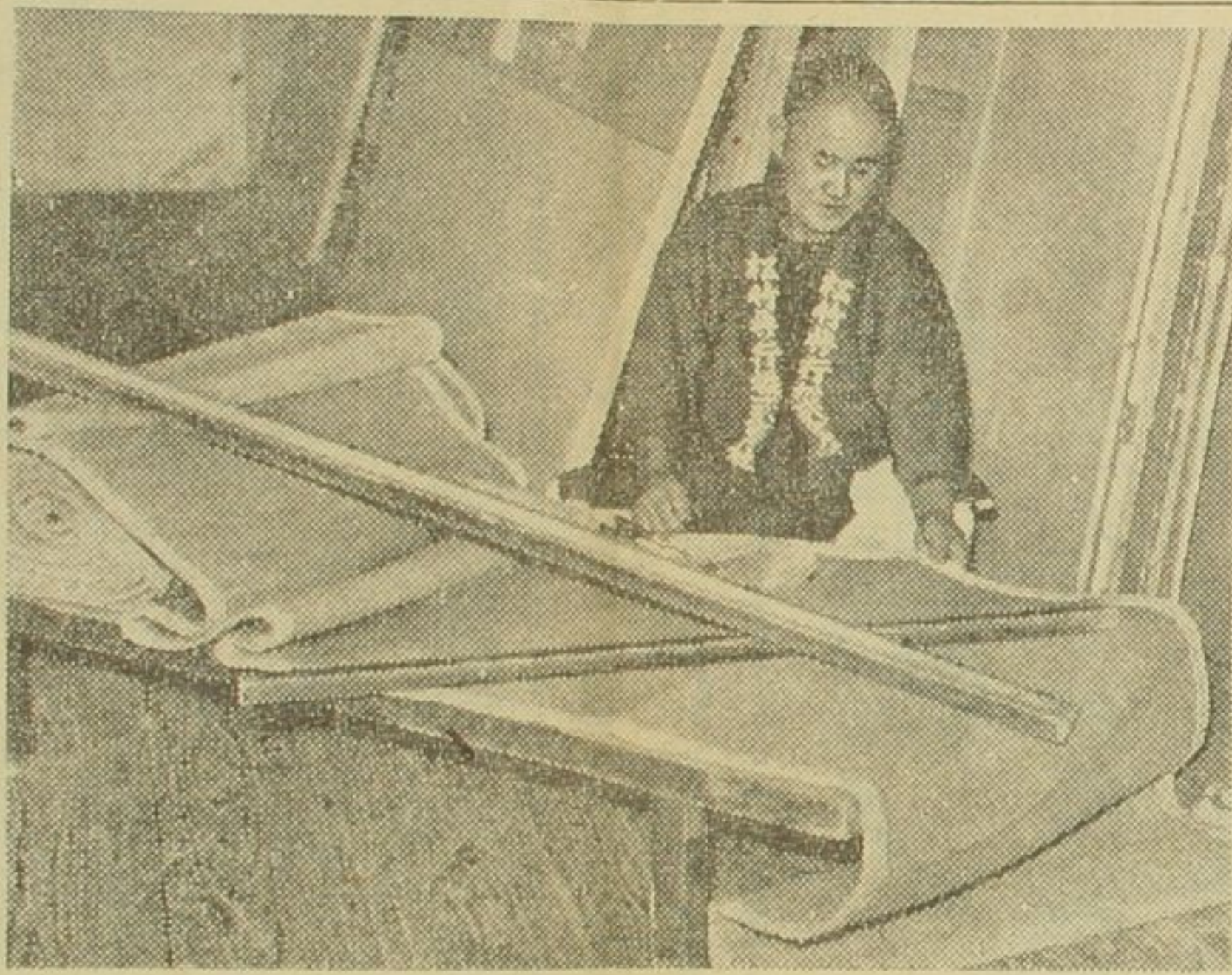
疊師 金子岩吉さんの話

お氣付でかすこ 心苦のこ

舞臺の上に敷かれるあの太くまかれたゴザ、観客席から見ると何の變りもない、どこにも賣つてゐるやうな敷ゴザなのですが、さやう簡單には扱はれないもので御座らぬといふ次第は歌舞伎座の石さんこと疊師の金子岩吉氏から一席承ることにいたしました(寫眞は金子さん)

時新當座に入つてから四十二年、舞臺の疊ばかりを相手に世の中を暮して来たものです。震災前は市村座、吾妻座、三國座などと淺草方面までやつてをりましたが今は歌舞伎座に新橋、東町、東駒等を引さうけて子供や弟子など四人がかりで新しくこしらへたり、古いのを繕つたりしてゐるのであります。

一口に疊といつても歌舞伎などではさう難かしいことは申しませんが舞臺の方では殊のほか面倒なもので、私は五代目菊五郎師から口傳をうけてこれまでやつて来たので、昔は、舞臺全盛時代に四回、多くて六回しか芝居が開かなかつたのにこの頃はほとんど毎月芝居が開かれてゐるのに仕事の方がその割にふえてゐないのはお客様が疊などを見て目をとほして下さる暇がなくなつたものと見えます。が、ともかくも私共の方から申しますと舞臺の疊を



私(岩吉)の疊師としての生活

と廣間となる舞臺の正面には十三間一ツツ三三枚をつないだのを五本、廻り舞臺の中は八間物四本はどつしても敷きつめねばなりません

花道は 十一間半ありますから十一枚半つないだものを、隙間なく敷きつめるためには二本必要です。だから上段の間がなく、廻り舞臺のあるものでも百枚以上になります。次ぎは世話物たとは野崎村とか、平の家とか堀川の猿廻しとか、かういふものは新しいものでは駄目なので玉川邊りの田舎家をばつて歩いて自然に赤味がついた古疊を買ひ集め、この表をはいて作るのです。この古い琉球もので一疊當り六十錢くらゐでせうかな、また渡海屋や魚屋宗五郎とかお祭七の家などの疊は青いところに赤味がかつたものをこしらへなければなりません

これは なか／＼難かしいが琉球だから一枚一圓程度です。玄宿店や寺子屋、長兵衛家といふのは黒べりならいゝといふことになつてゐます。三人吉左や、有馬の化狸、相馬の御所のやうな古寺の疊は、お寺さんを歩いて陽で眞赤に焼けたものを集めて作るのです。本場の疊も使ふ時があります。地蔵加藤の庭の地蔵は高麗べりの本物を廿枚敷きます。幸幸では幸兵衛が氣が狂つて疊の間に筆をたてるので本物のものを使はねばなりませんしどうした事か知りませんが

加賀蒔 の道女の宅や野崎のお光の家では本物を敷きます。これは音羽屋の儀

性から来たのかも知れませんが、また例の四千兩の大半の擧が、名主達が積疊の上で盛張つてますが、あれは十五疊積に八疊積だが、實は箱であつて高いものをこしらへる、その外側から疊表をはりつけてごまかしたものです。

他にある場合は廿枚の本物がいゝ、舞臺の疊の仕掛けを申し上げます。あの舞臺の腹切の後、紅と糊を混ぜた血汐が一枚に疊につくが、あれをとるのは一度乾かしてその上に乾いた灰をまき、ブラッソでこするとすぐとれます

お岩様 の髪すきの髪は、落ちた髪の毛を下のおいて、すつかり後見がかき集めて、この抽斗の中に入れて奈落に落してしまつて後の芝居の邪魔にならないやうにします。舞臺の方にはこれくらゐにして、役者衆の樂屋の疊がまたなか／＼の物で歌右衛門さんは鶯べり、六代目は黒べり、高島屋さんが茶べり、高麗屋は團十郎好みの茶べりといふ／＼好みが進つてゐます。この樂屋に 他役者が入ると疊替へをしてお返しをするといふ形で部屋持の役者衆を廻るのです。一番歌舞伎で賑やかなのは歌右衛門さんで成駒屋が出張される時は全部舞臺の疊を替へさせられます。だから歌右衛門さんが出られる時は疊ばかりで二百圓は

區別し て先づ第一に御殿ものといふのがあり、これは先代萩や鏡山の草履打などは白いへりの俗に高麗

身の内用とす。我國体からえりて、刀に高邪の及りて、其所の
たふは、偶々いふ事



年輩や識見で全く書味が違ふ。青年期に一
向興を感じなかつたものが、老境に入つて
同感を惹き起すことがあり、文章の巧拙や
含蓄などを味ふ能力の無つた時には、匆卒
に讀過して、名著とも覺へないものがいく
らもある。さてそれを他日讀んで見て、妙
味を感じるやうなことが甚だ多い。實は青
年時代の濫讀は讀書の一弊である。一讀を
經ない書物は或る年輩になつて披見もする
が、一遍讀んだとなつて兎角再讀を厭ふ
て、遂に其の書の眞味を知らずに仕舞ふか
ら濫讀はすまじきものと感じた。話はチト
違ふが、小中學で教師が生徒を引率して修
學旅行に出かけ、史蹟などを訪ふことがあ
るが、生徒に豫備知識もなく、何等有形の
ものゝ存じてゐない故蹟に、多少の説明を
したからと云ふても稚童の頭脳には何等の
感じも起らない。回顧趣味など云ふこと
は本來高級の思想に屬することだから、
幼稚の兒童には過ぎたことで、何もわか
らない時分に名所故蹟などを濫りに喰ひ
散らさしては、恰も少年時代に書物を濫讀
すると一般、後の爲めに寧ろ害をなすとも
言ひ得る。わかりもしないがたびたび往訪し
たとすると、再歴を欲しないことに成り勝

五十九歳で死んだのは惜しむべきである。

此一戦

支那産の縞子の織留めに「如源」の二字
が立派な書で織り出されてゐる。この二字
は織屋の記號であらうが、我國の婦人は此
縞子を帯として用ひると、此記號を切り棄
てず、一種の裝飾として丁度臀部に其一端
を現はしてゐる。悪戯者は生殖を聯想して
如何にも「源」に相違ないと皮肉ることが
ある。東郷元帥が國運を賭した大海戦に此
一戦云々の大號令は不朽の大文章だが元帥
は戦捷つて伊勢灣に上陸した時、某酒樓の
妓が請ふに任せ元帥は妓の帯に「此一戦」
の三字を書かれたと或る隨筆で見たが、腰
を生命としてゐる妓の帯に、「此一戦」の三
字が「如源」の二字に比して活氣があり、
いつか此雜誌に書いた犬養木堂が妓の帯に
「觸處生春」と書いたよりも遙かに優れてゐ
ると云ふても、純眞な元帥は恐らく其意を
得ないであらうが、崇嚴のことを藉り滑稽
を弄するはユモリストの慣用手段で、事が
崇嚴であればあるほどユーモアの効果が多
いのである。話は違ふが此頃聞けば、考證
家なる眞面目の研究家の範圍に「後家捜し」

であるから、教員は此點注意を要すると思
ふ。

森立之の事

人の家庭の裏面などは容易に知り難いこ
とで、故人となると別して知り難く、往々
想像を裏切らるゝことが珍らしくない。森
立之と云ふ人は福山藩の醫で、伊澤蘭軒や
狩野掖齋とは深い關係があり、立之の筆蹟
を見ると其の楷書は掖齋と見紛ふ位に書き
行書は掖齋以上とも見らるゝことで、此人
の遺書に就て其の校勘や書入を見ても學識
のほどは略々窺はれ、好書家であり鑑書家
である。書誌學界に知れ渡つてゐる人であ
るが、其の人柄はと云ふと餘り知れて居ら
ぬ。此の人の孫に當る御婦人の語られたの
を又聞きすると、立之が若い時藩の忌彈に
觸れて流浪十六年に及んだと云ふが、其の
原因は案外である。吉原の娼樓に娼婦と戯
れてゐる際に、娼婦から椽下に衝き落され
たことが、藩に聞かされて失脚したのだと云
はれてゐる。此の長い流浪の間に江戸附近
の諸方に漂泊し或る時は生活の爲め採藥旅
行をやつたこともあると云ふ。立之は美男
子型の優男で、宛がら梨園の人の如くであ

と云ふ通語があると云ふ。變にエロテック
の言葉だなど仔細を糺して見ると、考證家
のあこがれてゐる研究資料は多く名家に蔵
せられ、それが門外不出となつてゐるので
未亡人に就てセビリ出す外はないと云ふの
で此通語があると云ふ。譯を聞けば如何に
も道理であるが、何分にも聞こへがよくな
いと一笑した。

餘白填詞

柳は靜態に趣致あり、風に遇へば更らに
趣致を加ふ、「結ばふと解ふと風の柳かな」
(千代)は風柳を描き得て妙を覺ふ「酷暑清
涼を思ふ、山間の空水清冽消受するに足
る、蕪村は云く「夏川を越すうれしさよ手
に草履」千代は云「紅さいた口も忘るゝ清
水かな」共に此間の消息を傳ふ。
海濱に波濤を觀るも夏時の一快、實朝の
歌に「大海の磯もとゞろに寄する浪われて
碎けて裂けて散るかも」跌宕眞に千古の絶
唱。
胸中不平ある時揮毫に没頭すれば且らく
不平を忘る、梅道人不平あれば竹を寫す、
其詩に云く「心中有箇不平時、盡寄縱橫竹
幾枝。
手もと歩するにあらず、而かも兩手を縛

つたのみならず、性來劇を好み自らも素人
芝居をやつたと云ふが、どれほどの技倆が
あつたか、音曲文は全く見込がなく、師匠
に諭されて稽古を斷念したと傳へられてゐ
る。斷片的にコンナ事を聞いても、立之の
人となりを想像してゐる多くの人の思惑を
裏切るが、實は當時の世相を考へると、こ
れ式のこととは敢て案外とするに足らない。
當時詩人として名のあつた、柏木如亭は吉
原の竹枝で有名だが、あの人が私の郷國に
來る途次梨園に伍して素人芝居を演じたこ
とが、いづれや見た彼の書簡に自白してあ
つた。狩野掖齋でさへ、ある時仁木彈正を
扮して茶番をやつたと云はれてゐる。掖齋
が津輕藩の江戸の留守居役を柳橋に招いた
時、座に侍した妓が、田舎侍の主賓を袖に
して、目を狩谷に屬したので取持役の狩谷
が閉口したと云ふ艶聞も傳つてゐる。江戸
末期の世相は通人才子を男子の誇りともし
たから、ひとり森立之を難するにも及ぶま
い。立之の子約之も相當學才もあつたが、
ひどいシマリ屋で、古い手拭ですら決して
棄てることがなく、簞笥一棹に満したと云
ふから、他は推測に難くない。此人の妻は
大槻家の女で、如電翁の姉に當る人だが、

して走らしむれば疾走する能はず、手豈競
走に關係なしと云はんや。
猛犬を避けんとする時、拳を固めて之に
臨めば、猛犬通る能はず、是れ拳を固める
により、全身緊張するが故なり。
劍客の氣合と云ふは、殺氣の靈化なり、
此氣合に乗すれば、鈍刀よく鉄を斷つ、理
外の理に似て然らず、技神に通ずるもの皆
然り。

結婚の式に、新婦髪を掩ふに帛を以て
す、邦俗之れを角隠しと云ふは、嫉妬を戒
む所以歟、嫉妬は角を生ず。
女子にツネの名を命するもの多し、抵ね
常の字を用ふ。或る人、鶴年の二字を以つ
て宛つ、吾れ其の才を喜ぶ。
過般日食皆既の時、歐西の天文家新星を
發見するもの二人あり、而して吾邦の理髮
師にて同發見をなすものあり痛快、由來邦
人天體に興味を有す、此點支那人の迷蒙と
同じからざること、歐西の人早く看破す、
理髮師の發見敢て異とするに足らず。
都下の新聞社の建築を見て、余朝日社を
第一に推す、輪奐の美あるが故にあらず、
屋上機關銃あるが故にあらず、屋の一端に
傳書鳩のホームあつて、群鳩常に飛翔去來
一風景を爲すが故のみ、是れ新聞にふさは
しい速報の看板也。

後藤の自面眞の...
此の書は、
...

此 一 戦

良人のシマリ屋に困らされ、良人が歿する
と反動が然らしめたか大の酒客となつて親
族を困らしたと云ふ。此婦人が大槻家の親
族であつた爲めに、森家の遺書は皆大槻家
に歸し幸ひに散佚を免かれた。今度それが
安田文庫に歸したので其書目を見ると、立
之や掖齋の貴重な書入本が少からずある。

頼山陽の微時

森立之の舊藏書目を翻閲中、フト眼に入
つたものに、玄應音義校正と云ふ二冊の寫
本に、頼山陽自筆と注してあることであつ
て、自分は不思議の感を抱いた。玄應音義
は一切經音義であるが、山陽が斯る佛書を
自寫したことがあるかと、其書物を取り出
して貰つて一覽した。乾坤二卷の内乾卷の
中ごろから坤卷全部が山陽の手寫に係ると
して、卷尾に森約之の左の識語がある。

乾卷大智度論以下此全卷皆頼山陽子成昔
在東都之日所賃書者豈可不寶藏乎

約之誌

私は靜かに翻閲して見たが、如何にも鄭
寧に正楷に寫してあるが、掖齋や森立之の
楷書に比して見劣りするやうに直感した、
若し識語を掩ふて私に正筆ですかと質すも

のがあつたとすると、私は多分否定したで
あらう。併し約之が識語を書いて居るのを
見ると、それを信する外はない。山陽は江
戸に出た書生時代に生活の爲めにこんな寫
字をやつたことが約之の識語中「備書」と
あるにても知られ。自分は之れを見て、山
陽の爲め一種の悲哀を感じざるを得なかつ
た。前年中井敬所翁珍藏の掖齋自寫の右京
遺文の中に、山陽の寫したものが三枚ある
のを認めた。此の山陽の書體は疑ふ餘地の
ないことであり、山陽が津輕屋に寄寓でも
した折、主人の寫字を手傳つたものであら
うと想像してゐたが、其頃賃書をやつたこ
とが知れて見ると、右京遺文の三枚も或は
賃書範囲のことであるかも知れない。兎に
角山陽として餘り名譽となる記念物でない
が、彼れの微時を語るものとしては誠に珍
物である。

一畫家を失ふ

此頃鬼籍に入つた畫家尾竹竹坡は自分に
多少の因縁がある。自分が郷里の新聞記者
時代に、新潟新聞社は、繪入の新聞をも發
行し、其の挿繪を擔當したものは、新潟の
染物屋の子で、尾竹國雪であつた。これは

他日伊藤公から越堂の號を受けたが、其頃
はまだ繪は未熟であつた。當時日々國雪の
辨當を持つて來たのが、弟の竹坡と國觀の
二少年であつた。此等三兄弟が後に富山縣
に移つて、自分が衆議院議員であつた折、
富山縣選出の同僚島田孝之が、自分に竹坡
國觀の二人を紹介して、此兩人は君に縁故
もあり、他日畫界に名を成す見込もあるか
ら君より學資を與へて兩人の内一人でも學
問をさせてはどうかと云ふから、自分はそ
れを諾して、兩人の内竹坡を學校へ通學さ
せることにしたが、それが遂に實行が出来
なかつた。實は無理もなかつた。彼等は既
に雜誌の挿繪を書いて多少の收入もあつた
から、それを休めて學校へ通ふなどは苦痛
であつたに相違ない。併し彼等も少しく忍
耐して一ト通り學問をする方が他日の爲め
に利益であつたと私は常に思ふた。彼等兄
弟は追々畫壇に頭角を擡げ特に人物を畫く
に長所があり、兄の越堂よりも天分もあつ
たが、惜しいかな學問の素養が無かつたの
で畫品は低級であつた。竹坡は川端玉章に
師事し、八火社と云ふを創立し、國定教科書
の挿繪を擔當したこともある。俗名を染吉
と云ふたのは家業の名を留めたのだ。享年

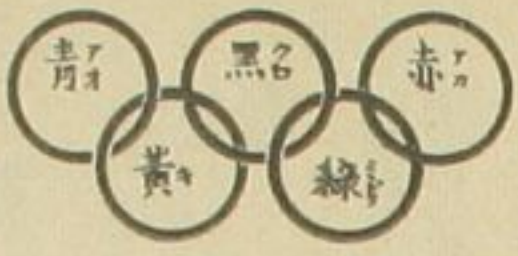
「オリンピック旗 出来たいはれと その正しい掲げ方

☆日本建國二千六百年を期して第十二回オリンピック大会が、東京で開催される事に決つたことは皆さんも御存知でせう。
☆國際電報で、東京開催が報ぜられてから、東京の街々は、電車も自動車も、デパートも、公園もあのオリンピックを表はす五輪の旗で飾られました。
☆ところが、仔細によく見てみると、五輪の色のあやしいや、旗竿のつけ方の間違つたのが、ちよいちよい眼につくやうです。
☆「けふは正しいオリンピック旗のお話を皆さんにお聞かせしませう。

五輪の色は 世界五大陸

クーベルタン男爵の創案

ベルタン男爵が考案したもので、クーベルタン男爵といふのは近代のオリンピック競技の創始者でもあるのですが、あの清楚優雅な五輪の旗を創作してくれた恩人でもあるのです。



オリンピック委員長のバイエール伯は、こんなに説明してをります。
五輪の旗、オリンピック旗は、西暦一九二二年のストックホルムの大會ではまだなかつた。その二年後の一九二四年になつて、クー

青の輪の方に 旗竿をつける 必ず間違はぬ様に

ラッセル伯の説明は以上の通りですが、ですから四年後の東京大會の始まる時に、大オリンピック旗は東京市長に手渡され神宮の大競技場の一角に懸るやうです。

そして黒がアジア大陸を表はすといふのは、誰かが考へたお伽話のたぐひなら、赤は熱を、緑は意氣を、黒は力をといつた話も、どこかの詩人が後から考へた話に通じません。

但し、この五つの色の配合で、世界中の國の國旗が出来るといふ理由は、正しい意見です。クーベルタン男爵は、このオリンピック旗を自費で五百本こしらへて一九一四年六月十四日パリで

童話

かた松島修
去年のゆかた着て見たら
桁丈短かい、ツンテンテン
スツクと長い雨の脚
マルマル太い雨の腕
父さん母さん見て下さい
今年は僕は一年生
こんなにせいがびました
てゐます。地は白地の長方形のが
正式で、細長い三角のは略式です。
ところで、これを旗竿や紐に結
びつける場合の正しい仕方は、青
色の輪のある側に竿や紐を通すこ
とです。

開かれたオリンピック委員會の席
上で公表しました。
以後、一九一五年に開かれたロ
サンヌのオリンピック會談に
も、同年のサンフランシスコの委
員會にも、この五輪の旗が議案を
飾り、正式にオリンピック旗とし
て通用するやうになりました。
最初に、オリンピック大會競技
場の空高く懸つたのは、一九二
〇年に開かれたベルギー、アント
ワープの第九回大會の時です。
そして四年後のアメリカのロサ
ンゼルスの大會の始まるときに
それまでベルギーのオリンピック
委員會で保管してゐた大オリンピック
旗が、海を渡つてロサンゼ
ルス市長に委譲され、今度のベル
リン大會の開始直前にベルリン市
長に手渡されたのです。

市電やバスについているオリンピ
ック旗のつけ方は正しいのですが
商店やデパートでは、どうかする
と赤色の輪の方に竿や紐を通して
ありますが、あれは間違ひです。
日の丸の國旗を上下につける時
は、必ず國旗の方が上で、オリン
ピック旗が下、交叉して門口に立
てる時は正面向つて右が國旗左側
がオリンピック旗が正しい掲げ方
でも、もつと詳しくいふと國旗の旗
竿の方を内側(玄關の方)にし
て交叉させるのが正當なのです。

第二十回國際オリンピック大會開催
東京市決定記念市營自動乘券
降車券
切取無効
錢拾金
局電市京東
①②③④⑤⑥⑦⑧



熊谷守一氏像 有島生馬氏筆

山の中の生活

材木流しの法
後掲一本乗り団
先を曳

熊谷守一

きのふの雷雨は東京では珍らしいほどのものだった。しかし私の郷里の雷雨は、とてもあの程度のなま優しいものではない。私の郷里は木曾の山奥で、つげち川といふ川の上流にあるのだが、そこでは、雷雨になると洋傘をさしてても布の目を透して細かい雨がドシドシ傘の中へ降り込んで来るから役に立たない。道路は忽ち七八寸くらいの深さの流れになつてトウ／＼と流れる。左右の路が交錯してゐるところなどでは、それが腰の邊くらいの高さになり、しかも激しい勢で流れてゐるので、うっかりそこへ足をふみ込むと、忽ち肩の邊まで波が押し上げて来る。

雷はいつも上と下とで鳴る。自分の立つてゐる周囲が少しだけ空間になつてゐて、その上と下とで雷がメチャ／＼に暴れ廻

つてゐる恰好だ。それがまた不思議なことに、どんなに上の方へ歩いて行つても、きつと上と下で鳴つてゐるのだ。月夜の晩に月を眺めながら歩いてゐると、月がどこまでも自分について来るやうな感じがするが、丁度あんな感じだ。

今から二十年ほど前に、私は郷里で六年ほどひょうをしてゐたことがある。ひょうといふのは、日備といふ字を書くのだが、山で切り倒した木を水の無い谷や溪流を流して本流まで運んで行く仕事をする人たちのことで、地方によつて呼び方は異ふが、木曾では一般にひょうと言つてゐる。

二三日前の朝日新聞には、ひょうが急流の落差の一丈もあるところを材木に乗つておる、といふやうなことが書いてあつ

たが、あれには少々おまけがある。材木に乗つておることが出来るのは、落差三四尺くらいまでのところで、それ以上は無理だ。然し、はたで見えてゐるとシブキがすぐく飛ぶから一聞くらいいは見えるだらう。

山から切り出した材木は、本流に出ると筏に組んで流すが、本流に出るまでは一本一本ばら／＼になつてゐるのを、そのまゝ流す。ひょうは、その中の一本に乗つて澤山の材木を流して行くのだが、中々コツがむづかしい。普通、トビグチを持つてゐて水をたゞいて調子を取る。そのトビグチは直径八九分ほどの太さの竹で出来てゐて、長さは、山だしの場合が「一たけ二節」(體の丈と竹ひとふし)溪流の場合が「一たけ二節」といふことになつてゐる。山だしといふのは、水の無い谷底を滑らせて行くことで、これが一番危険だ。時々上の方から材木が矢のやうに飛んで來ることがある。それを避けそこなつたら、たちまちお駄佛だ。



熊谷守一筆 山形市郊外風景 (チツケス繪油)

ひょうの乗る材木は普通すえくち七寸長さ二間くらいの材木で、ふだんは前から三分の二くらいの高さに立つてゐる。そして、水が瀧のやうになつて落ちてゐるところ——落差のあるところ——へさしかゝると、忽ち後方へさがつて末端に立つ。材木はあなやといふまに四十五度くらいの角度で落下するが、落下した瞬間に、またトツサに前方へかけて行つて、こんどは材木の先端近くに立つ。このところがコツで、それがうまくやれなかつたら一人前のひょうではいゝなわけだ。

無論、たまにはやりそこなつて水へ落ちることもあるが、めつたに死ぬやうなことはない。しかし困るのは真冬だ。一たん水へ落ちたら、そのまゝ材木へ乗つてゐるわけには行かないから、大急ぎで陸へ上つて火のあるところへ飛んで行くのだが、——火は、いつもで着物がみんな凍つて了つてガサ／＼ゴツ／＼音がする。何も言へない妙な音だ。

熊谷守一氏像 有馬生馬氏筆



山の中の生活

材木の流し

後掲一本採り
先を
先

熊谷守一

きのふの雷雨は東京では珍らしいほどのものだった。しかし私の郷里の雷雨は、とてもあの程度のなま優しいものではない。私の郷里は木曾の山奥で、つれづれ川といふ川の上流にあるのだが、そこでは、雷雨になると洋傘をさしていても布の目を透して細かい雨がドシドシ傘の中へ降り込んで来るから役に立たない。道路は忽ち七八寸ぐらいの深さの流れになってトウ／＼と流れる。左右の路が交錯してゐるところなどでは、それが腰の邊ぐらいの深さになり、しかも激しい勢で流れてゐるので、うっかりそこへ足をふみ込むと、忽ち肩の邊まで波が押し上げて来る。

雷はいつも上と下とで鳴る。自分の立つてゐる周囲が少しだけ空間になつてゐて、その上と下とで雷がメチャ／＼に暴れ廻つてゐる恰好だ。それがまた不思議なことに、どんなに上の方へ歩いて行つても、きつと上と下で鳴つてゐるのだ。月夜の晩に月を眺めながら歩いてゐると、月がどこまでも自分について来るやうな感じがするが、丁度あんな感じだ。

○
今から二十年ほど前に、私は郷里で六年ほどひょうをしてゐたことがある。ひょうといふのは、日備といふ字を書くのだが、山で切り倒した木を水の無い谷や溪流を流して本流まで運んで行く仕事をする人たちのことで、地方によつて呼び方は異ふが、木曾では一般にひょうと言つてゐる。

二三日前の朝日新聞には、ひょうが急流の落差の一文もあるところを材木に乗つておる、といふやうなことが書いてあつ

夜、あつたての生活に
雷大、あつたての生活に
きつと上と下で鳴る。自分の立つてゐる周囲が少しだけ空間になつてゐて、その上と下とで雷がメチャ／＼に暴れ廻つてゐる恰好だ。それがまた不思議なことに、どんなに上の方へ歩いて行つても、きつと上と下で鳴つてゐるのだ。月夜の晩に月を眺めながら歩いてゐると、月がどこまでも自分について来るやうな感じがするが、丁度あんな感じだ。

○
今から二十年ほど前に、私は郷里で六年ほどひょうをしてゐたことがある。ひょうといふのは、日備といふ字を書くのだが、山で切り倒した木を水の無い谷や溪流を流して本流まで運んで行く仕事をする人たちのことで、地方によつて呼び方は異ふが、木曾では一般にひょうと言つてゐる。

二三日前の朝日新聞には、ひょうが急流の落差の一文もあるところを材木に乗つておる、といふやうなことが書いてあつ

また、材木を流してゐる岩にぶつつかれることもある。大抵は岩に突きあたらないやうに注意するのだが、どうにも避けきれないことがある。そんな時には、材木が岩にぶつつかつた瞬間にヒヨイと空中に飛び上つて衝激を避ける。ハツと思ふ瞬間にヒヨイと飛び上るのだから中々むづかしい。材木は岩にぶつかると忽ち横に押し流されて急転回を始める。今まで後の方だったのが先きになり、先きの方だったのが後になる。だから、上に乗つてゐるひようも、向きをかへなければならぬのだが、ゆつくり廻るのでなしに、適當のところ、ヒヨイと一擧に身を翻へして向きをかへる。それが岩にぶつかつてから、ほんの目ばたきをするくらいの間にやらなければならぬ仕事なので、はたで見てゐたら、さぞかしハラ／＼することだらうと思ふ。

○
上手なひようになると、のんきに歌などをうたひながら材木を流して行くが、下手なになると、一生懸命に體を動かしてゐて休む暇が無い。だから親方は、ひようが遊んでゐるとき一番ニコ／＼してゐて、ひようが一心に働いてゐるとニガイ顔をしてゐる。

ひようたちは、大抵二三十人くらい一組みになつて山の小屋に生活してゐるが、夜になるといろ／＼面白い話が出る。山

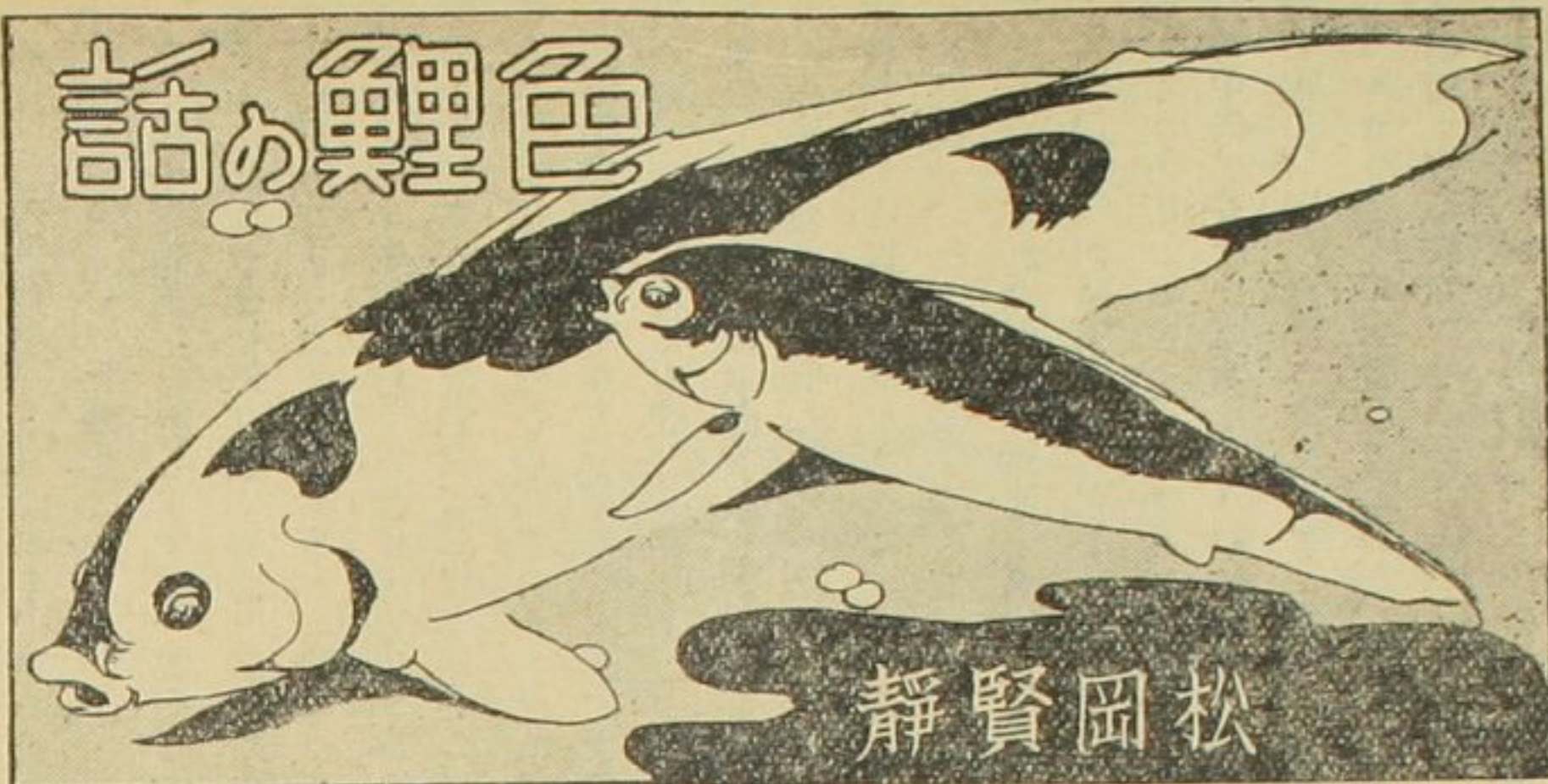
のことだから獸の話などは殊によく出るが、ひようたちは、一般に「山の神のころ」といふ獸を非常に恐がつてゐる。誰れも見たことは無いのだが、見たら目がつぶれると信じてゐる。ところが、私のゐた小屋に、「山の神のころ」の毛皮だと稱する變な毛皮を持つてゐる男がゐた。その男は、それを自分のおやぢから貰つたのださうだが、そのおやぢといふのが非常な變りもので、結婚したとき、小屋を作るのにわざわざ三りんぼうの日を擇んで作つたといふやうな男だつたので、みんなも、あの男が持つてゐたのだからなあ、と言つて、その變な毛皮を山の神のころの皮だとほんとうに信じてゐた。私も見たがモルモットの皮みたいのものだつた。

とにかく、都會ではちよつと想像もつかないやうな話しが山の中には随分あるが、そのうちにまた、をりがあつたら何か書くことにしよう。(七月二十日)

* * * * *
熊谷守一氏はわが國洋畫壇の元老で、二科會の指導者の一人です。中川一政氏は先日こんなことを言つてゐました『現代フランスの一流の大家たちの間に伍してヒケをとらない人を探したら、日本ではまあ熊谷さんあたりだらう』と。熊谷さんは専門家の間で非常に敬愛されてゐる典型的な畫人です。



山の神のころ、ひようの間に居る者が、
山に突かぬやうに注意するのだが、どうにも避けきれないことがある。そんな時には、材木が岩にぶつつかつた瞬間にヒヨイと空中に飛び上つて衝激を避ける。ハツと思ふ瞬間にヒヨイと飛び上るのだから中々むづかしい。材木は岩にぶつかると忽ち横に押し流されて急転回を始める。今まで後の方だったのが先きになり、先きの方だったのが後になる。だから、上に乗つてゐるひようも、向きをかへなければならぬのだが、ゆつくり廻るのでなしに、適當のところ、ヒヨイと一擧に身を翻へして向きをかへる。それが岩にぶつかつてから、ほんの目ばたきをするくらいの間にやらなければならぬ仕事なので、はたで見てゐたら、さぞかしハラ／＼することだらうと思ふ。



松岡賢静氏は、隠れた鯉の研究家として、二十餘年間文字通り、鯉に苦勞し、鯉にやつれて来た人。しかし、先年氏が日本愛鯉協會を設立し、廣く愛鯉家、愛鯉家に呼び掛くるに及んで、氏の存在は急に大きくクローズ・アップさるゝに至つた。

しかも、郷土山古志の色鯉は世界一の逸品であるといは説かれる。……盛夏の涼しい讀物として、此處には過般愛山から放送された「鯉の話」を載せていた。……大第であるが、詳しくは氏の浮ヶ原の研究所を訪れて貰ひたい。喜んで話して下さる筈である。

凡そ日本人ほど鯉を愛し喜ぶ國民は他に類例を見ないのであります。

東洋思想では古くから鯉を一種神秘的な存在で、もあるかの様に想はれてさへ居るのであります。よく年古りたる鯉は神通力を持ち其の池を支配するとか、瀧を登り切つた鯉は龍神となるとか、人が鯉に生れ變つて池水を泳ぎ廻つたとか、又人の口に入った鯉は佛果を得て人間界に生れ出るとか、其の他幾多の傳説秘話が残されて居りますが、之は察する所、鯉のあの悠々然たる態度や常に仲よく群

棲して居るあの平和な姿、更に俎に乗せられた際の落着き拂つたまるで古武士のやうな度胸、或は計り知れない活動力や機敏さ、永い「生命力」など、一つとして私共の憧れでないものはない所に據るものであります。

古來鯉をもつて魚族の王座に推してゐるのも詢に最もことゝ信ずるのであります。以下漫談的に少しく鯉に就いてお話し上げて見たいと存じます。

端午の節句に鯉の吹流しを飾るのは、鯉は出世魚であるとして祝つたもので、鯉は昔から勢のよい男性的な魚として尊重されて居ります。あの悠々水中を泳ぐ雄大な姿も、一度活動に移れば、其の潑刺として元氣のよいこと、俗に一走り八間といふほどで、鯉ほど活動力の旺んな魚はまづありません。崑崙に源を發した支那の黄河の上流に、龍門と云ふ瀧が御座います。春になると色々な魚が登つて來ますが、何にしろ百雷一時に落ちると云ふ物凄い急流で、これを上り切つては出來ませんが、鯉だけは上り切つて龍神となると云ふので、鯉の瀧登りとか、出世魚とか云ふのは此の邊から出たものでせう。

江つて仕方がない。まことに歩行にも困難と云ふ所。さて此地方は蒲原地方の古い養魚が次第に移動したもので、古くから鬮牛と溜池利用の養鯉とを唯一無二の娛樂としてゐましたが、遠く元和年間色鯉の出現を見其の後文化文政を経て元祿天保とだん／＼紅紗や三色鯉が現れて益々興味がそゝられ、明治初頭には既に相當の物が生産致しましたが、投機事業なりとの故で縣の禁止命令に遇ひ、一頓座をなし、明治三十年再び許され、やがて東京に進出して大隈侯邸外貴紳に養はれ、一躍名聲が天下に響き、大正博には銀牌、全國特産展にも入賞、二回迄も長くもやんことなきあたり御嘉納と洩れ承り破格の光榮を擔ふ。各宮家にも御獻納申上げ、其の後宮内官外交界關係者や諸名士の現地視察となり尾崎博堂翁の如きは、

「鯉の色鬮ふ牛のわざよりも我はめでけり 蟲龜の秋」

と云ふ一句を残して居られます。かつては宮内省經由で米國大統領にも國産花鯉(フラーワーカールプ)の名稱で贈呈いたし、異常なセンセーションを興へて居りますが、其の後も新珍種が續々として出現致して居ります。

特徴としては色彩が鮮麗で雄大なものが多く、幾多の系統が幾十種の類別を生じてゐますが、總じて高雅優美で清楚な感が致します。性極めて馴れやすく殊に犯し難い氣品さへもつて居りまして、全く美の極致で其の色彩系統は、緋白鯉系では紅白、地三色、鼈甲。黒鯉系では黒三色、黄斑、白斑、淺黄、などが主で更に金銀鱗さへ浮んで居りまして、其の出現の状態によつては金櫻、銀櫻、金銀小ダレ「金銀棒」これは一名阿部鯉とも申しますが、曾て縣水産技師であつた阿部圭氏の功績を記念して付けたもので義理に厚い郷人の面影を偲ぶに足ります。

土地の愛鯉家は由緒正しい親物逸品には、黄金山、谷之雪、初櫻、伊達娘、牡丹、美濃柿、等それ／＼に雅名を付けてよるこんで居ります。

郷人の鯉に愛着を持つ事は想像以上で、各自皆家の周圍に二三坪の池を造り冬季これに集めて家族として共同生活をして居ります。特に優秀品の育成新珍種の創作に當つては名工が一箇の藝術品にも對する様な眞摯な態度が目撃されるのであります。強ひて申せ

ば尙多少の改善の餘地を認めないでもないですが、更に一般の研鑽を経て進展され販路の普及にも考慮が屆き折角の逸品も一部階級の觀賞裡に終らず、大衆の爲に廣く東京其の他の名所や公園泉水にも放たれて、日本独自の誇りとして海外人にも紹介宣揚の時機の一時期も早からん事を切望する次第であります。

次に御參考迄に觀賞鯉の見分け方に觸れて見ますと第一に正しい紡錘形で四技ともよく發達し、而かも色彩鮮明で左右對象の斑でなければいけません。之は金魚も同じであります。而しどんな優良品も飼ひ方が悪いと臺なして折角の愛鯉も短命に終つてしまひます。

想ふに近代生活の複雑化は趣味の方面にも現はれて、或は南米其の他から熱帯魚や珍魚も續々と輸入されまして、從來幼稚と云はれた我がベツト趣味向上からも喜ばしいことに存じます。更に我が日本獨特の誇りである天然自然の幽邃なる泉水に世界に並びない美事な鯉を入れてあの潑刺たる躍動を鑑賞し、愛することは、國粹保存と特産物紹介の意味からも、我國民性の陶冶の上からも躍進の聖代にふさはしい事と存じます。

私は昨秋、越後竹澤で三尾十五貫と云ふ揃つた賣物を見てびつくりいたしました。此の間櫻草で名高い浮間ヶ原の私の研究所の下手で、四貫目近いものが網に引かゝつてゐます。しかし普通は雄で七八百匁、雌で一貫目前後が先づ大きいもの標準で御座いませう。



ます。日本でも利根川などには上流に養魚場もあり、澤山鯉がゐる中には大物も居ります。電ヶ浦からは六七貫で四五尺もあるものが時時姿を現すさうです。信洲の諏訪湖からは十二貫と云ふ超特級のものも上つて湖畔に神に祭られてゐます。帝大構内の池から上つた鯉も相當なものです。小石川植物園や宮城のお嬢にも三貫目以上のものが見受けられます。これは皆様も御存じの事と存じます。

金魚は御承知のやうに鮎から變化したもので、野鮎が耕鮎となり耕鮎が金魚になり、たま／＼日本に渡つて改良されて目覺しい發達をしたもので、三十種にも近い立派なものが外國に先んじて出来て居ます。鯉も金魚と同じやうに黒鯉や黄鯉から色々と變化したもので、紅白更紗や三色の變り鯉も次第に出現したものであります。勿論金魚に較べますと年限の關係や其他難かしい事情がありまして發達も遅れて居ります。

而し金魚だと金魚そのものを觀賞しても、野鮎を今頃愛玩する者はまづ御座いますまいが、鯉は原始的な鯉を池へ放つても觀賞價は充分あり、幽邃な水園泉池は雄大豪快な、鯉の活動によつて動的要素があたへられ、眞の美的感興が生れると申しても宜しいと存じます。黒でさへ然り、金魚の色彩にも劣らない素晴らしい鯉や、金の鱗や銀の光を放つお伽噺にでも出るやうな素晴らしいものが、日本にのみ産するとは誠に驚くべきことでないでせうか。

昔、近江の大湖、つまり琵琶湖に金鱗の鯉がゐる夜になると美少年に化けて往來の婦女子を誘惑したと云ふ傳説がありますが、馬鹿

／＼と思はれたら大間違ひ、私はすでに數十尾の實物を見てゐます。三越本店の屋上にも一尾の銀鱗の鯉が居ります。

すべて淡水魚は、自體の保護にその色が頗る單純で、僅かに黒と黄の二つの基本色素しかありません。此の點は海の魚と違つてゐます。イワナ、ヤマメ、ハヤ、アユ、カバチホ等皆然りで、單に黒色素が多分に含まれた時は黒色、黄の色素が多く集まると耕鯉、兩色素の缺如は白鯉系となります。

其の外、今一つピカ／＼光る紅胞がありま

す。これはグアニン結晶體から出来たものでそれが表面に浮ぶと赤地には金色、白地には銀色となつて現はれます。これら色彩斑紋や光澤鱗の出現は自然的にも、人為的にも長年月復合交配を繰り返す中に現在のやうな千差萬態の色彩鯉が出来たわけで、これらは又、魚體の新陳代謝や環境の如何によつて複雑多岐にわたる變異を起すもので、その結果として、中にはメンデルをも超越した奇蹟的な出現さへありまして、そこに養魚家の苦心と興味が生じて來るのであります。

扱て、現在鯉の代表産地としては食用眞鯉では群馬長野を中心とし、信州櫻井、野澤は養魚術も仲々進歩し、稻田養鯉と云つて稻田

はつて仕方がない。まことに歩行にも困難と云ふ所。さて此地方は浦原地方の古い養魚が次第に移動したもので、古くから闘牛と溜池利用の養鯉とを唯一無二の娛樂としてゐましたが、遠く元和年間色鯉の出現を見其の後文化文政を経て元祿天保とだん／＼紅紗や三色鯉が現れて益々興味がそゝられ、明治初頭には既に相當の物が生産致しましたが、投機事業なりとの故で縣の禁止命令に遇ひ、一頓座をなし、明治三十年再び許され、やがて東京に進出して大隈侯邸外貴紳に養はれ、一躍名聲が天下に響き、大正博には銀牌、全國特産展にも入賞、二回迄も畏くもやんごとなきあたり御嘉納と洩れ承り破格の光榮を擔ふ。各宮家にも御獻納申上げ、其の後宮内官外交界關係者や諸名士の現地視察となり尾崎博堂翁の如きは、

『鯉の色闘ふ牛のわざよりも我はめでけり 蟲龜の秋』

と云ふ一句を残して居られます。かつては宮内省經由で米國大統領にも國産花鯉(フラーカープ)の名稱で贈呈いたし、異常なセンセーションを興へて居りますが、其の後も新珍種が續々として出現致して居ります。

特徴としては色彩が鮮麗で雄大なものが多く、幾多の系統が幾十種の類別を生じてゐますが、總じて高雅優美で清楚な感が致します。性極めて馴れやすく殊に犯し難い氣品さへもつて居りまして、全く美の極致で其の色彩系統は、耕白鯉系では紅白、地三色、藍甲。黒鯉系では黒三色、黄斑、白斑、淺黄、などが主で更に金銀鱗さへ浮んで居りまして、其の出現の状態によつては金櫻、銀櫻、金銀小ヌダレ『金銀棒』これは一名阿部鯉とも申しますが、曾て縣水産技師であつた阿部圭氏の功績を記念して付けたもので義理に厚い郷人の面影を偲ぶに足りります。

土地の愛鯉家は由緒正しい親物逸品には、黄金山、谷之雪、初櫻、伊達娘、牡丹、美濃柿、等それ／＼に雅名を付けてよるこんで居ります。

郷人の鯉に愛着を持つ事は想像以上で、各自皆家の周圍に二三坪の池渠を造り冬季これに集めて家族として共同生活をして居ります。特に優秀品の育成新珍種の創作に當つては名工が一箇の藝術品にも對する様な眞摯な態度が目撃されるのであります。強ひて申せ

ば尙多少の改善の餘地を認めないでもないですが、更に一般の研鑽を経て進展され販路の普及にも考慮が屆き折角の逸品も一部階級の觀賞裡に終らず、大衆の爲に廣く東京其の他の名所や公園泉水にも放たれて、日本独自の誇りとして海外人にも紹介宣揚の時機の一時も早からん事を切望する次第であります。

次に御參考迄に觀賞鯉の見分け方に觸れて見ますと第一に正しい紡錘形で四技ともよく發達し、而かも色彩鮮明で左右對象の斑でなければいけません。之は金魚も同じであります。而しどんな優良品も飼ひ方が悪いと豪なして折角の愛鯉も短命に終つてしまひます。

想ふに近代生活の複雑化は趣味の方面にも現はれて、或は南米其の他から熱帯魚や珍魚も續々と輸入されまして、従來幼稚と云はれた我がベツト趣味向上からも喜ばしいことに存じますが、更に我が日本獨特の誇りである天然自然の幽邃なる泉水に世界に並びない美事な鯉を入れてあの發潮たる躍動を鑑賞し、愛することは、國粹保存と特産物紹介の意味からも、我國民性の陶冶の上からも躍進の聖代にふさはしい事と存じます。

煙管の出来るまで

煙管にはいろいろの形がある。形はもと、個人の好みから出るのであるが、
 其れが一般に採用されると、いつしか一定の形となる。形がきまると、其れに
 外つれたものは、人に異様の感を抱かせる。煙管も、持手の人柄や使ひ向によ
 つて種々の形を生んだが、其れに就ては後の機會に譲ることとし、こゝには煙
 管が如何にして作られるか、其製作の順序を圖解し、好事家の參考に供した
 と思ふ。圖は、普通用ひられる石州張煙管を例にとる。

一、へり切り 金、銀、四分一、真鍮其他何なりと好みので金を、好
 みの型（こゝでは石州張）に當て、へりを切る。型は
 薄鐵板で拵へてあり、煙管工の身上である。

二、しまり へりを切りたるものを、金槌で叩きながら、しをり拗
 める。

三、まめる しをつたものを丸める。

四、繼吹き 丸めた合せ目を續けける。

五、首きめ 雁首の火皿の付く部分を首かぎにて起して、火皿の架
 るやう手工する。

六、上、火皿の切上げ 地金を適當の大きに丸く切る。

下、火皿の接上げ 丸く切取りたるものを、楕形に回める皿技輪に當て、
 同型の矢にて打込みつゝ好みの火皿を作る。

七、皿付け 雁首に火皿を續けける。

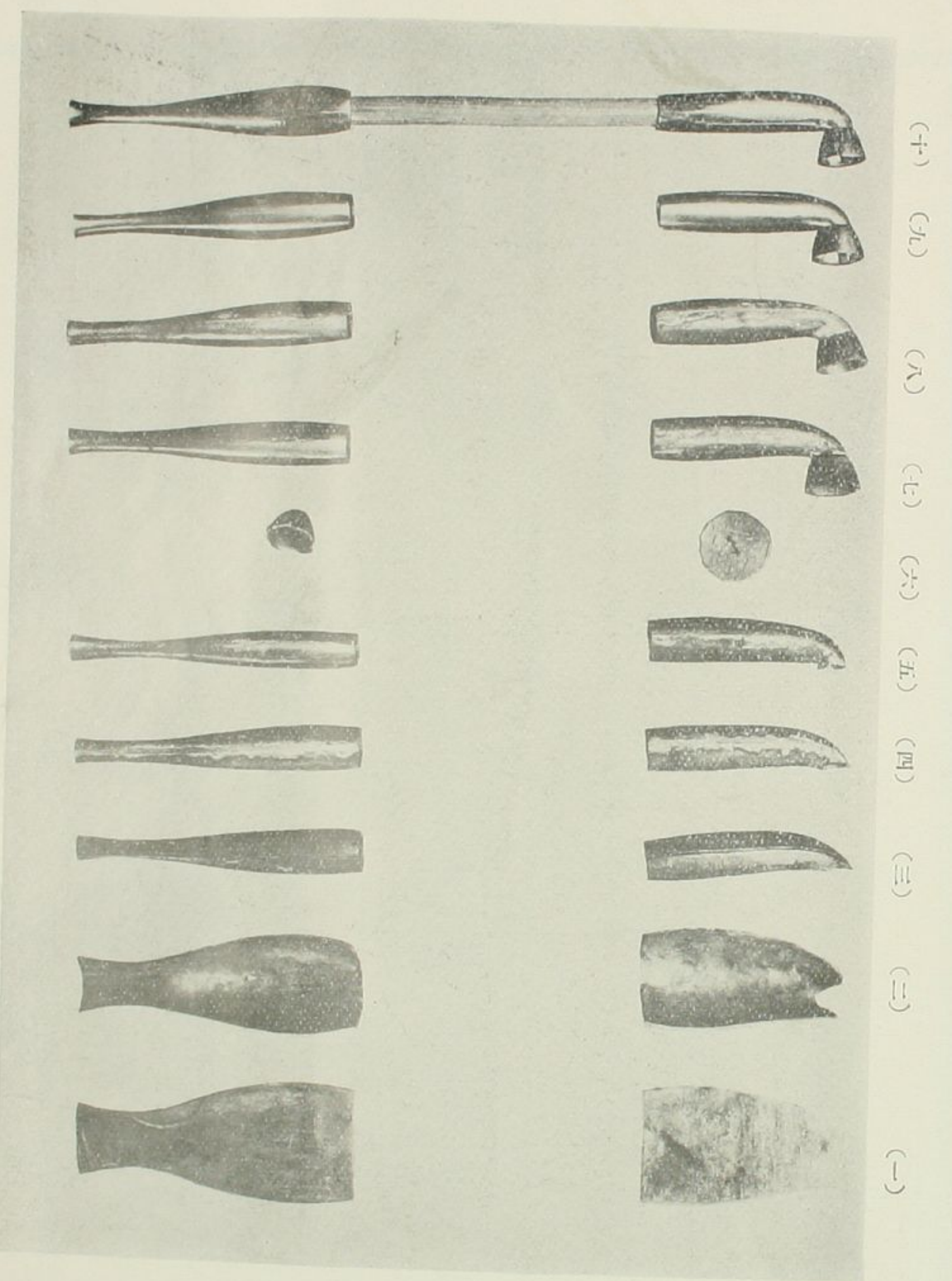
八、榎上げ 金槌にて各部分の凸曲拵を直し、形を整へる。

九、仕上げ 金で磨り、きしやげ庖丁で削り仕上げする。延べはこれ
 で出来上り。

十、羅字すけ 羅字をすけて出来上り

以上工程は簡單なるも、何れも手練習熟を要する手際ものである。因に、煙
 管工の至難とする所は、火皿の付け際にある。其手際の巧拙が煙管一本の全價
 値を決定する。（鐵目を現はす爲め煙管を裏向に寫す）

古堀榮



儀 葬 の 豪 文



式別告)るせ眠永てい於にワクスモ日八十月六る去
骸遺のイキリーゴ(るづ出を館會合組働勞・場會
(左同)フトロモと(右てつ向)ンリータスはぐ擔を棺

三燈所載

宮森麻太郎教授の

「英譯古今名歌集」を評す



明治學院教授 鷺山第三郎

宮森教授は我國英文學界の特異の存在である。英文學者といへば、英米文學を日本に紹介するをその本務とするのが通例であるが、教授はその豊富な語學と平明流麗な英文とをもつて日本文學の英譯紹介に精進して居られる。是がそもそも教授の特異なる存在の所以である。

さきに「英譯近松傑作集」をロンドンのキーガン・パウエル社から出版されて、あの大近松の彩藻ゆたかな淨瑠璃、我國徳川時代の劇文學——を始めて海外に紹介されたことは、まだ吾々の記憶に新らしい。之について一般讀書子の眼を眩らしめたのは、昭和八に丸善から壯麗浩翰なる「英譯古今俳句集」を出版されたことであつた。此の一書に傾倒された教授の勢力、力量、熱

意は眞に驚くべきものがあつた。俳句は果して外國語に譯しうるか、あの幽玄な「寂」は日本語に獨特のもので、表面的には譯しえても、とても俳諧の境地は移植しえなからうといふのが一般の意見であつた。處が宮森教授は敢然と之をやつてのけた。そして之に對する海外の反響は實に甚大であり、歐米の新聞雜誌は單に教授の英語とその表現法とに絶大なる讚辭を呈した計りではない、今更の如く日本詩歌の精華に驚嘆したと告白したものである。俳諧の紹介といふ難事業は宮森教授の如き堅忍不拔の意志と卓越した才能の士あつて始めて行はれるものであつた。かくして難攻不落と思はれた城砦の一角は崩された。今後の我國文學の彼地への流動は比較的に樂にならう。

處が教授の使命感はそれで終らなかつた。其の後滿三ヶ年を閉せぬうちに、今回の「英譯古今和歌集」上下二卷八〇〇頁が繼續せる努力精進の成果として、同じ丸善から現はれた。編裝幀の上質紙菊判に我國神代からこの昭和聖代までのあらゆる歌人の名吟約一千題を、歌人の短傳、註とも一切を英文で盛り上げたものである。自分は之が机上にもたらされた時、先づその外觀の美しさと、中に收められた、探幽、常信、蕪村、文晁、玉堂、大觀、觀彥、關雪、その他數多き畫壇の巨匠の手になつた原色版の挿畫の見事さにつくづくと見惚れた。そして自然鑑賞文學の粹粹たる和歌を紹介する此の本に、同じ自然鑑賞に立つ日本畫——清爽な山水花鳥の繪——をかくまで丹念に用意深く收められた著者の心遣りに多大の敬意を表した。

あてもなく開いた頁には土岐善麿君の大鐘の歌があつた。「大鐘のまひるのひとき松にこもり、さくらにこもりひろがりゆく」上野寛永寺邊の春の述懐でないかと思ふ。それがかう譯されてゐる。

The sound of the great temple bell

Booming at midd

Lodges in cherry-l
and then spread

Bell ヲシクハ

響ル Knell ヲ

不統ニシテ

スル Booming ヲ

「疾」ヲ

響ル 響

Lodges in cherry-bloom

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

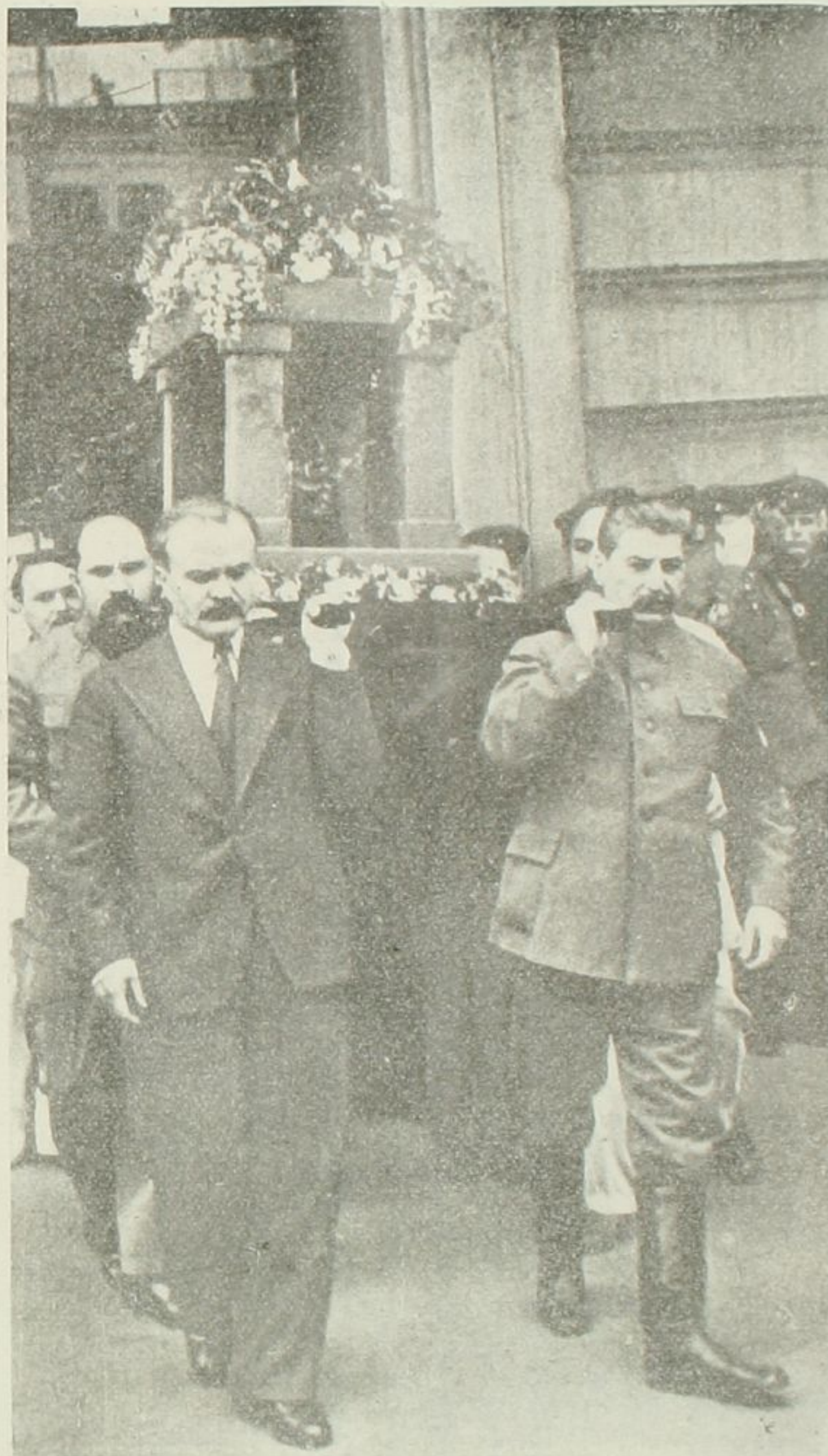
ハ、

My thoughts are

which travels

(9)

儀 葬 の 豪 文



式別告) るせ眠永てい於にワクスモ日八十月六る去
。骸遺のイキリーゴ (るづ出を館會合組働勞・場會
(左同)フトロモと(右てつ向)ンリータスはぐ擔を棺

東京

Booming at midday,
Lodges in cherry-bloom and pine
and then spread far away.

英語で Bell といへば Knell と想ひ出す。處が Knell では梵鐘の鐘々と、その大きさが浮んで来ない。そこで Sound とし、ついで Booming と謂ひたものであらう。「松にこもり、さくらにこもり」といふ原歌の時間的表現の絶妙なもそのまゝに lodges in cherry-bloom and pine とやつて、ちよびに and then spreads far away とうけてゐるあたり、原歌の表現法が極めて巧みに英語にうつされてゐる。

ゆくりなく第一巻をひらくと、普通に人麿の歌として傳へられる「明石の浦」があつた。「ほのほのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞおもふ」之は謂ふまでもなく霧たち罩めた朝の明石の浦の畫出である。マアナアヤコンステイブルの畫題にもなりさうな風景である。それだけに此の歌は既に二三外人の譯によつて海外に紹介されてゐる。

My thoughts are with a boat
which travels island-hid

In the morning mist
Of the shore of Akashi—
Dim, dim.

これはウェーリーの譯であるが、一讀原歌の感じと餘りに甚しい距りある事を感じる。之を讀んで、ほのほのと明けゆく明石の浦を想像しうるものは恐らく一人もなからう。それは何故かといふに、譯法が根本的に誤つてゐるからである。明石の浦が主題ではなくて悲しくも my thoughts が主題になつてゐる。「私の戀しい人が今朝明石の浦の朝霧の中を舟出して行つた。舟は島にかくれてしまつたが私は舟をたち去り兼ねてゐた。」といふ人間中心の歌になつて明石の浦は從屬的位置になつてゐる。自然は人の中に見失はれてしまつたのだ。之では折角の名吟の英譯にはならぬ。チャム・バレインはと見ると、

With roseate hues that piece th' autumnal haze
The spreading dawn lights up Akashi's shore;
But the fair ship alas! is seen no more—

An island reils it from my loving gaze.

かうなつて前のよりは遙かに明石の浦の景が展開してゐる。歌本来の面目が見出されたからである。しかし三行目の But the fair ship alas! といふのは強すぎはしないか。之ではまだ原始的な奈良朝頃の漁舟や小舟ではなくて、均整のとれたバアカンタイン風の帆船か、スタイリッシュな汽船が思ひうかぶ。そして眺望の中心が船にあつたため、これが消えると共に浦全體の結構もなくなつたかのやうである。さうではない原歌の舟は明石の浦の「風景であり、朝風の「静」中のたつた一つの「動」たるにすぎない。だからやはり宮森教授の譯

Day has dawned rosy on Akashi Bay,
Where through the mists behind
the isle
A boat slowly sailed away
And left me pondering o'er its course
awhile.

は、やはり正確忠實な譯であると思ふ。之では原歌の儘の明石の浦がそつくり浮び出てゐる舟は「風景として」而も靜かに島にか

くれしゆへ。A boat slowly sailed away
 とはそれだ。そしてその舟の「動」が眺め
 てゐる人の心に繼續すればこそ、浦の静寂
 はますます「あまやか」なものである。And left
 me pondering.....は「まよひ」にそれにあたる。
 この原歌の名吟たる所以は、この「動」と
 「静」との交錯調にあるのであるが、宮森
 教授はこれをさながらに英語に移し植ゑら
 れた。その腕前は實に天下随一である。

今一つ教授の譯が吾々に裨益するところ
 は、譯それ自身が原歌の意を、より明確に傳
 へてゐることである。之は一見矛盾の沙汰
 と思はれるかも知れないが、事實は之を證
 明する。一八二頁の僧正遍昭の「天津風の」
 歌であるが、自分は寡聞であつたため、こ
 の英譯を讀んで初めてこの歌の眞意に觸れ
 えたことを告白せねばならない。「あまつ
 風雲のかよひ路ふきとぢよをとめの姿しほ
 しとよめん」と日本語でよんでみた時は「暫
 く風よ吹きやんでくれ、雲の一角に乙女の
 姿が見える、吹きさらふには餘りに惜しい
 ではないか」之位に解釋して何の疑ひもも
 たなかつたのである。處が英譯によると、
 自分の豫想とは全然別な趣である。

Oh, winds of heaven, blow the clouds
 And block the fairy maidens' way;
 For I would have their graceful
 forms
 A little longer stay.

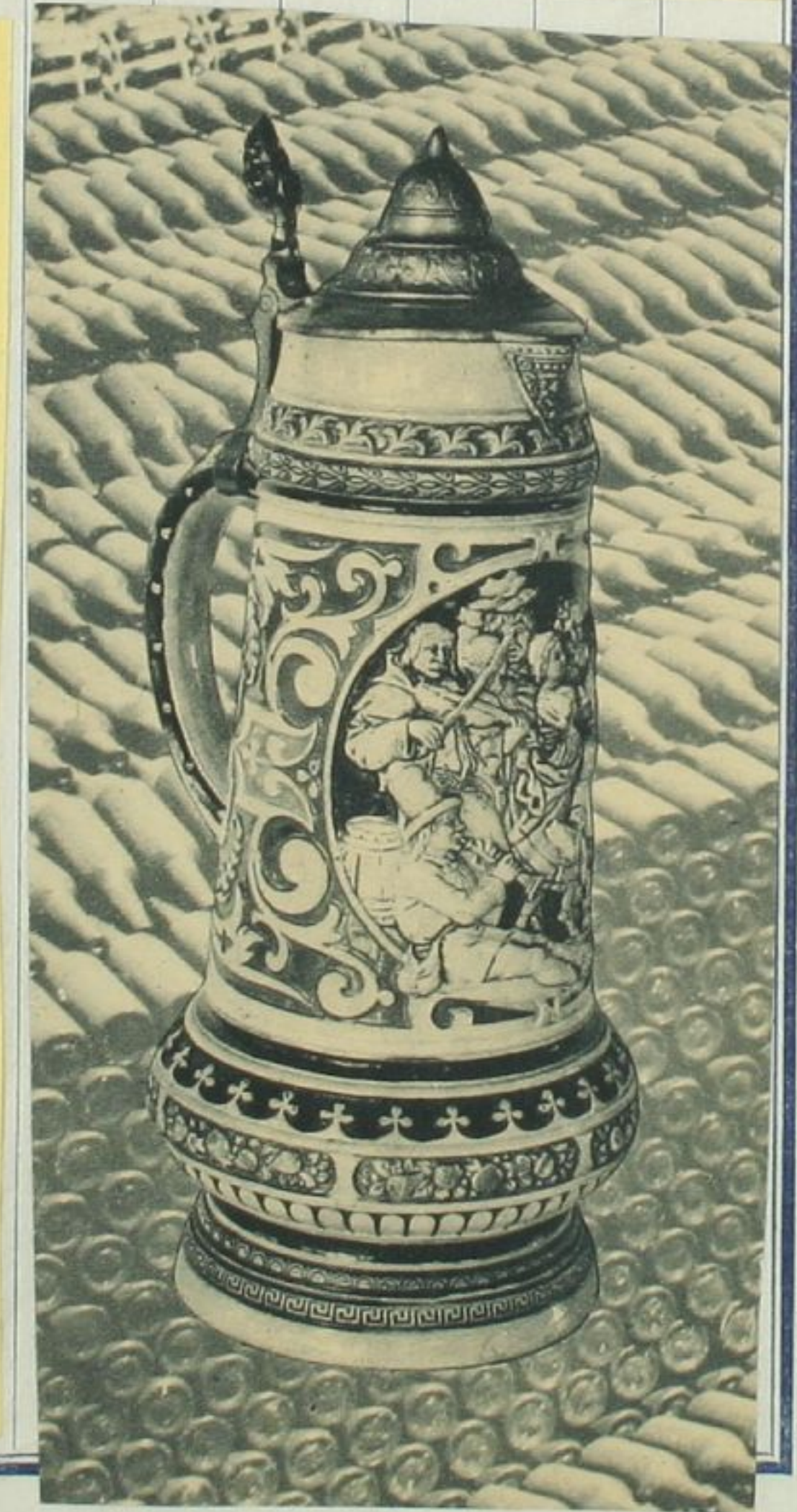
「天女に似たる舞姫は、あるひは雲の通路
 を通つて昇天するかも知れない。風よ吹
 け、吹いてその通路をふせいでくれ、私は
 今しばらく節會の舞姫のきよらかな姿をな
 がめてみたいのだ」といふ如何にも美し
 い、高雅な歌であつた。乙女の姿は天にあ
 つたのではない地上にあつたのだ。之は妙
 くとも自分には新しい發見であつた。
 以上のごとき美點長所は全卷の到るところ
 に輝いてゐる。いづれにしても宮森教授
 の短歌に對する批評眼には驚くべきものが
 あり、それが骨子となつて居ればこそ英語
 への移植が異常なる成功を収めえたもので
 ある。此の書によつて日本詩歌の深さ美し
 さが、愈々海外に宣傳されることは確かで
 ある。外務省、國際文化協會、觀光局等が
 近頃盛んに日本文化の紹介に努力してゐる
 やうであるが、今回の書物の如きを先以て
 歐米の心ある人々の手に提供して、日本は

決して單なるミリタリズムや模倣工業の國
 ではない三千年のこの歴史の中にはかやう
 な繊細な情感の動き、かやうな美的鑑賞眼
 があつたといふ事を紹介せねばならない。
 高松宮殿下を始め奉り、財團法人啓明會
 その他が教授の此回の壯舉に對し多大に援
 助を寄せられたと承るが、之は單に宮森麻
 太郎教授一個人のみならず、我國英語英文
 學界全般の以て榮譽とすべき一事實であ
 る。自分は従來滅多に他人の著書の月旦は
 しない。乞はれてもしなかつた。然し、今
 回の宮森教授の「英譯古今和歌集」に對
 してだけは、寧ろ進んで本稿を起した。敢
 て江湖に推薦し、此の名實共なる學界の豪
 華版出來の歡びを俱にしたいたためであつ
 た。〔價拾圓〕

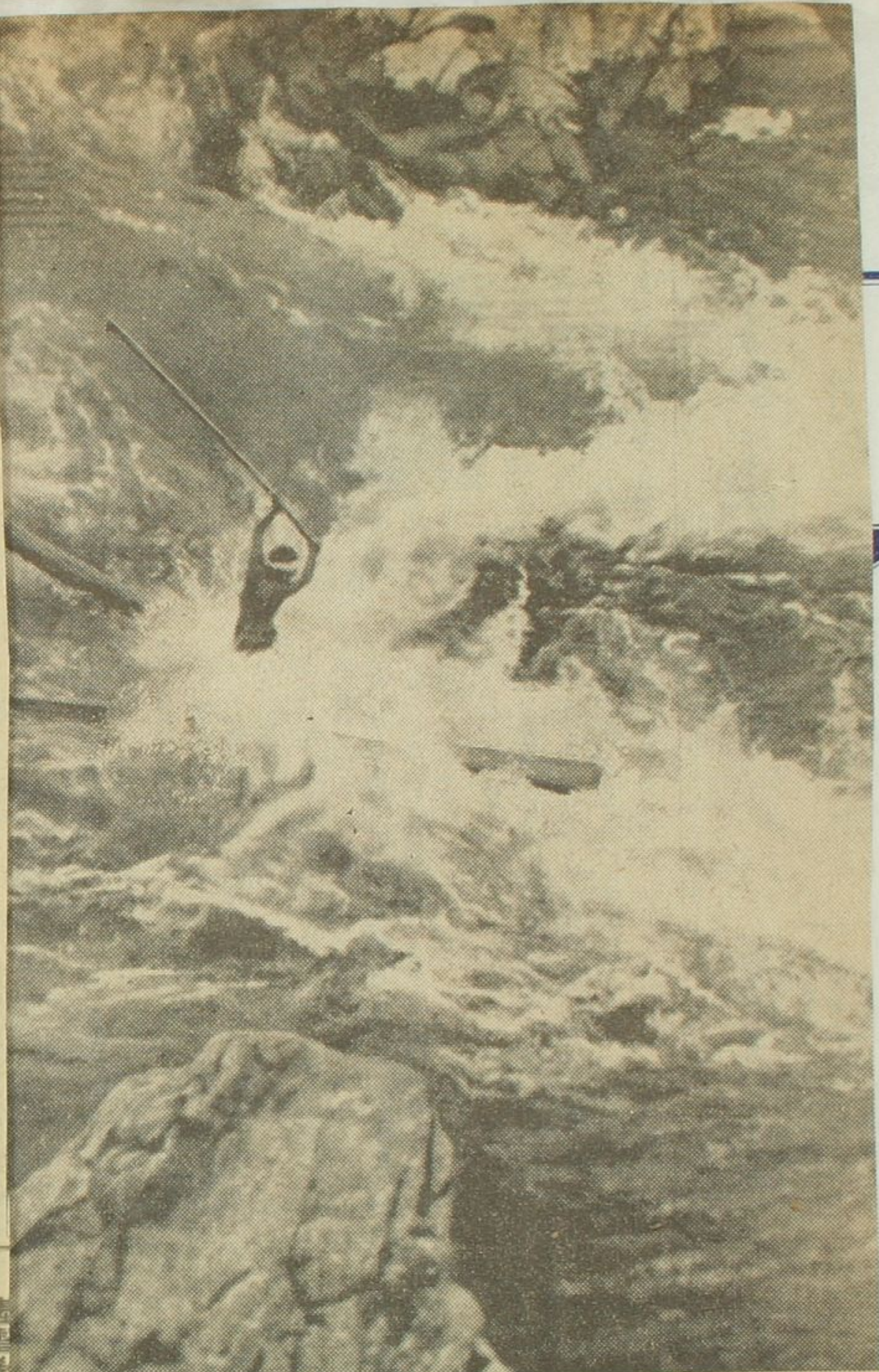
人アニロビる居でん飲を酒麥



(年百五千三前元紀)



板石のプラネつ持を杯



ラ伯もいまや懸命

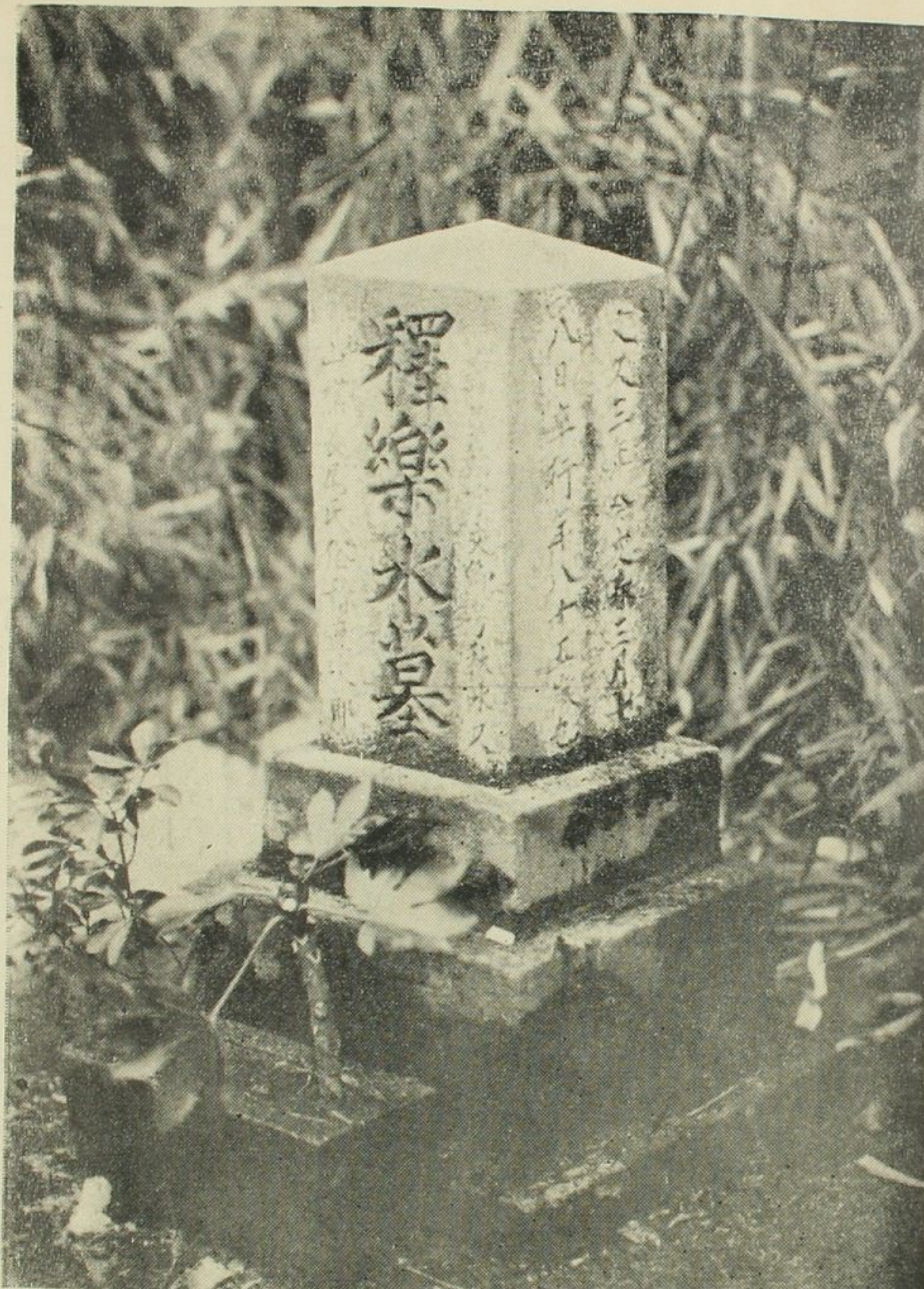
去春、吾等知會から
ヘルリンへ應援軍
▽女軍も混へた文部省奨励會の
オリムピック優勝者七十名はさき
にわが選手隊のたごりかへ

り乗本一花の氣意



奔流の中の男一
四！阿波のく
に那賀川の「一
本乗り」こそ東
日本の讀者諸君
にぜひ一度はお
見せたい水邊
の戦慄です、

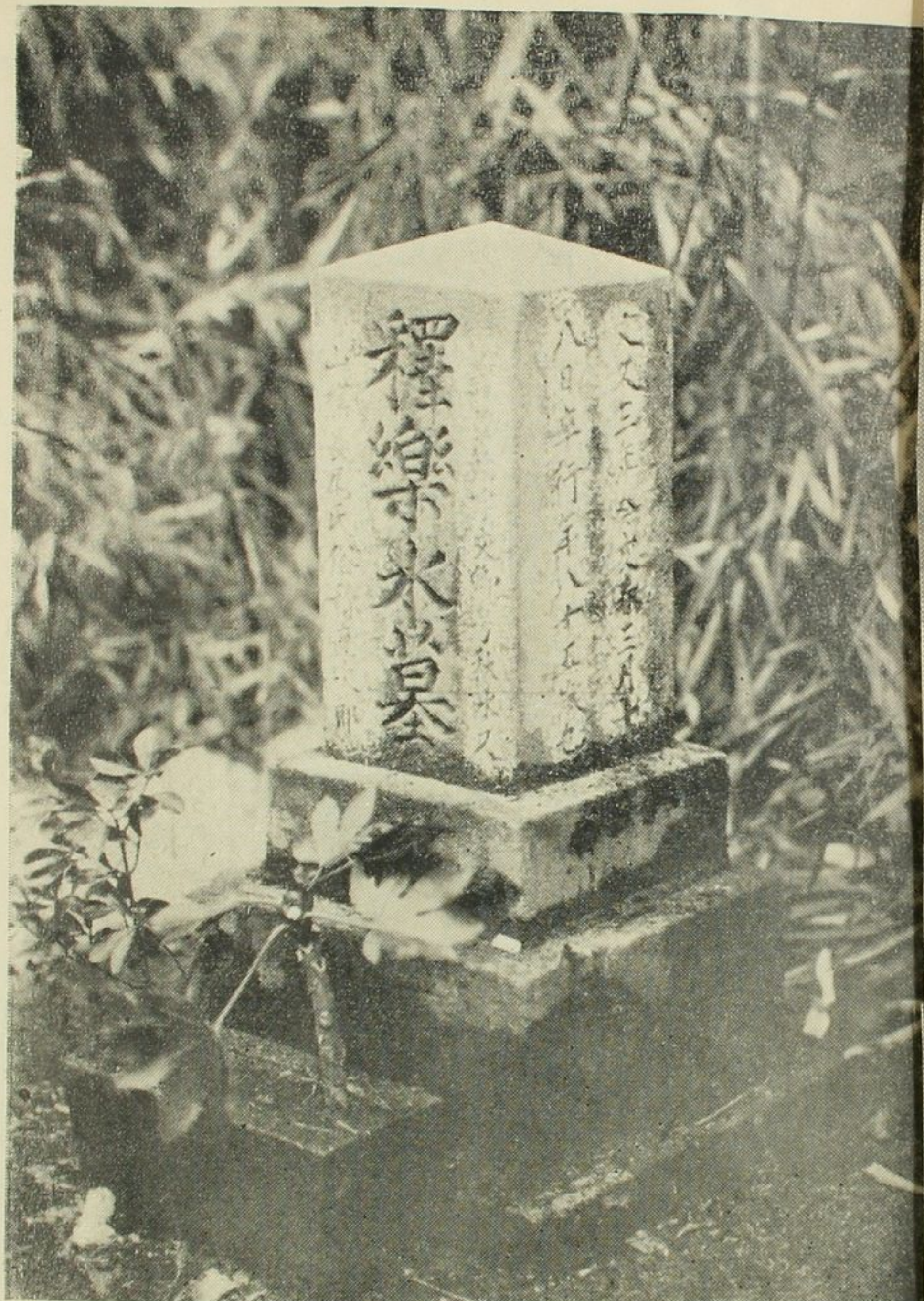
巖十里岩をかき水流は矢の如く、白い水しぶきの花を咲かせるなかを、杉の一本丸太をあやつりつゝ、砲丸のやうに馳せ下る鳥の衆、直徑一尺五六寸、山から伐り出したばかりの二間もの丸太の上で、長い篙一本を命の棒に、ひとつ平均運動の足踏みを誤れば、身體は岩に碎けて木ッ葉微塵とならうといふ危ない懸當、勿論落差一丈もある激流の淵をのり切る時には、丸太は立になり、身體は放り出されてしまふ、しかし放り出された瞬間またもとの自分の材木にちゃんと乗つかつてゐるといふふかごとな



「高志路」七月號所載

(照參事記氏原栗) 墓墳翁水秋尾長 寺成町田吉郡原蒲西

「高志路」七月新所載



(照參事記氏原栗) 墓墳翁水秋尾長 寺成町田吉郡原蒲西



り乗本一花の氣意

蝦十里岩をかむ水流は矢の如く、白い水しぶきの花を咲かせるなかを、杉の一本丸太をあやつりつ、弾丸のやうに馳せ下る鳶の衆、直密一尺五六寸、山から伐り出したばかりの二間もの丸太の上で、長い鳶一本を命の棹に、ひとつ平均運動の足踏みを誤れば、身体は岩に碎けて木屑微塵とならうといふ危ない騒音、勿論落差一丈もある激流の淵をのり切る時には、丸太は蹴立になり、身体は放り出されてしまふ、しかし放り出された瞬間またもとの自分の材木にちゃんと乗つかつてゐるといふみごとなる早わざ、さすがは日收七圓、修業十年の後始めて一人前になる度胸商賣です、スピードと意氣の花「浪以前」を承るこの高梨の鳶、那賀川上流に今どつと二千人とはいかがです……東の方々！【提案者兵庫縣川邊郡立花村室岡近衛氏



奔流の中の男一匹、阿波のくに那賀川の「一本乗り」こそ東日本の讀者諸君にぜひ一度はお見せしたい水邊の戦慄です、蝦

新力水問答

翁は文久二年八十四歳の時石黒子爵の十八歳の時片貝村に其塾を訪ひ數日滞在したる。其時老妻を携へて來た。八十四翁山樵の書幅中往々筆線の震へてゐるのを見受けるが却て雅趣がある、併し老衰せるを示すものであらう、八十翁といふのを見受けぬが無いのでは無からうか、八十五の文久三年三月十八日吉田卜居の地で病歿せられた、富所尙猷之を法化堂村願成寺の富所家の墓前に葬り翌元治元年五月墓石を建てた、碑の文字は門人丸山恭齋(宗軒)の筆で釋樂水墓としてある。

正面
釋樂水墓
山樵長尾氏俗稱直次郎

側面
文久三年癸亥春三月十八日卒行年八十五歲也
元治元甲子年五月日
富所尙猶建之

墓石は正面幅九寸高一尺二寸で三段の礎石の下にある、先年竹木の根に荒され崩れかゝつたのを私は吉田村教育會に謀り舊形に復し崩れないようにした。

大正十年吉田町教育會は翁の碑文を燕町霜島登氏の手を煩はし石黒子爵を介して鹽谷時敏先生に選文を依頼して十月に出來て來た、併し建碑費莫大を要すること今尙は實現し得ないのは遺憾である。

長尾秋水碑

越之善詩者曰秋水。而秋水非詩人也。特其所詠。海城一絕。膾炙人口。而詩名遂高於天下。初文化中。北海告警。志士爭跋涉探究。論海防一策邊備。及安政初。幕府遣使與俄人訂疆界。以五十度爲限。秋水所謂五百里者。雖未審其的指何地。亦可知其所期矣。明治辰巳役後。繼以俄國內訌。自勘查加白峽之間。制海之權。率歸我掌握。北辰建標。庶幾見其實矣。於是越人始服秋水曠識遠見。驟加景慕。至與釋良寬竹内式部並稱有三偉人之目。秋水村上人。名景翰。長尾氏。其先景澄。爲上杉景勝將。有功。子孫世仕堀氏。至景行有五男。秋水其第二子。爲人狷介重氣節。少游四方。與諸名士交。嘗抵松前。觀北男跳梁之跡。憤慨不止。作北海雜咏廿首。海城篇其一也。秋水既不得志於當世。益放浪山水。遂航鎮西。望琉球鬼界。還留攝播間數年。與貫名海屋梅辻春樵河野鐵兜等。以詩唱酬。復歸村上。窮益甚。人勸之仕。不肯。喜畫墨竹。署王暮秋。以自給。年八十五。歿於吉田村富所尙猷家。秋水不畜妻子。晚置一婢。供浣濯縫之事。尙猷爲經紀其喪。葬願生寺。願良寬以窮丐死。式部以鼠貶死。近時皆建碑表顯之。獨秋水未也。於是吉田町教育會唱議。立石其地。介石黑君忠憲。請文於余。遂摘其詩句。而論次之。仍爲之歌曰。

明治大帝親大權。拓荒柔遠曠無前。自西自南悉思服。聲教且被窮朔邊。何啻五千三百里。分界植表費雕鏤。野人蠻落狗奴國。冰封雪閉暗夜天。弁裳瓣髮驅孤鹿。酪漿磊磊極腥羶。慕我王化畏我武。獸珍貢異競周旋。翻憶往時憂國士。百年傳唱海城篇。近傳華府弭兵說。回顧海牙今幾年。狡蘇點張肆詭辯。七國縱橫互變遷。嗚呼鐘鏢可鑄兮鐵疆可燬。勿教日本刀鈍如鉛。

植六時代から花屋敷まで

本田 青花

【一】

現在、淺草六區の興行街にある劇場で、維新前、既に其の前兆を見せてゐたものは、云ふまでもなく花屋敷だけである。しかし、其の歴史ある花屋敷も、今や風前の燈の如く消え去らんとしてゐる。此の時に當つて、過去の情勢を顧みることが、誠に興味の深いものでもあり、且つ又、忘れ易い大衆の爲めにも、よりよき同伴の一つでもある。

何れにするも維新前に於ける花屋敷は、無論、見世物としての存在ではなくて、寧ろ植木屋としての存在であり、その庭園の一部でもあつたのだ。しかし、其の頃の植木屋としては、とても広い庭園であり、又見事なものでもあつた。つまり初代の主人公、植木屋六

兵衛氏は、普通に見る植木屋と異なり漢書を能くし、其の始め傳法院に於て輪王寺宮殿下の直屬として仕へてゐた人であるから。従つて庭の手入れも金銭を度外したものが多かつたのだ。

今更ら云ふまでもなく傳法院は、其の頃、寛永寺の別院になつてゐたのでとても格式を持つてゐたもので、同院前の仲見世を御殿前と稱してゐた程だ。殊に其の頃として境内の一部に於て植木屋を始めるが如きは容易なことではなかつたのだ。

處が輪王寺宮殿下から、土地をこゝに賜つたので、嘉永年間に於て、老後の娛みの一つとして植木屋を始めたものだ。無論、其の頃の庭園は、今日の花屋敷以上に廣く、とても素晴らしいものであつたのだ。そんな譯けで將軍

家などが、淺草寺へお成りになつた場合は、必ずこゝで休息されるのが例であつたのだ。文獻にも將軍家が、こゝで休息された事實が残つてゐる。

【二】

維新後になると、二代目の植六つまり植木屋六三郎氏が、先代の跡を繼ぎ、こゝで植木屋を續けてゐたのであるが、彼氏も亦、父に劣らず庭園の美を凝らしてゐたのである。

全く庭園は廣く、とても大仕掛けなものであつたから、道行く人や、觀音様に參詣した人達が、垣根越しに覗き込んでゐた。其の美しさに見とられてゐたのであつた。そんな譯けで彼氏は、益々道樂心を起し變つた庭を造つたのだ。殊に六兵衛氏は、漢學の大家でもあつたから、珍らしい草花などを注文するに便宜もあつた。

そんなこんなで變つた草花なども次々と増して行つたので、其の頃ちよつとしたことにも興味を覺へる大衆は、益々垣根越しに覗き込むのであつた。

で、其の後かうしたことからヒントを得て多少の料金をとつて、大衆の觀覽に供するやうにしたのである。つまりこれがそも／＼今日の花屋敷の存する所以である。無論、その頃は花屋敷とは云はず、植六と呼んでゐたのである。云ふまでもなく植六は、植木屋六三郎の略語である。しかし、其の頃から植六は、奥山に於ける一つの名物ではあつたが、其の内容は、矢張り一つの大仕掛けな庭園のみが見世物で、變つた樹木や、珍らしい草花や、更らに變つた新しい庭造りとか見ものであつたのだ。だから公園地の完備した今日としては、決して珍らしいものではなく、況んや、料金など拂つて、其の美を賞め讃える者は、おそらく一人としてゐないであらう。だが完備した公園地のない當時としては、とても人氣があり、又、珍しがられもしたものだ。

【三】

殊に公園地が改正されるに及んで、

其の土地の権利が山本某なる人に移つた。そして、それと同時に、從來の草木許りでなく簡單な見世物などがおかれるやうになつた。又多くの建物も築造され其の名も花屋敷と改められたりしたのである。

昨年花屋敷が、滿五十年紀念をやつたのもつまり此の時から起算したもので、大瀧氏個人の經營に移つたのは、それからづゝと後の明治三十三年のことである。尤も見世物本位に見る時は大瀧氏の個人經營に移つて始めて、本格的になつたものと云ふことが出来る。兎に角、先代大瀧勝三郎氏は、明治大正に於ける淺草の成功傳中の一人であるだけに、仲々の器量人で、時代を見るの明のある人だつた。

それだけに、花屋敷に於ける見世物は、時代と共に移り、時代と共に進んで行つた。だから其の足跡を調べたら、確かに時代的な推移を知ることが出来るであらうし、又興行上に於けるよき参考資料ともなるであらう。

齒は萬病の因
迅かに治療せられよ

齒科一般

願成寺醫院

足立區千住旭町四七

眞成堂醫院

足立區梅田一七五〇

新刊書籍雜誌

エロス堂書店

淺草 千束
二丁目通り

昔の花屋敷を語る

井口政治

× 最近の演劇新派に柳永二郎君が「明治から昭和へ」といふ題で浅草十二階の話をしてゐる。な雑誌から抜粋して面白く書いて居られるが、例の十二階飛下り事件が四回に亘つてあつた事に就ては一行も觸れて居ないのは残念であつた。

明治時代の浅草の名物は十二階(凌雲閣)と花屋敷の二つで江川の玉乗りは五二郎劇となり、新しい名物なら笑の王国でもエノケンでも乃至漫才やレヴュー、劍劇と数多いが、凌雲閣は震災で頽れ落ち僅かに市バスの女車掌が「十二階下」と呼ぶのみで大正十二年九月二十三日弘前工兵大隊が市橋少佐の指揮で爆破作業を終へて以來其の姿を

消したが、其隣りの花屋敷は先頃仙臺動物園に、一萬五千圓で動物類全部を賣却し去る三月二十五日積出しを終へ四月六日から閉鎖して今では何時開園の運びに至るか見當がつかないのである。

× 地代壹千五百圓、他に雜費壹千五百圓で閉めて置いても三千圓はかゝる上に齒がないライオンでも一頭留守番をして居るのであるから遊園地としてスポーツランドと演藝場で近々に開園の運びに至るであらう。

× 前置きが長くなつたが、私は花屋敷の震災迄の歴史を書いて石角さんから依頼された原稿の責をふさぐことゝする。

浅草公園で最も古い歴史を有する観覽場は花やしきであらう。

× 公園第五區に屬し、一番地より四番地に跨る(舊りの二十四番地)敷地千七百坪、周圍に建仁寺垣を纏ひ、園内四季の盆栽を陳列し、又鳥類魚鱸を畜ふ、名にし負ふ奥山閣の四層樓高く聳え、金鷄長へに臺上に宿し具さに雅趣あり。

× 嘉永年間植木屋六三郎(此人支那風の書を能す)始めて此園を開き、四時草木花卉を培養し從覽に供したりき、園内に料理店あり新昇亭といふ。

× 聞く六三郎は夙に、輪王寺宮殿下に仕へ奉り地を此所に賜り始めて此園を

開き花屋敷と稱す。

× 明治十七年に至り公園地改正の際、現今道路藤棚並びに蓮池茶圃など同人の構ひなりしを狭められしなり。

× 明治十九年中該所悉皆山本松之助なる者買請園内を修繕し、同二十一年本所堅川町なる材木商信濃屋傳兵衛(俗稱信傳)所有に關する木造瓦葺五階家一棟を買取、奥山閣と稱す(此建坪數四十六坪二合但二階建四十七坪八合、三階建十一坪二合五勺、四階建三坪七合五勺、五階建二坪)之を會社法に組織し料理店を開業(後閉業)す。(明治三十年四月風俗畫報新撰東京名所圖會所載)

× 此二十一年から從覽券を發賣したのであつて、五層樓は信傳が明治大帝の御光臨を辱なふする爲に丹精込めて作りあげたので、信濃傳の娘が黒田清隆の愛妾であつたところから莫大な金で作つたのであるが、残念乍ら大正の震災で焼失した。

× 明治二十七年駒井榮次郎、二十八年鶴岡常親から岡山場へ、二十九年秋佐藤秀夫と轉賣され、次で佐藤の手から先代松崎權四郎(米商)岩崎宗吉(黒船町鶴岡眼鏡店)佐藤覺次郎(新猿屋町米商)外谷辨次郎(米商)の四人が譲り受け、三十年から、植木の他に鶴、猿、熊、三公と名付けた虎を飼育、入場料は大人六錢、小人三錢であつた。

× 三十三年合資を解散し、改めて大瀧勝三郎と外谷の共同經營としたのが、今日の大瀧の經營となつた最初で菊細工から發展し菊人形「鶴退治」「寺小屋」を安東龜八が作つたのが、花屋敷菊人形の最初で、五階樓では日本最初の蓄音器を北村福太郎が係りで聴かせ、下足は二錢であつた。或時は七八人の氣高い御婦人が腕車で乗りつけ御重話を聞き等して蓄音器をお聞きになつたが車夫に聞いて伏見宮妃殿下とのことに同園では恐懼措くところを知らなかつ

たといふ話もあり、西郷從道侯や先代菊五郎、左團次等も聞きに來られた。

× 三十六年九月大阪の博覽會が終ると動物の全部を花屋敷で引取つたが、有名な狒々の來たのも此時で警察からのお達しで、狒々の四方を板で圍み疾妬を防いだりした。

× 象の曲藝も此時見せ、更らに昨年邊り流行つた幽霊大會の魁をやつたりし

— 地士・理管 —

鳥山七郎右門
鳥山七郎右門
東京市神田區須田一丁目十一番地
電話 七七一五

昔の花屋敷を語る

井口政治

た。東照宮の模型と日光蓄音機が入替り下足は一錢になった。

三十七八年頃『月の世界』と『ツツ家』のパレシオンをやり、續いて操り人形と山雀の藝が始められたが、明治三十五年三月一日から樋口角兵衛一座で芝居を始め入場料は十錢と値上され、それから七年の間に大人十五錢迄に値上されたが、大正八年十二月の二十錢になった時は、花屋敷合資會社になった時で、十年十月の好景氣時代から四十錢の入場料になったのが、昨年末から、半額の二十錢となったのである。

櫻を植ゑたのは震災の年だと思ふが明治四十三年迄は一直の出張所といふものが園内にあつた。

此處まで書いて居る中に與へられた五枚に達したので、筆を擱くが花屋敷の歴史を書くのでは未だ仲々話は盡きないのである。

在りし日の花屋敷

馬上ふじ枝

餌籠を手たぐり食ぶる猿みつゝしばしを忘れたわむれぬたりいとしきは猿の仕業よ人參の皮を剥ぎつゝ喰みぬるさまはしぶきたて餌を欲りゐる巨アシカの聲はとごろく屋敷の外に食物を争ひ食はんとたけりたち檻ゆるぎつゝ喰る白熊檻中にゆたにまろびねするしゝの背には麗と春陽さしおり何物かねらふが如く黒ヒョウは眼鏡どにゆきゝせわしも夜中に目覺めてさけり街の夜のしゝまに傳ふ猛獸の聲動物の唸も絶へて今はたゞあたりひそけし花屋敷跡水鳥も小鳥の聲も空しきよ今はいつこに囀りおらむ



曉明 の 槍ヶ岳

新編



神農氏因田教田辟土種穀以振萬民

新編

